

機動戦士ガンダムSeeD DESTINY～ANOTHER DESTINY～

Pledge

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

長きに渡るプラントと地球連合軍の戦争は、両軍のタカ派の死亡を以つて終了した。だが、すべての戦争の火種が消えたわけではない。未だに戦争の火種はくすぐり導火線に火が付けば、瞬く間にそれは戦争へと発展してしまう。だが、それでも人々は平和を享受する。わずかな間とはいえ、今の平和を。

戦争が終わつたとはいえ、ただ平和を謳歌できない者たちもいる。彼も、その一人だった。再び世界中を包む戦火を前に、彼は戦場へとその身を投じる。己の信念を胸に。

目 次

原作前

プロローグ

Operation | 1 招かれざる訪問者

人物紹介

機体紹介

Operation | 2 逆転の賭け

Ex Operation | 1 望む戦い

Ex Operation | 2 取り戻せない過去

Operation | 3 保持者

Operation | 4 極秘任務

Ex Operation | 3 影に潜む者

Operation | 5 監視者

Ex Operation | 4 伽藍洞に吹く風

Operation | 6 燐ぶる火種

原作開始

Operation | 7 怒りの炎

Operation | 8 戦火を呼ぶ者

## 原作前

### プロローグ

「プラント」首都アブリリウスにある上級裁判所内に、大勢の【Z A F T】兵の姿があつた。

本日、この場所では【ユニウス条約】で決定している戦犯裁判を行われる。集まつている【Z A F T】兵たちは裁判を見守るためにいるのではなく、裁かれるためにここに居るのだ。

「では、これより、【ユニウス条約】に従い【プラント】内における戦犯裁判を開廷する」

そしてついに、ギルバート・デュランダル新議長をトップとした【プラント】の戦犯裁判が始まるのだつた。

裁判長により読み上げられる戦犯者の氏名。その数は百名ほどに達した。

「なお、ラウル・クルーゼ、レイン・エルミーラは【プラント】に反逆し地球軍に【N<sup>ニュートロンジャマーキャンセラー</sup> J C】を故意に漏洩させたとして、本人死亡のままA級戦犯とする」

裁判長によつて読み上げられた、【プラント】を最大の脅威に陥れた二人の罪人。二人は死亡のまま一番上のA級が適用され、永遠に【プラント】の歴史に名を刻まれることになる。

「以上である。では、これにて戦犯裁判は」

「異議あり！」

裁判長が裁判を終えようとした瞬間、部屋の中にぎゅうぎゅうに押し込められた兵の後ろから、一人の青年が歩み出てくる。

ややくすみがかつた肩上ほどの金髪に赤服。左胸に輝くのは【F A I T H】の徽章。【プラント】に知らぬ者無しと言われる彼だつた。予想通りの人物が歩いて来るのを見て、裁判の様子を見守つていたデュランダルは小さく笑みを零す。

「どういうことだ、彼らを裁くというのは」「戦犯者を裁くのは当然。何か問題が？」

「問題だと？・大ありだ、無能が！」

裁判長の心の底から不思議という問いかけに、彼は裁判長に向けてそう吐き捨てる。無能と侮辱された裁判長は、言われた言葉を理解してか徐々に怒りで顔が紅潮していく。

「む、無能だと？」、この私が？」

「何度も言わせるな、無能」

怒りで頬を引きつらせ、聞き間違いかと思い再度問い合わせる裁判長。だが、返ってきた答えは同じものだつた。

だが、裁判長がそう思うのも仕方ない。上級裁判所の裁判長になるのは、コーディネイターの中でも一握りの存在。だからこそ、エリート意識というのが強かつたのだ。

彼は裁判長から視線を外すと、裁判長の両端に座り裁判を見守つていた評議会の議員たちに目を向ける。

「彼らが戦犯だと？・ふざけるのもいい加減にしろ！彼らは貴様らの命令に従い、死の恐怖と戦い【プラント】を護るために戦つた英雄たちだ！」

彼は自分の後ろに立つ大勢の【Z A F T】兵たちを見た後、議員たちに語り掛ける。今回の戦争は侵略戦争ではなく、あくまでも【ユニウスセブン】に核が撃ち込まれたことによる報復のための戦争。

無論、コーディネイターとナチュラルの関係がそれまで良好だったわけではないが、本格的な戦争に発展した最大の理由と言えることは確かである。

「貴様らが今そうして座つていられるのは、誰のお陰だ！前線で命を懸けて戦い、命を散らした者たちがいてこそだ！こんな当たり前のことも分からぬ貴様らに、国のトップである資格など無い！」

先程までは小声で会話をしていた議員たちも、いつの間にか静まり返り黙つてレオハルトの言葉を聞いていた。議員たちだけでなく、それは後ろの兵たちも同じだった。

「……」

兵の中にはイザークとディアツカの姿もあり、二人は一様に似たよ

うな表情を浮かべる。二人の胸の内は同じ。命を散らした仲間を想い、唇を噛み締める。

「どうしても彼らを裁くというなら、戦争初期から前線で戦い多くの命を屠った俺も裁かれるべきだ！【F A I T H】であることなど関係無い！」

誰一人口を開かず、この場に集まつた人間の視線すべてが彼に向けられていた。そして彼の視線は、静かに見守っていたデュランダルに向けられる。

叫ぶように訴えた後、彼は【F A I T H】の徽章を荒っぽく取り外し捨てた。その行動に、議員たちは一様に驚愕の声を上げる。

だが、当の本人はそんな議員たちのことなど無視し、笑みを浮かべるデュランダルに視線を向ける。デュランダルはその視線に気づくと、静かに立ち上がった。

「彼の言うことも尤ものようだ。彼らは【プラント】に住む我々のために戦ってくれた英雄たちだ。そんな彼らを、裁くことに意味は無い。謝らせてほしい。今回は、私の判断が間違つていたようだ。申し訳なかつた」

デュランダルは真剣な面持ちで言葉を投げかけると、【Z A F T】兵たちに頭を下げる。

デュランダルのこの言葉を最後に戦犯裁判は終了。解散することになるのだった。

戦犯裁判終了後、彼はデュランダルの待つ議長執務室を訪れていた。

「すまないね、呼び出してしまって」

「いえ」

「ふふ。では、本題に入ろうか。君の質問は分かつていて。何故、自分を戦犯から外したのか」

「答えて頂けますね？」

「もちろんだよ。戦犯裁判は【ユニウス条約】で決まつていて。建前として、やる必要があつたのだよ」

彼がこの部屋に入つてから、その表情から笑みを絶たすことなく諭

すようにそう答えるデュランダル。

それとは対照的に、彼は内心では苦々しい感情を抱いていた。

「建前だというのなら、私を外す必要は無かつたはずです。それも、建前でしよう。私に何をさせたいのですか？」

「察しが良いね。話が早くて助かるよ。これから君には、【最高評議会】の会議に参加してもらいたい」

「……理由を聞くぐらいは許して頂きたいのですが」

「無論、説明するさ。君はMS・指揮能力共に高く、政治方面にも長けている。だが、今まで一軍人だつたため政治への介入は出来なかつた。君という優秀な人間がいたからこそ、ザラ議長は自らの思い描く未来に進むことが出来たと思つていてる」

「私の存在が、ザラ議長の暴走を引き起こしたと？」

「そこまでは言わないよ。だが、責任の一端はあつたかもしれない」

一瞬笑みを消したかと思えば、再び笑みを浮かべ話を続けるデュランダル。自らの腹の内を決して見せず、言葉巧みに自分のペースに引き込んでいく話術。

デュランダルが言うように政治方面に長けているとはいえ、今まで軍人として生きてきた彼とデュランダルの経験の差というものは大きい。

デュランダルのペースに巻き込まれていてことを彼自身も理解している。だからこそ、その内心は非常に苦々しいものだつた。

「無論、その大部分を担つていたのはラウだつたと思うがね」

「…………」

「評議会の人間は机仕事ばかりだ。以前は現場にいたとしても、長くなれば勘も鈍る。我々を第三者として、客観的に見てくれる存在を求めているのだよ」

デュランダルの言葉に納得はするが、本来ならば戦犯として裁かれる立場にあつてもおかしくないという考えを彼は持つていてる。

そう考える彼にとって、デュランダルの提案は自身の昇進のように思えてならなかつた。

その考えを率直にデュランダルにぶつけると、デュランダルは小さ

く領いて見せる。

「確かに、考え方によつてはそうかもしれない。だが、私はそうは思わない。これは、『責任』と『義務』だよ。軍人としてではなく、これからも政治にも介入するのだ」

「…………」

「軍人として命令を聞く立場から、指揮官としてではなく時には政治の面から指示することにもなる。『責任』と『義務』は、これまで以上に重くなるだろう。この案件は、他の議員たちも了承済みだ」デュランダルは自分の意見を言い終えたのか、沈黙するレオハルトに視線を送る。レオハルトはデュランダルの視線を受けつつ、自らの内で考えをまとめる。

デュランダルの言葉通り、この件を引き受ければ『責任』と『義務』は飛躍的に大きくなる。レオハルトが背負う命も、これまで以上に多くなる。

同時にレオハルトは、自分の存在がパトリックの暴走の一端を担つた。この言葉は、レオハルトにとって凶星ともいえる指摘だった。

レオハルトはシーゲル・クラインがスペイではないと理解しながら殺害し、クルーゼに協力することで間接的にパトリックを支援したと言つても過言ではない。

「（これも、俺の罪か……）

「どうだろうか？」

「……わかりました。お引き受けします」

「ありがとう。引き受けてくれると思つていたよ」

デュランダルの提案を了承するレオハルトに、感謝の意を示し笑顔を浮かべるデュランダル。デュランダルは文官を内線で呼ぶと、何かを取りに行かせる。

文官が戻つてくると、その手には箱を持っていた。その箱を受け取ると、デュランダルはレオハルトに見せるよう箱を開けた。

「これから君は、【Z A F T】であり評議会のメンバーでもある。そのため、『これ』を用意してみた」

箱の中には、一着のコート。赤地に右肩から左脇腹にかけて斜めに

黒線が入っていた。デュランダルを始めとした評議会の議員たちが制服の上に着ている物と同じような感じである。

「会議に出席するときは、それを着てくるといい」

「了解しました」

「私としては、君には別の形で権限を与えたいくつも思っていたのだよ。独立部隊の隊長という形でね。だが、何事にも万が一というものがあるだろう？ 小心者の私としては、最後の一歩が踏み出せなかつたよ」柔軟な笑顔を浮かべて語るデュランダルだが、言っている内容は軽いものではなかつた。つまり、レオハルトの反乱の可能性を考えそれを恐れたということ。

言外にそうデュランダルは述べ、レオハルトに視線を送る。そう考えるのは、レオハルトが親友であるクルーゼを討つたという事実からか。最終的な命を奪つたのはレオハルトではないが、命を奪われる一端を担つたのは事実。

それとも別の理由なのかは定かではないが、デュランダルがその“もしも”的可能性を考えているということは確実だつた。

「そろそろ本題に入つたらどうだ、ギル」

レオハルトが不意にそう声をかけると、ギルバートはわずかに笑みを浮かべ話を切り出すのだった。

同時期

オーブ連合首長国

長きに渡る戦争を終え、「三隻同盟」と呼ばれているうちの一隻は地球のある場所にいた。先の大戦で地球軍の侵攻によりオーブ本島に甚大な被害を受けた、オーブに。

オーブの秘密ドックに併の艦、「アーケンジエル」がいた。この艦は本来なら、地球軍の所属艦。だが、故あつて脱走した艦。乗員も脱走兵である。

脱走は重罪として規定されており、捕まれば銃殺刑は免れない。そのため、【アークエンジエル】の元乗員たちの中には偽名を使う者も居り、それぞれの生活を始めていた。

海沿いに立つ家のデッキで椅子に座り、浜辺で楽しそうに遊ぶ子供たちを眺める二人の青年。戦争の中に生き、戦い傷つき生き抜いた二人。

子どもたちを見つめるその瞳は優しげながらも、瞳の奥底は悲しみで彩られていた。

「本当に良かつたの？」

「何がだ」

「僕たちと一緒に来て。君は、【プラント】で」「俺は【プラント】を裏切った身だ。居場所は無いさ。それに、お前たちと共に歩むと決めた」

キラ・ヤマト、アスラン・ザラ。

同じコードイネイターであり、親友。だが、再会した場所は命のやり取りを行う戦場だつた。かつては親友だつた二人は、互いに憎み銃を向け殺し合つた。

だが、その二人も今はこうして肩を並べて座り、共に平和な時を過ごしている。それぞれが何かを失い、ここまで来た。

「それより、あの話」

「……うん。あの人は、僕の兄。遺伝子上の話だけどね」

「遺伝子上とはいえ、兄弟に違いない。そんな運命を背負いながらも、あの人は確かな信念を。確固たる意志を持つて生きている。……だが、俺は」

【ヤキン・ドゥーエ】での戦闘の際、ラウ・ル・クルーゼより告げられた事実。それはキラにとつて確かに衝撃であり、戦闘中は動搖もしてしまつた。

だが、時間が経つた今となつてはどうということはなかつた。兄弟とはいえ、つながりがあるのは遺伝子のみ。これまで関係が無かつたのだ。情が湧かないのも当然である。

「アスラン。あの人は、迷っていたよ。迷いながらも、道を選んだん

だ。その結果、僕たちと戦うことになってしまった

「何故、そう言えるんだ」

「分からぬ……。何となく、かな」

「何となくか。……だが、そうかもしれない。だからあの時、俺たちを見逃したくれたのかも知れない。そう考えると、遠かつたあの人も身近に感じてしまうな」

次第に空は赤く染まり始め、水平線の向こうに沈もうとしていた。それでも、子どもたちは二人の視線の先で遊んでいる。

遊び始めてから数時間が経過しているはずだが、子どもたちに疲れている様子は無かつた。

「この平和が、いつまで続くんだろうな……」

「アスラン？」

「言われたよ。今この時だけの戦争を止めたとしても、意味は無いと。コーディネイターとナチュラルの確執が解消されたわけじゃない。いずれ、戦争はまた起きる。そう考えているようだった」

「確かに、そうかもしれない。……でも、意味はあったと思う。そういうじゃないと、僕たちは何のために……」

目を伏せ、その瞳に涙を浮かべるキラ。彼もまた、この戦争で多くの失つた。平和な生活、平和な未来、大切な友人。それでも、生きている以上は前を向き生きなければいけない。

キラは今にも零れ落ちそうな涙を強引に拭うと、アスランに向けて笑顔を見せた。

「前を向こう、アスラン。過去にしがみついてばかりではいけない。少しずつでも、前を向かないと」

「そう、だな……。それが、生きている俺たちの責任なのかも知れないな」

「うん」

「……願わくば、この平和が長く続くことを」

二人は、遊ぶのを止め家に笑顔で帰つてくる子どもたちを見ながらそう呟く。どうか彼らの笑顔が、消えないようにと。

だが、世界は平和を願う者達の願いとは裏腹に、再び戦火へと歩み

出すのだった。  
だがそれでも、今このときは平和な時を享受するのだ。

# Operation — 1 招かれざる訪問者

C. E. 72年4月。

【ユニウス条約】が無事締結され、戦犯裁判が終了してから約三週間。【プラント】のギルバート・デュランダル新議長は新たな戦火に備え準備を怠ることは無かつた。

失われた資源や物資も回復し始め、【プラント】は新たな力を得るべく動き始める。

「新型の次世代主力量産機開発、及び六機の最新鋭MSの開発ですか」「ああ。幸いにも、ベースは完成している。量産試作型があるからね。あれに改良を加えていけば、良いMSが出来るだろう」

「量産試作型。あれは惜しかつたですね。【ユニウス条約】で【NJC】が禁止されたから、仕方ありませんが」

「ああ。お陰で、せっかく開発した四十八機が無駄になつたよ。まあ、だから“アレ”的開発が何とかなつたんだがな」

【プラント】は一ヶ月ほど前、新たな量産試作機を開発していた。その機体は量産機ながらも【PS装甲】を有し、動力は【NJC】を使つていた。

だが、【ユニウス条約】により【NJC】は禁止されてしまつたためエネルギー不足により開発を中止。だが、動力として使用されていた【NJC】を解体し使用されている希少物質【ベーススマテリアル】を用い秘密兵器の開発を行つてゐる。

「コートニーは？」

「まだ傷が癒えないようだが、命に別条はない。彼には感謝しなくてはならないな。無論、君にも」

「護ることが出来たのは、コートニーのお陰です。私は何もしていません。私も、敵の策に嵌まつた一人なのですから」

「失態だと考えているのなら、次の任務で挽回してくれたまえ。私の予想以上の結果で」

「了解しました」

デュランダルの元を立ち去り、長い通路を歩きながらレオハルトは

思い出していた。

あれは、戦犯裁判が終わつてからすぐのことだつた。

「プラント」所属コロニー 【アルカナム】  
【プラント】が極秘裏に所有し、外装はデブリに偽装されたこのコロニーにあの男の姿があつた。

赤の軍服に身を包み、左胸には【F A I T H】の徽章を身に付ける【Z A F T】のトップエース、レオハルト・リベラント。唯一違う点は、以前までの真紅の髪ではなくややくすみがかつた金髪という点だつた。

誰もがその変化に疑問を抱くが、直接問い合わせるような猛者はいなかつた。そう思われたが、ついにその猛者が現れたのである。

「……」

レオハルトの視線の先には、短い間とはいえ自分が操縦し戦場を駆け抜けた相棒の姿。だが、その相棒、【F i n i s】の周囲には多くの人間と巨大な機材があつた。

「名残惜しいかね？」

「自分で開発した機体だ。それなりに、な」

突然背後から声を掛けられるも、レオハルトは驚くことなくその問い合わせに入る。質問をしてきた人物はレオハルトの目の前にガラスに映る、【統合三局】のハインラインだつた。

「解体するわけではない」

「だが、あの機体に乗ることはもう無いだろう」

「確かに。ところで、その髪は何だ？」

「これが」

ハインラインにそう聞かれ、レオハルトは視線を【F i n i s】から外さず呟く。ハインラインはレオハルトの隣に立ち、順調に進んでいる作業を見守る。

「ああ。髪の色が違つてているではないか。染めたのかね？」

「逆だ。染めていたのを戻しただけだ。この髪が元々だ」

「ほう……。心境の変化かね？」

「俺は過去をすべて受け入れたつもりでいたが、どうやら逃げていたようだ。すべての過去を受け入れた。それだけだ」

「……なるほど。さて、私はもう失礼するよ。それと、【F·i·n·i·s】は我々【統合三局】が預かる」

「そうしてくれ。俺が預かれる物でもないからな」

レオハルトは背中越しにそう答えると、ハインラインは小さな笑みを零し立ち去つていく。それからすぐにレオハルトも踵を返すと、数ブロック先の区画に向かう。

一つの扉の前で足を止め、自動ドアが開き中に入る。部屋の内装は先ほどまでレオハルトがいた場所とさほど変わりないが、特別ガラスの向こうにあるものは違う。

そこにあつたのは、以前までのカラーリングとは大きく異なりメタリックシルバーに塗装された機体が鎮座している。

【F·i·n·i·s】の前にレオハルトが乗機として使用していたJUPPITERである。

レオハルトがこの場所にいるのは、【アルカナム】で行われている研究の妨害に万が一敵が来た場合に対処する護衛である。

護衛というからには、機体が必要である。だが、【F·i·n·i·s】は核で動いているため【ユニウス条約】に引っ掛かり条約違反になってしまう。そのため、今まで使用していたJUPPITERを使用することになった。

だが、ここでもまた問題が出てくる。JUPPITERは戦争初期から中期にかけて使用された機体。当時は敵との性能差が大きかつたが、連合もMSを導入した今となつてはやや不安が残つてしまつ。

そうレオハルトは考えていた。だが、その不安はあつさりと解消される。レオハルトがJUPPITERに乗らなくなつてから、【統合三局】の人間がJUPPITERに様々な改良を時間が空いたときに施していたのだ。

その結果、最新鋭とまではいかなくても、それに近い性能を有する機体となつたのだ。それが、レオハルトの新たな機体、ZGMF-X

3 1 3 S E M J U P P I T E R F E R E T R I U S。

そして、その J U P P I T E R と並ぶ灰色の機体。あの機体は、Z G M F — X 9 9 9 A ザク量産試作機。「プラント」が量産機ながら初めて【N J C】を搭載した機体が四十八機製造された。それが、あの機体である。

さらに、P <sup>フエイズシフト</sup> S 装甲までも有する機体。だつたのだが、先日締結された【ユニウス条約】にて兵器への【N J C】の搭載が全面禁止となってしまった。【N J C】があつてこそその機体なので、製造された四十八機は解体されることとなつた。

レオハルトの目の前にあるザク量産試作機も、解体される運命にある機体。だが、この機体に実際に乗り、先の【南アメリカ】で起きた独立戦争において武勲を挙げたコートニー・ヒエロニムスの願いにより【N J C】は外されているが、解体は最後ということになつたのだ。部屋に入つたレオハルトは、ザク量産試作機をじつと見つめる青年に歩み寄る。

「やはり、名残惜しいですか？」

「共に戦つた相棒ですからね。ですが、それはリベラント隊長も同じでしよう？」

「軍属ではないのですから、普通に呼んで頂いて構いませんよ。レオで結構です。確かに名残惜しいです。兵器とはいえ、相棒ですからね」

「では、僕のこともトニーで構いませんよ。敬語も結構です。やっぱり、相棒ですからね」

コートニー・ヒエロニムス。

【Z A F T】に籍は無い民間人ながらも、これまでにテストパイロットとしてドレッドノートに乗つたこともある二十歳の青年。民間人ながらその実力は高く、並の【Z A F T】兵では太刀打ちできない戦闘センスを持つている。

「失礼。挨拶が遅れました。特務隊、レオハルト・リベラントです。話には聞いていましたが、こうして会うのは初めてですね」

「コートニー・ヒエロニムスです。こちらこそ……レオの噂はよく耳

にしますよ。お会いできて光榮です」

レオハルトは開発に関わったドレッドノートのテストパイロットとして名を知つており、コートニーもレオハルトのことはよく耳にしていた。

だが、こうして会うのは今日この時が初めてであり、話すのも当然ながら今回が初めてである。

コートニーはレオハルトを愛称で呼ぶことに若干の抵抗があるのか、それとも単純に慣れの問題なのか。レオという呼び方に少々の逡巡が見えた。

そのことにレオハルトは気付くも、それほど気にする様子は無く話を続ける。

「だが、トニーのお陰でこの機体は回収された後、【Z A F T】の次世代主力量産機となるだろう。資料を読ませてもらつたよ。トニーの提唱した兵装換装システムは興味深いな」

「ああ、あれですか……」

「様々な場面に対応出来るように、装備を換装するシステム。新たなMSを開発するより、より賢い方法だ」

「いえいえ、ただの思い付きですよ」

レオハルトの興味深いという言葉に、コートニーは苦笑を浮かべる。だが、レオハルトはコートニーの提唱した考えは、賢い方法だと述べた。

だが、それにもコートニーは謙遜の言葉と共に苦笑する。

コートニーの提唱した装備兵装システム。それは、一機のMSに数種類の装備を用意し、状況に応じてそれぞれの装備を換装し戦うことを目的としている。

それは、その局面に対応した新たなMSを開発するより、資金・資源・時間。あらゆる面においてその有用性を示している。

そしてコートニーの唱えたこのシステムは、後に【Z A F T】が開発する【ウイザードシステム】として残ることになる。

「謙遜しなくてもいいだろう。価値あるものだということは確かだ」「ありがとうございます」

レオハルトからストレートに褒められてか、コートニーは頬をかきつつ照れ笑いを見せる。

だが、それは突然にやつてきた。

それから数時間経ち、集められた技術者たちは四十七機のザクから【NJC】を取り出すことに成功し、さらには解体を完了。

そして、残るはコートニーの乗ったザクが最後となつた時だつた。突然、レオハルトとコートニーを激しい衝撃が襲い掛かる。あまりの衝撃の大きさに、二人は立つことが出来ず床に四つん這いとなってしまう。

「今のは!?

「良いことではなさそうだな」

「コンディション・レツド発令! コンディション・レツド発令!!」

状況を知るため、二人は【アルカナム】の指令室へと走る。その途中、【アルカナム】に敵が現れたことを知らせる警報が鳴り響く。二人は急ぐ足を速め、指令室に向かった。

指令室に入ると、数人のオペレータと共にハイインラインやアジモフの姿があつた。

「何事だ」

「招かれざる客のご登場だよ。先ほどの衝撃は、不明艦からの予告無しの攻撃だ」

「地球軍か?」

「かもしだ。だが、【ユニウス条約】が結ばれたばかりの状況で攻撃を仕掛けてくるとも思えん」

レオハルトの事態の状況説明を求める短い問い合わせに反応したのは、苛立たしげなアジモフ。その理由は突然の攻撃に対しても、それとも研究を邪魔されたことに対しても、恐らくは、後者だろう。

レオハルトはアジモフから視線を外し、ハイインラインに向か敵の正体について質問する。現状、【プラント】に敵対する国家といえば、やはり真っ先に思い付くは地球連合軍。

だが、【プラント】と敵対した各国家群は先日、【プラント】との間に【ユニウス条約】を締結させたばかりである。条約を締結しておきながら、このような暴挙に出るのかという疑問からハインラインは小さく首を振る。

「敵艦、照合データは？」

「該当パターン無し。まさしく、不明艦です」

「……」

「要求は無いんですか？」

レオハルトの質問にオペレータはそう答える。つまり、【Z A F T】のデータベースに登録されていない艦。新造艦なのか、はたまた地球軍とは関係のない組織の艦なのか。

それはハッキリしないが、レオハルトは一つだけ確信していることがあった。コートニーの敵からの要求は無いかという問いに、レオハルトは踵を返しながら確信をもつて答える。

「ここにあるもの、一つしかないだろう。【N J C】だ」

レオハルトは素早くパイロットスーツに着替えると、生まれ変わったJ U P P I T E Rのコックピットシートに着きベルトを締める。

「ハインライン局長、どうだ？」

「駄目だな。こちらの呼び掛けに何の応答も……。いや、今あつたぞ」

「何だ？」

「M Sを二機出してきた」

「ちつ！手段は選ばないか！」

敵が何者であれ、【N J C】を持つ者たちを見逃すわけにはいかない。レオハルトたちが生き残れば、様々な情報が流出することになる。それは、敵としても好ましくない。

だが、【アルカナム】が墜ち【N J C】が奪われたことが伝わるのは時間の問題。ならば、敵が取るべき道は自分たちの情報を出来る限り残さないこと。つまり、殲滅。

「ハッチ開放！出撃する！」

「良いのか？」

「敵がMSを出してきた以上、【アルカナム】の存在が知られていることは確実だ。むざむざと【NJC】を渡すわけにはいかない！」

「そうだな、その通りだ」

デブリに偽装されていた一部がスライドして開くと、そこからレオハルトのJUPPIITER<sup>ユーピテル</sup>が飛び出す。

出撃した瞬間、レオハルトはペダルを踏み込んでスラスターを噴かすと接近してくる敵二機に向かっていく。

以前よりも強化されたレーダーにより、JUPPIITER<sup>ユーピテル</sup>を捕捉。拡大して敵MSを確認すると、レオハルトは舌打ちする。「DUEL<sup>デュエル</sup>とBUSTER<sup>バスター</sup>の改修型か。敵はユーラシアか大西洋連邦か。どちらにしろ……）敵は地球軍か！」

レオハルトが敵を地球軍だと断定した頃、接近してくる二機のMSのパイロットもレオハルトの存在を認識していた。

「見つけたぜ！やつぱりここで当たりみたいだな！やるぜ、ミュー！ デイー！」

「援護頼んだわよ、シャムス」

「油断するなよ。あの機体、【ZAF<sup>T</sup>】のトップエース、レオハルト・リベラントの前の乗機の改良型に見える。なら、パイロットは」

「関係無いでしょ。やることに変わりないわ」

BUSTER<sup>バスター</sup>に外見が酷似したこの機体、GAT-X103AP  
VERDE<sup>ヴェルデ</sup> BUSTER<sup>バスター</sup>。

パイロットはシャムス・コーヴ。色付き眼鏡を掛けた十九歳の黒人で、コーディネイターを人外のものとして嫌悪している。

DUEL<sup>デュエル</sup>に外見が酷似したこの機体は、GAT-X1022 BLU<sup>ブル</sup>

DUEL<sup>デュエル</sup>。パイロットはミュードイー・ホルクロフト。

BLUDUEL<sup>ブルデュエル</sup>は【ZAFT】が開発したアサルトシユラウドや、連合が開発したフォルテストラを再設計した複合兵装ユニットを装備しており、追加装備されたスラスター・各種火器によつて機動力、攻撃力の向上に成功。

さらに、余分な装甲や構造材を簡略化し軽量化にも成功しており、

DUELよりも格段に攻撃力・機動力がアップしている。

これらの機体は、地球連合軍第八十一独立機動群——通称、「ファンタムペイン」——がアクタイオン・インダストリー社を中心とした複数の企業から技術協力を受け、エース用のMS開発計画——通称、「アクタイオン・プロジェクト」——に基づき、再製造され改修された機体。

レオハルトはJUPITERが元々装備していた40mmビームライフルの改良版、"MA-BAR7313 高エネルギービームライフル ジエガ"で先制攻撃を加える。だが、シャムスとミューディーは左右に別れて回避。

近接攻撃が主体となるBLU DUELが前面に突出してくる。レオハルトがミューディーに対処したくても、シャムスが己の存在を誇示するかのように遠距離から攻撃を加えてくる。

ミューディーはシャムスの射線に被らないよう距離を詰めてくるその動きは素早い。だが、この程度で容易くやられるようなレオハルトではない。

レオハルトはシャムスとの射線上にデブリが来るよう動き、ミューディーと一対一でぶつかれる状況を作り出す。

「ちつ！デブリが邪魔だ！！」

"ES05A ビームサーベル"を抜き斬りかかるミューディーに対抗し、レオハルトも天鳥船<sup>アメノトリフネ</sup>に代わる近接武器へと手を伸ばす。JUPITERは左肩のアーマーに内蔵されている、"MA-MM3 13 インティ ビームサーベル"を抜剣。JUPITERでは初のビームサーベルである。

インティを手に、レオハルトはミューディーに向かっていく。ミューディーが振り下ろしたビームサーベルを軽やかに避けつつ背後に回り、インティをコツクピットに向けて突き出す。

「！」

だが、その攻撃は防がれてしまう。BLUDUELの右肩に装備されている、"M443 スコルピオン機動レールガン"が旋回しレオハルトに銃口が向けられる。

レオハルトが即座にその場から離脱した瞬間、スコルピオンからレールガンが発射される。続けて、ミュードイーは振り向き様に左肩部増加アーマーのラック内に格納されている „Mk315 スティレット投擲噴進対装甲貫入弾“ を投擲する。

投擲されたステイレット——短剣の一種——は三本。だが、レオハルトは冷静に „MMI—GAU2ピッキオ 74mm近接防御機関砲“ でステイレットを撃ち落とす。

続けてレオハルトは、 „JDP8—MSY0540 ゲイ・ボー“ の改良型として装備されている、三つ折りにして背部に収納された „MA—313ビーム速射砲 ミスラ“ を両肩に展開。レオハルトは続けて二回引き金を引き、四発のミスラを発射する。

「くっ！」

ミュードイーは „対ビームシールド“ でミスラを防ぐと、ビームサーベルを収納し „M7G2 リトラクタブルビームガン“ の照準をレオハルトに付ける。

マシンガンのように連射されるビーム。デブリの隙間を縫うようにして回避していくレオハルト。だが、先ほどのシャムスと同様にデブリが射線上に入つたため止む無く攻撃を中止。

逃げたレオハルトを追うべく動き出したミュードイーの正面に、突然レオハルトが現れる。

「!？」

コツクピットシートに座るミュードイーの目に、不気味にモノアイを光らせる „JUPPIER“ が映る。その不気味さに、ミュードイーは息を飲む。

「これで一機。……っ！」

「ミュードイー!!」

レオハルトは零距離でミスラを撃ち込もうとした瞬間、コツクピットにアラートが鳴り響く。遠距離から発射された、 „VERDE BUSTE“ の „94mm高エネルギービーム砲“ による横槍が入る。

レオハルトは即座に後方へと退くが、シャムスは接近しつつ両腰に

装備された大型ビームライフル“M9009B 複合バヨネット装備型ビームライフル”を連射しながらミュードイーの援護によく到着する。

改良前の両者の機体の特性を知るレオハルトとしては、近距離と遠距離で連携されたら厄介なことになるのは確実。そのため、早々にどちらかを撃墜することを考えていた。

まだ戦闘開始から十分ほどしか経っていないが、レオハルトが当初抱いていた考えを修正する。レオハルトの予想以上に、敵パイロットの技術は普通のナチュラルに比べたら格段に高いのだ。

簡単に倒せると思っていたわけではないが、レオハルトの予想より敵もMSも優秀なのだ。レオハルトは一機が揃つたことで面倒なことになつたと考えると共に、一層気を引き締める。

「（中々厄介だな）だが、負けるつもりも無い」

レオハルトは思いを口にすることで自らを鼓舞すると、操縦桿を倒しちペダルを踏み込む。それを見て、シャムスはバヨネットを平行に連結して長距離用の連装キヤノンモードにし連射。

「コーディネイターが!!」

周囲のデブリを粉碎しつつ、レオハルトに迫る連装キヤノン。だが、レオハルトはすぐにその場を離れる。だが、シャムスの目的はレオハルトに当てるのではなく、周囲に浮遊するデブリ群の除去。

連装キヤノンに続けて、シャムスはBUS<sup>バスター</sup>と同様に両肩に装備されている“220mm多目的ミサイル6連装ポッド”を発射。ダメ押しとばかりにデブリを除去していく。

シャムスの攻撃もあって、デブリは大分破壊され見通しがかなり良くなつた。その状況を見て、再びミュードイーが仕掛ける。

やや上から距離を詰めてくるミュードイー。そして、見通しが良くなつたことで遠距離からはシャムスの援護射撃が実に効果的だつた。ミュードイーは所々でフェイントを織り交ぜつつ、シャムスとの連携でレオハルトを確実に追い詰めていく。レオハルトもどちらかの撃墜に動くも、必ずどちらかが牽制しカウンターを仕掛けてくるのだ。

それほどまでに、二人の連携は巧みでレオハルトにとつては厄介なものだつた。

「（ちつ、厄介だな……!!）」

レオハルトがそう思つた時、JUPPI<sup>ユ</sup>T<sup>ピ</sup>E<sup>テ</sup>R<sup>ル</sup>が新たな熱源を感じする。

「（新手!?いや、違う。向かつてているのは……【アルカナム】!?まさか、こいつらは！）」

ミューディーが振り下ろしたビームサーベルを切り払い、シャムスの撃つたバヨネットを機体をバレルロールさせて避けつつレオハルトは唇を噛む。

「（失態だ……！こいつらは、俺の足止めか!!）」

## 人物紹介

氏名	レオハルト・リベラント (ゼファー・ウェーガー)
人種	ネオ・コーディネーター（一世代目）
誕生日	C.E51年6月19日
星座	双子座
B型	血液型
年齢	22歳（原作年）
身長	177cm
体重	67kg
瞳	ルビー
髪色	ややくすみがかつた金髪
好きな食べ物	イタリアン
趣味	M.S設計（本人曰く、ヘタの横好き）
特技	ハツキング
軍服色	赤服

出身  
メンデル

所属

特務隊【F A I T H】  
【W I A】長官

最高評議会特別議員

父親

アル・ダ・フラガ  
ユーレン・ヒビキ

母親

ヴィア・ヒビキ

備考

前大戦で多大な戦果を挙げ、【Z A F T】だけでなく連合にもその名を轟かせるトップエースパイロット。

本人は隠していたが、実際は異なる男性の遺伝子を配合させた後、卵子と体外受精させ世界で唯一の【ネオ・コードイネイター】としてこの世に生を受けた。

遺伝子配合された男性とは、アル・ダ・フラガとユーレン・ヒビキの二人。そして、卵子の持ち主はヴィア・ヒビキ。そのため、ヒビキ夫妻を実の両親に持つキラ・ヤマトとは、半異父兄弟ともいえる存在。だが、テロメアに致命的な欠陥があり、ある時を以って老化が急速に進行し死に至るという事実が確認された。

ヤキン・ドゥーエ最終決戦での戦闘の際、ラウ・ル・クルーゼによりキラ・ヤマトに対して真実を暴露され、背負わされた運命を呪つたクルーゼの復讐の誘いを断り、追い込まれ負傷するも反逆者クルーゼを撃墜。

戦争終結後、新議長となつたギルバート・デュランダルにより新たに設立された情報部の長官に就任。さらには最高評議会議員も兼任することになり、武官と文官という相反する職も務めることになった。

これらの職を兼任することになるも、あくまで自分は軍人という立

場は崩さず前線に出ることを主としている。

名前	オルジラフ・カルヴァン
人種	コーディネーター（二世代目）
誕生日	C.E53年11月25日
星座	いて座
血液型	B型
年齢	20歳（原作年）
身長	172cm
体重	61kg
瞳	琥珀
髪色	黒
好きな食べ物	ラーメン
趣味	人間観察
特技	格闘術・ピアノ
軍服色	褐色

赤服

出身

アプリリウス

所属

グラヴァー隊

備考

幼い頃から様々な格闘術を習い、あらゆる武術に精通している。

士官学校はアスランたちの世代の1期先輩に当たる。

士官学校はMS戦・ナイフ戦・射撃・爆薬1位、情報処理2位、総合

成績1位の主席で卒業。

性格は一匹狼で士官学校に在学中も人と関わることはほとんど無かつた。現実主義で理論的な性格をしており、教官とぶつかることもしばしばあったことから問題児として知られていた。

だが、興奮状態に陥ると周りが見えなくなってしまうことが多く、士官学校での模擬戦ではやり過ぎてしまつた。

士官学校卒業後はグラヴァー隊に配属。グラヴァー隊に配属後も性格は相変わらずだが、隊長のデイグ・グラヴァーのお陰か多少マシにはなつた。

強者との戦いを強く望んでおり、【ZAF T】に入隊したのも強者を求めた故のこと。

機体を自身のパーソナルカラーであるダークシルバーに染め、【銀狼】の異名で知られる。【ボアズ攻防戦】にも参戦し、大きな戦果を挙げ【ネビュラ勲章】に次ぐ【アストレス勲章】を授与されるなど、エースとしても名が知られる。

【第二次ヤキン・ドゥーラ攻防戦】にも参加し、その際にはアスランのJ U S T I C Eと戦闘。

序盤は拮抗した戦いを演じていたが、【S E E D】が覚醒したアスランにより両手両脚を破壊され敗北。

止めを差さなかつたアスランへの皮肉を口にし、遠ざかつていくアスランを見送つた。

戦争終結後に【F A I T H】への昇進を打診されるが、不向きだと

いう理由から拒否。グラヴァー隊への残留を決めている。

## 〔WIA〕

備考  
〔World Intelligence Agency〕。通称、〔WIA〕。

〔ヤキン・ドゥーエ戦役〕の際には別の形で存在していたが、隊長を務めていたバルドリッヒ・ゲヴェールの死亡により、〔プラント最高評議会〕の新議長に就任したギルバート・デュランダルにより改編が行われレオハルト・リベルントが長官に就任。

長官に就任したレオハルトは、瞬く間にバルドリッヒ亡き後の情報部を圧倒的なカリスマ性により掌握。

〔WIA〕を4つの部署に分けた。

### 第一課。

涉外担当であり、他組織との調整や〔WIA〕の窓口として設立。

### 第二課。

国外専門の諜報を担当し、通信の傍受・暗号解読などを行っている。

### 第三課。

国外を専門とする第二課とは違い、国内専門の諜報を担当。不穏分子の洗い出し、選定などを行っている。

### 第四課。

〔WIA〕の実働部隊として存在し、第三課が突き止めた不穏分子の排除や、MS部隊も存在しており前線に出ることを主としてしている。

### 第零課。

この課はレオハルトがデュランダルにも極秘裏に設立した課で、汚れ仕事を担当している。

要人の暗殺や拉致、他国での戦闘行動の際にも動くことがメインとしている。〔プラント〕の利益のために動くことを最優先としている。

以上のようにレオハルトは〔WIA〕を改編。総数はおよそ、五〇〇名弱。

第零課の人数は約四〇名程で構成されており、そこからさらに三〇

五名で一個班を組み作戦活動に従事している。

約五〇〇名で構成されているため様々な人間が所属しており、極少数ではあるがレオハルト個人に忠誠を誓う者もいる。

氏名

アイザック・クーロン

人種

コーディネーター（四世代目）

誕生日

C.E.31年9月27日

星座

さそり座

血液型

O型

年齢

42歳（原作年）

身長

187cm

体重

78kg

軍服色

白服

所属

【WIA】筆頭補佐官

備考

過去の戦闘の際に大怪我を負い、左手を義手・右目が義眼となつた偉丈夫。

バルドリッヒ・ゲヴェール討伐の際には、最高評議会議長に就任していたギルバート・デュランダルが渡りをつけ、情報部内の協力者としてレオハルトに助力。

【WIA】へと改編後は、組織のN.O. 2の筆頭補佐官に就任。レオハルト不在時は、代理として【WIA】の指揮を執る。

大怪我を負い年齢を重ねても衰えない、老練な技術でレオハルトをサポートし【WIA】の運営に貢献している。

氏名

アーネスト・ラザフォード

人種

コーディネーター（三世代目）

誕生日

C.E50年1月1日

星座

やぎ座

血液型

A B型

年齢

29歳（原作年）

身長

172cm

体重

61kg

軍服色

黒服

所属

【WIA】次席補佐官

第零課課長

備考

情報部時代からその飘々とした立ち居振る舞いから問題児とされていたが、実力は1級品と折り紙付き。バルドリッヒ・ゲヴェール討伐の際にはアイザック・クーロンの指

名により偽装部隊の隊長を見事に務め、バルドリッヒを見事に騙した。

【WIA】へと改編後はレオハルトに働きを評価され、アイザックに次ぐ次席補佐官へと就任。さらに、レオハルトにより課長クラスしか知らない、第零課課長へと就任。

零課はレオハルトが秘密裏に創設したため、レオハルトの直接の命令によつて動くことが多い。任務内容も秘匿されており、内容を知っているのはさらに極一部に限られる。

アーネスト個人としてはレオハルトのことを軍人として尊敬しており、【プラント】のために動くという姿勢に強く共感し、そのための力になりたいと考えている。

姓	ウルライン・ターフエン
人種	コーディネーター（二世代目）
誕生日	C.E50年7月31日
星座	しし座
血液型	A型
年齢	23歳（原作年）
身長	170cm
体重	49kg
軍服色	黒服

所属

## 【WIA】長官付書記長

備考

外見では性別が分からぬ男装の麗人で、潔癖症なのが常に白い手袋を装着している。

レオハルトが自分の補佐官を探していた際、自薦で自らの能力を見せつけ補佐官に任命された。

元々は情報部に所属していたため、情報としてレオハルトのことは認識していた。その際、レオハルトの目を疑うような戦果を見て、次第にレオハルトのことを尊敬するようになっていく。

その後も積み重なっていくレオハルトの功績を前に、徐々にレオハルトのことを尊崇し神格化していく。

今ではレオハルトの命令を絶対のものと捉えており、他の【WIA】の人間とは一線を画す存在である。

## 機体紹介

名称 JUPPITER FERETRIUS (最終型)  
型式番号 ZGMF-X313SEM

全高

17.91m

重量

71.58t

武装

MA-M313 インティ ビームサーベル

MA-BAR7313 高エネルギービームライフル ジエガ

MA-313R ビーム速射砲 ミスラ

MA-XME434 アムルタート ビームクロー

MMI-GAU2 ピッキオ 78mm近接防御機関砲

MMI-RG59 機動防盾

搭乗者

レオハルト・リベラント

開発者

統合三局

備考

レオハルトが【ヤキン・ドゥー工戦役】中盤から新型MSの開発のため前線に出なくなり、それからすぐに新型機FИНISに乗り換えたことでJUPPITERは解体されることになっていた。

だが、【統合三局】が勿体無いという理由からJUPPITERを保存し暇潰しに改良。その際、これまでに培った技術で搭載している武装をすべて一新。【統合三局】の尽力の結果、性能は格段に向上し最新銃機と同等の性能を有するほどの機体になつた。

その結果、以前のJUPPITERとは別物になつたと言つても過言ではない機体になつたため、名称にも少々変更が加えられた。

型式番号のSEMだが、Sはセカンドシリーズを指しEMはExp erimental Model。つまり試作機を表しており、この機体は後に開発されるセカンドステージシリーズが装備する武装の評価試験の役目があり、<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>試作機であるとも言える。

S S S 完成後、JUPITERに更なる追加改修を行う考えがあつた。

具体的には新型動力である【デュートリオン送電システム】の搭載、コックピットなどの重要部に部分的ではあるが【VPS装甲】、各部のスラスター・バーニアの搭載などが予定していた。

諸々の事情により見送られる結果となってしまったが、<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S<sup>セカンドステージシリーズ</sup>Sにも搭載されている大容量バッテリー・パックの【パワー・エクステンダー】が追加されたことにより、ビーム兵装のより効率的な運用と長時間の稼働を可能とさせている。

さらに追加で搭載されたスラスター、バーニアにより高機動戦が可能となつた。背部に搭載された大型スラスターにより、大気圏内での単独飛行も可能となつていて。

## G<sub>ゲ</sub>U<sub>ア</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub> オルジラフ専用機

### 備考

通常の量産型のG<sub>ゲ</sub>U<sub>ア</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>を、オルジラフ専用に改良。

スラスター・バーニアを増設し、間接部分をオルジラフの操縦に耐えられるように改良。オルジラフの無茶な動きにも応えられる性能を有するようになつた。

名称	O <sub>ウ</sub> U <sub>ラ</sub> R <sub>ア</sub> A <sub>ノ</sub> N <sub>ス</sub> O <sub>ス</sub>
型式番号	ZGMF-X12S
全高	

17. 68 m

重量  
62. 18 t

装甲材質  
V P S 装甲  
ヴァリアブルフェイズシフト

パイロット  
レオハルト・リベラント

武装

M M I — G A U 2 5 A 2 5 m m C I W S

頭部に2門内蔵されるC I W S。

M A — B A R 7 2 0 高エネルギー ビームライフル  
中距離用の射撃武装として装備され、外装や照準用センサーなども  
含め高速戦闘にも耐えうるように設計。

M A — M 9 4 1 / S ヴァジュラビームサーベル

他のS S Sの機体と同武装。だが、機体の特性により専用に出力が  
調整。武装に回されるエネルギーが増加したことから、やや長く  
威力も高い。

M R — Q 1 7 X グリフオン2ビームブレイド

この武装はG A I Aと同様の武装なのだが、武装の少ない  
O U R A N O Sの隠し要素として装備。両膝から爪先間に装備され  
ている。

M M I — R S 1 機動防盾

表面に対ビームコーティングを施した防御装備。

備考

【Z A F T】が開発したS S Sの1機。セカンドステージシリーズ 型式番号の1は汎用機、2

は航空機系統を表している。

型式番号が示す通り、この機体はシンブルイズベストを目指して開  
発された機体で、武装も最低限となっている。その分、装甲や武装の  
エネルギーが他のS S Sの機体より強度や威力が向上している。

そして航空機系統が示すのは、単独での大気圏飛行能力を有してい  
ることから2の型式番号が付与された。

この機体は原点に戻り、シンプルで強い機体を造ろうと考えた結果、生まれた機体。新しい技術を取り入れるなどの真新しさは無いが、シンプルながらも十分に強力な機体となつた。

前述したように大気圏内の飛行能力を付与するため、背部には I M P U L S E のフォースシルエットを参考にして開発された専用のバツクパックを装備。

バツクパックはフォースシルエットを上回る出力のスラスターや主翼を備え、空戦能力という一点のみを考えれば F R E E D O M やフォースシルエットを装備した I M P U L S E をも凌駕するなど、極めて高い空戦能力を有している。

他の機体に比べ特殊兵装は少ない分、本体性能が高く操縦者の技量によつて脅威度が変化する機体である。

A B Y S S をも上回るパワーを有している。

幾人かのテストパイロットを経て正式に部隊配属となる直前に、[地球連合軍第81独立機動群ファンタムペイン]の襲撃の際、緊急事態により臨時でレオハルト・リベラントが搭乗し戦闘を行つた。

型式番号の読み方は、1 2。

O U R A N O S はギリシア神話に登場する天空神の名称で、ギリシア語では「天」を意味する。

## Operation — 2 逆転の賭け

レオハルトとシャムス・ミューディーら二人との戦闘は、【アルカナム】指令室でモニタリングしていた。

ハインラインやコートニーが見守る中、レオハルトが苦戦を強いられているのは明らかだつた。

「リベラント隊長が苦戦するとはな。敵も機体、パイロット共にやるようだな」

「敵の機体、DUE<sup>デュエル</sup>LとBUST<sup>バスター</sup>E<sup>スター</sup>Rに似ているな。ということは、敵は地球軍ということか」

「こんな微妙な時期に仕掛けてくるとはな。恐らく、正規軍ではあるまい」

「どういうことですか？」

ハインラインとアジモフが二人で考察していると、隣にいたコートニーがハインラインの言葉に質問を投げかける。

「正規軍がこんな無茶なことはせんだけれど、万が一何かあつても切り捨てられる、非正規の部隊だろう」

「狙いは、やつぱり……」

「リベラント隊長も言つていたが、【NJC】しかないだろう。（だが、この場所がこれほど正確に……）」

コートニーの質問に答えつつ、ハインラインは極秘である【アルカナム】の存在・位置が敵に知られていた事実に驚きを隠しきれない。【アルカナム】の存在を知つてるのは、【プラント】でも極一部。【WIA】長官の座に就いたレオハルトでさえ、今回の任務をきつかけに知つたくらいである。

「（奴らの目的は十中八九、【NJC】。ならば、静かに近付き潜入した方が確実のはず。入り口が分からなかつた？リベラント隊長が出撃した今、港の場所に大体の見当は付いたはずだ。だが、敵艦に動きはない。どういうことだ）」

ハインラインが敵の狙いに疑問と不信感を抱いている時、レーダーに注意を払っていたオペレータの一人が焦った様子で声を張り上げ

る。

「敵艦よりMS発進！機影一です!!UNKNOWNです！」

「何だと!?」

「こちらにまっすぐ向かつてきます！」

「（……まさか！敵艦の攻撃、敵のMS出撃。すべて陽動ということか!?ならば、今回の襲撃は……!）」

ハインラインが思案している間、オペレータのその言葉を聞いたコートニーは踵を返した。

「どこに行く

「出撃します」

「機体が無い。……まさか、ザクで出る気か!?」

「そうです」

ハインラインの問いかけに、コートニーは背中越しに短く答える。その答えは、ハインラインが予想した通りのものだった。だが、それは自殺行為でしかない。

「あの機体は【NJC】あつてこそこの機体だ」

「賭けです。機体に【NJC】を搭載していないことが解れば、ここには無いと思い撤退するかもしません」

「そんな保証は無い。分が悪すぎる賭けだ」

「そうだとしても、それに賭けるしかありません。【NJC】を渡すわけにはいかないのでですから」

そう言い残し、コートニーは駆け出し格納庫に向かつた。コートニーは格納庫に居たクラークに声を掛け、出撃することを告げる。

「無茶を言うな！死ぬつもりか!?」

「死ぬつもりはないです」

「……どうなつても知らんぞ！」

クラークはヤケクソ氣味にそう言い放つと、部下たちに出撃準備の指示を出す。その間にコートニーは手早くパイロットスーツに着替えると、【NJC】が取り外された量産試作型ザクのコックピットに飛び込む。

「コートニー・ヒエロニムス、発進します！」

レオハルトが出撃した場所と同じハッチが開き、そこから灰色のザク量産試作型が飛び出す。コートニーはすぐに【P.S装甲】を展開すると、灰色だつた機体カラーが瞬く間に黄色へと変化する。

「敵機、確認。……事前情報と機体が酷似。目標機体であると推定。スウェン・カル・バヤン、敵機の鹵獲を開始する」

スウェン・カル・バヤン。シャムスやミュードイー同様、【アクタイオン・プロジェクト】で開発された最後の一機に搭乗する、最後のパイロットである。

階級は中尉であるためか、シャムスやミュードイーたちの指揮官的立場にある。

性格は感情が無いに等しいほど乏しいが、強制的に受けた洗脳教育と特殊訓練で培った技術によりその戦闘能力は、ナチュラルは当然ながら一般的なコーディネイターを凌ぐ実力を持つ。

そんな彼の搭乗機体は、「アクタイオン・プロジェクト」によつて再生産された I・W・S・P と呼ばれた特殊武装を装備した STRIKE の改修機にノワールストライカーパーを装備した GATT-X 105E STRIKE NOIR。

他の二機と同様、VPS 装甲を有しパワーエクステンダーの改良により装甲が黒に変色しているということから、黒を意味する NOIR と呼ばれている。

「こいつも新型！うまくいくてくれよ……！」

コートニーはそう叫びながら、背部のバツクパツク両脇に一対で装備されていた『大口径レールガン』を発射する。

だが、スウェンは難なく避けると STRIKE では『アーマーシュナイダー』が装備されていた場所から、『M8F-SB1 ビームライフルショーティー』を引き抜き両手に装備する。

この装備は一般的なビームライフルが单発式なのに対し、連射性能を重視して開発されており重心を拳銃程度のサイズにまで切り詰められている。これによつて収束率の低下は免れなかつたが、ノワールには何の問題も無い。

『ビームライフルショーティー』から連射されるビームが、コート

二一に襲い掛かる。コート二一はすぐさまその場を離れるが、スウェンは銃口の向きを変えコート二一を追尾する。

スウェンは“ビームライフルショーティー”的攻撃を止めると、背部のウイング内側に装備されている“MAU-M3E4 2連装アニアガン”を発射。

この武装は近接戦闘を主眼に置いたノワールの特性に合わせ、近距離での破壊力向上を目的とした弾体の高初速化・高速連射性能・省電力化に重点が置かれている。

目的通り、高速でコート二一に飛来していくリニアガン。コート二一は唇を噛み締めると、左手にしていたシールドでリニアガンを防ぐ。衝撃で後ろに吹つ飛びつつも、コート二一はスウェンへと視線を向ける。

だがその時には、スウェンはノワールの90tを自力飛行させるほど揚力を生み出すウイングを存分に生かし、コート二一との距離を一気に詰めにかかる。

「くそっ！」

“MR-Q10 フラガラッハ3ビームブレイド”を両手に携える敵を見てコート二一は舌打ちをすると、自身も背部のバツクパツクから“DFX25高周波ブレードトマホーク”と名付けられた近接武器を手にする。

右から振り下ろされたフラガラッハを避け、コート二一は反撃とばかりにブレードトマホークを横薙ぎに払う。だが、その攻撃は軽く避けられてしまうとスウェンは機体を逆時計回りに回転させ左手のフラガラッハを下から上へと振り上げる。

だが、コート二一はその攻撃に何とか反応し機体をわずかに下げることで回避。至近距離から“大口径 レールガン”を発射。だが、その時にはすでにノワールは離脱しており、ビームライフルショーティーの雨がコート二一を襲う。

「（速い……!!）」

コート二一は“対ビームシールド”を正面に向けながら後退しつつ、敵の速さに苦慮する。コート二一は視線をコンソールへと向ける

と、エネルギー・ゲージはすでにイエローゾーンだつた。

「（残り、5分！）」

コートニーは再び敵に意識を集中すると、トマホークを収納し再びビームライフルを手にして応戦するため集中するのだつた。

コートニーが出撃したことは、離れた場所で戦闘していたレオハルトの元にハインラインから通信が入る。

「リベラント隊長！ ヒエロニムスがザクで出撃した！」

「何？【NJC】が外されたザクでか！」

「ああ！ 現在、敵の新型と交戦中だ！ だが、エネルギーがあと5分しか保たん！ 救援に向かつてくれ」

「ちいっ！！」

ハインラインからの言葉にレオハルトは苦々しい顔で舌打ちをすると、ビームサーベルで斬りかかるBLU<sup>ブル</sup>DUE<sup>デュエル</sup>ELを睨み付ける。

「いい加減に！！」

「墜ちろ！！」

攻めているのに決定打が無く、ギリギリのところで防がれ反撃を喰らう。そんな状況にシャムスとミュードイーは苛立ち始め、二人の攻撃は徐々に精彩を欠き始めていた。

瞬間、シャムスとミュードイーの喉を食い千切る為に砥ぎ続けたレオハルトの鋭い牙が、シャムス・ミュードイーに襲いかかる。

レオハルトは『ジエガ』と『ミスラ』で敵との距離を離すと、焦れたミュードイーはビームサーベルを手にブースターを噴射し距離を詰めてくる。

レオハルトの瞳が妖しく輝きを放ち始めると、レオハルトは持つていたシールドをミュードイーに向けて投擲する。続けざまに、レオハルトは投擲したシールドに『ジエガ』の引き金を引く。

発射されたビームはシールドに当たると兆弾のように進行方向を変え、その先にいるシャムスに飛んでいく。

「なつ!?

始めて見る攻撃方法にシャムスは目を見開き驚くが、すぐに回避行動を取る。

「シャムス!?

「バカ! 前だ!!

「!?

シャムスを案じそちらへと視線を移すミュードイー。だが、シャムスに言われ正面に視線を戻すと寸前までレオハルトが迫っていた。

レオハルトが振り下ろした“インティ”をシールドで防ぐミュードイー。ミュードイーは“スコルピオン”を発射し撃破を狙う。

レオハルトはわずかな機体の動きだけで回避すると、“94mm高エネルギービーム砲”を構えるシャムスに“ジエガ”で再び自身のシールドに向けて撃ち、再び兆弾攻撃。

続けて、“インティ”を投擲。投擲された“インティ”は、吸い込まれるように“94mm高エネルギービーム砲”に突き刺さった。

寸前でシャムスは“94mm高エネルギービーム砲”を手離すことで自機への被害を抑えると、爆炎でふさがかつた視界に舌打ちをする。

「なつ!?

爆炎でふさがつた視界から、突如としてレオハルトが現れる。“ジエガ”を腰にマウントし、右手の指先から“M A - X M 4 3 4 アムルタート ビームクロー”を収束した状態でシャムスに斬りかかる。

シャムスは反射的な動作で操縦桿を引くと、“350mmガンランチャー”“M 9 0 0 9 B 複合バヨネット装備型ビームライフル”を連射しながら距離をとる。

だが、レオハルトは次々と飛んでくる“350mmガンランチャー”を細かい機動で左右に動きながら避けつつなおもシャムスと距離を詰めて行くが、左から猛スピードで斬りかかってくるミュードイーに気付くと、レオハルトは操縦桿を限界まで引き戻し、機体に急激な急制動をかけ機体を停止。

「!? ちいっ!!」

レオハルトは“アムルタート”でB<sub>ブ</sub>L<sub>ル</sub>U<sub>ブ</sub>D<sub>デュ</sub>U<sub>エ</sub>E<sub>ル</sub>Lの右腕を斬り落とそうと振り下ろそうとした瞬間、B<sub>ブ</sub>L<sub>ル</sub>U<sub>ブ</sub>D<sub>デュ</sub>U<sub>エ</sub>E<sub>ル</sub>Lの“スコルピオン”的引き金が引かれる。

だが、引き金を引いたときにはそこにはすでにレオハルトの姿は無く、距離を取りビームライフルを向けるレオハルトにミュードイーはビームガンの引き金を引いた。

間断なく浴びせられるビームの嵐。さらには、その攻撃にシャムスも加わり激しい攻撃を行う。

「…………」

一度すべてのスイッチをオフにし、その後まつたく別のスイッチをオンにしただけ目の前の敵を討つためだけにMSを動かすレオハルト。前回の大戦の際、完全覚醒した【Origin（オリジン）】。紅と金のオッドアイに変化したレオハルトの瞳。敵の動きを細かく観察し、敵の攻撃を難なく回避していくレオハルト。それはまさに予知とも言える程だつた。

シャムスとミュードイーによる見事な連携の攻撃に対し、完璧な回答を持つレオハルト。レオハルトは右のフットペダルを軽く踏み込み操縦桿をわずかに押し出すと、機体が側転のように横移動しつつレオハルトは引き金にかけた人差し指を四度引き絞る。

連續で発射されたビームは二発ずつそれぞれに向かっていく。ミュードイーはシールドで防ぎシャムスも寸でのところで避けるが、レオハルトは操縦桿を限界まで押し込みフットペダルも強く踏み込む。

機体の各所に装備されたスラスターが火を噴き敵との距離を一気に詰めると、右肩上部に装備されている“350mmガンランチャー”を斬りおとした。

「くそがあ!!」

距離がほとんど無いレオハルトに向けて、シャムスは“220mm多目的ミサイル6連装ポッド”を発射した。レオハルトはそれ以上の追撃はせず、向かってくるミサイルを“MMI-GAU2ピッキオ

78mm近接防衛機関砲』で撃ち落していく。

再び爆炎で失われる視界。また爆炎からの突然の攻撃を予想し、シャムスは気を張る。だが、次の瞬間に通信機から聞こえてきたのはミューディーの悲鳴だった。

「ミューディー!!」

爆炎に突つ込み視界が晴れた先でシャムスが見たのは、『アムルタート』で左腕を斬り落とされたBLU<sup>ブル</sup>DUEL<sup>デュエル</sup>の姿だった。

レオハルトは先ほどと同じ、高速機動でミューディーに接近し『アムルタート』で左腕を斬り落としたのだつた。

「何なのよ、こいつ!!さつきまでと動きが！」

「コーディネーターがあつ!!」

両肩の装備を失いつつも、やる気は十分のシャムス。残った武装でミューディーを援護し、レオハルトを追いやるシャムスはミューディーの隣に並び立つと、一人は目の前の敵を憎々しげに睨み付ける。

そして、シャムスは目の前の敵を討たんと引き金に掛ける人差し指に力を込めようとした瞬間、暗闇の宇宙に発行する物体が打ち上がる。

「撤退信号!?スウェンが失敗したのか！」

突然の撤退を表す信号にシャムスは疑問を浮かべ、別働として動いている友軍の失敗を予想する。だが、その別働として動いていた友軍から通信が入ると、その言葉を聞きシャムスは苛立たしげに言葉を返す。

「・・・・・ちつ、ああ分かった! ミューディー、退くぞ!」

「スウェンが失敗したの?」

「いや、『スピア』はここには無い。ホアキン中佐の命令もある! 撤退だ!」

シャムスは唇を強く噛み締め苛立たしげに吐き捨てるよううにそう言うと、機体を反転させ離脱していく。その後にミューディーが続く。

撤退していく敵を見送ることもなく、レオハルトは機体を反転させ

コートニーの元に向かう。通信を試みるが応答は無い。

レオハルトはフットペダルを強く踏み込み急ぎ、ついにコートニーを発見する。

「トニー！」

レオハルトがコートニーの元に到着すると、コートニーの乗るザクはボロボロの状態だつた。

P.S.はダウンし、左腕は根元から失い右脚は関節部分から切断されていた。他にも、機体の各所に損傷が見られる。

コックピット内部では機器類がショートし吹き飛んだ破片でトニーは身体に傷を負い、機体を襲つた激しい衝撃でコートニーは頭部からも血を流していた。

「…………レ、レオ？どうやら…………僕の、勝ちのようですね…………」

「トニー！トニー…………笑うか。暢気なもんだ」

その言葉を最後に、コートニーは意識を手放す。レオハルトが声を上げるが、意識を失つたコートニーの口元には笑みが浮かんでいた。

レオハルトが攻勢に転じた同時刻。

コートニーはコンソール画面に表示される危険域に達したパワーゲージから視線を上げると、敵へと視線を向ける。

コートニーはストライクノワールから浴びせられる“ビームライフルショーティー”から逃れるべくデブリの陰に潜み、ひとまずはやり過ごし一息吐く。

デブリの陰から飛び出すと、コートニーは“ブレードマホーク”を手にペダルを強く踏み込む。それを見て、スウェンも“フラガラッハ”を両手に接近する。

スウェンが“フラガラッハ”を袈裟斬りに振るうと、コートニーは操縦桿をわざかに引き戻しつつ左足のフットペダルを踏み込む。

コートニーはザクの右半身をわずかに後退させることで回避すると、  
“ブレードトマホーク”を下から斬り上げるようにして振るう。

だが、スウェンは紙一重で機体を退かせて避ける。しかし、避けられたのもコートニーの計算通りである。

避けられた瞬間、コートニーはレールガンを発射する。コートニーは命中したと確信していた。だが、敵として向かい合うスウェンはコートニーの予想を上回っていた。

スウェンは操縦桿を限界まで戻しつつ両足のフットペダルを踏み込むと、機体は前転の要領でコートニーのザクを飛び越えていく。

「何て動きを……!!」

自分が予想もしない動きに舌を巻きつつ、コートニーは急いで機体を反転させ攻撃に備える。だが、やはりスウェンの方が行動が速く振るわれた“フラガラツハ”によつて左腕を斬り落とされる。

「ぐううつ！くつそおーつ！」

何とか反撃に転じようと機体を反転させレールガンの引き金に引いた瞬間、ついに限界が訪れる。引き金を引いても弾が発射されず、コートニーはハツとした様子でエネルギーゲージへと視線を落とす。

「エネルギーが……!!」

ついにエネルギーが限界を迎える。P S 装甲がダウンし通常のグレーの装甲に戻ってしまう。視線を正面に戻した時には、続けて振るわれた“フラガラツハ”で右脚がバターのようにあつさりと切斷される。

「（エネルギー切れか……。この機体は【NJC】を積んだ機体のはず。……すでにここから運び出されたということか？）」疑問を感じつつもスウェンは待機している母艦に連絡を入れ指示を仰ぐと、下された命令は撤退だつた。スウェンは敵機を一瞥した後、撤退命令を受け入れ機体を反転させた。

そして、襲撃部隊の母艦ナナバルクの艦長席に座るのはホアキン中佐。今回の作戦の司令官であり、地球連合軍第八十一独立機動群【ファンタムペイン】特殊戦MS小隊に所属するスウェンたち三人の指揮官でもある。

「（目標は奪取できなかつたか。ガセネタを仕入れてくるとは）『コキュートス』め、しくじりおつて」

ホアキンは『コキュートス』と呼ぶ人物の悪態を吐くと、操舵手に基地への帰還を指示するのだつた。

戦闘終了後、レオハルトは負傷したコートニーを回収して『アルカナム』に帰投すると、コートニーはそのまま医務室に運ばれ治療を受けることになつた。

極秘にしていた『アルカナム』への襲撃を本国に報告すると、レオハルトは詳細な内容を報告するため本国への帰還を命じられるのだつた。

それからレオハルトは事後処理に追わされることになつた。『アルカナム』はその存在を知られた以上、保有することは無駄だと判断され放棄が決定。

『アルカナム』が極秘施設だつたという秘匿性を考慮し、レオハルトが長官を務める【WIA】所属の特務部隊が派遣され、必要な物資を運び出し『アルカナム』は爆破し無事に処理された。

デュランダルとの話が終わつた後、レオハルトはその足でコートニーのお見舞いに向かう。手術も難なく成功し今は順調に回復しているとあつて、レオハルトは安堵し病院を後にした。

レオハルトはオープンカフェの店に入ると、テラス席に座りメニュー表を手に取り眺める。

「お疲れ様です、長官」

「報告」

レオハルトの真後ろの席に座つていた赤毛の女性が不意にレオハルトに話しかけるが、レオハルトは戸惑うことなくメニュー表から目を離さず一言だけ発する。

「クライン派は現在もアンダーグラウンドで活動を継続中。今は情報収集と戦力の増強に専念しています。さらに、パトリック・ザラを信奉する一部の派閥が行動を開始したようです。MSも手に入れてい

るとか

「クライン派からは目を離すな。ザラ派については、お前に任せる。  
可能なら始末しろ」

「了解しました。それと、【トロイ】についてですが。依然として尻尾  
が掴めません。ですが最近、【ブルーコスマス】の思想が顕著な一部の  
将校から、【コキュートス】という単語が出てきました」

「……引き続き、情報を集めろ」

「はっ」

会話時間は1分未満。相手は話した内容からも分かる通り、【W  
I A】の情報員である。小声で話し、万が一にも読唇術などで会話内容  
が漏洩しないようにメニュー表で口元を隠す。

報告が終ると赤毛の女性は席を立ち、会計を済ませ人混みの中に消  
えていった。

レオハルトはメニュー表をテーブルに置き、小さく溜め息を吐く。  
内も外も動き始めてきたことに嫌な予感を感じつつも、レオハルトは  
近付いてきたウェイターにコーヒーメニューを注文する。

「【コキュートス】……。嫌なコードネームだ。先手を取れるか、後手  
に回るか。……【奴ら】だという確証は無いが、前例もある。可能性  
は十分にある。さて、どうするか」

# EX Operation — 1 望む戦い

## 第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦開始直前

地球連合軍は【ボアズ】を核で消滅させ補給を受けた後、ヤキン・ドゥーエに向けて侵攻を開始。地球連合軍の大部隊が接近中の中、中軍左翼に展開しているグラヴァー隊の旗艦で隊長のディグ・グラヴァーの言葉が艦内放送で流れていた。

「現在、ヤキン・ドゥーエに連合の大部隊が接近中だ。今回の戦い、今までに無い激戦となるだろう。しかも、奴らは核を使つてくるはずだ。【プラント】をやらせるわけにはいかん！各員の奮闘に期待する！」

格納庫に格納されているG<sub>ゲ</sub>U<sub>イ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>ZやC<sub>シ</sub>g<sub>ゲ</sub>u<sub>イ</sub>eのコックピットでは、パイロットたちがそれぞれのことについて想いをはせていた。

家族や恋人を思い浮かべ、必ず生きて帰ると誓う者。【プラント】を護るために戦う決意を新たにする者。仲間を討たれ、憎しみに駆られてMSを操る者。

その中に、赤服の彼はいた。【Z A F T】内でも名が知られるエースにして問題児、オルジラフ・カルヴァン。彼が乗るG<sub>ゲ</sub>U<sub>イ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>Zは、エースに許された特権であるパーソナルカラーに彩られていた。ダークシルバーにカラーリングされた彼専用のG<sub>ゲ</sub>U<sub>イ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>Zは、通常より高い運動性能を持ち各部のスラスターやバーニアが強化されている。

オルジラフは先の【ボアズ攻防戦】でMS19機、戦艦1隻を撃破。【アストレス勲章】を授与された。

アストレス勲章とはネビュラ勲章よりは下ではあるが高い戦績を残したものに授与される勲章で、ちなみにレオハルトも一度だけ受賞経験がある。

オルジラフは真っ暗のコックピットで操縦桿を握り、静かに目を閉じ瞑想をしていた。だが、不意にオルジラフが目を開く。

「総員に通達！ 前線部隊が交戦を開始!! 司令部より出撃命令を受領！」

## 「M S隊、発進!!」

グラヴァーの合図すでにカタパルトで待機していた隊員が出撃する。次々と出撃していき、最後にオルジラフの番がやつてくる。

「全システムオールグリーン。カルヴァン機、発進よし！」

「オルジラフ・カルヴァン、出撃する」

その言葉と同時に、オルジラフはフットペダルを踏み込み操縦桿を限界まで押し出すと、オルジラフを急なGな襲う。

だが、強いGもオルジラフにとつては慣れたもの。宇宙に飛び出すと、オルジラフはすでに戦端が開かれた前線へと向かっていく。

前線では初の制式主力M Sとして【G A T — X 1 0 5  
S T R I K E】を原機とした、量産機ダガーが大量投入。

しかし、この機体は戦線を維持するために本来開発する予定だった機体を、大幅にダウングレードし簡易化して開発した機体だつた。

とはいえ、ビームライフルを標準装備するなど【Z A F T】のこれまでの主力機であるジンやシグーを上回る攻撃力を有している。

オルジラフの目の前に広がる戦場では、敵味方を問わずに瞬きをする間に命が失われていく。

オルジラフは『M A — M 2 1 G ビームライフル』の引き金を引き、ダガーのコックピットを貫き撃墜。

だがその瞬間、コックピットで激しくアラートが鳴り響く。オルジラフの瞳に、ビームサーベルを振り上げたダガーが映る。

オルジラフの隙を突き、確実に撃墜したと確信する連合軍のパイロット。

だが、オルジラフはわずかに前進すると同時に機体を反転させると、頭部に装備されている『M M I — G A U 2 ピクウス 7 6 m m 近接防御機関砲』を発射。

ダガーのメインカメラを破壊すると、対ビームシールドの先端に内蔵された『M A — M V 0 3 2 連装ビームクロー』を展開し、ダガーのコックピットに突き刺す。

オルジラフはダガーを押し出すように蹴つてビームクローを引き抜くと、さらに前線へと向かっていく。

前線へと向かいながら、オルジラフはビームライフルでダガーを次々と撃墜していく。

そんなオルジラフに脅威を感じたのか、連合軍兵はオルジラフを包囲して撃墜するため動き出す。

オルジラフに向かうダガーは5機。5対1という余程の腕の持ち主でも無ければ、撃墜される状況。つまりは、自らの死を感じる状況。一斉に向けられた銃口から発射されるビーム。だが、オルジラフの顔に浮かぶのは笑み。唇の左端を釣り上げ、狂氣の笑みを浮かべるオルジラフ。

雨のように浴びせられるビームを器用に避けながら、オルジラフの笑みはさらに深くなる。

「ククッ……。……アツハツハツハツ!!」

ついには高らかに哄笑すると、オルジラフは一気にゲイツのスラスターに火を入れる。

敵へと接近しつつオルジラフは、ビームライフルの引き金を一瞬で5度引き絞る。

ダガーは攻撃を中止し回避。1機のストライクダガーの正面に現れると、再度ビームクロードコツクピットを貫く。

その時、オルジラフは自身を狙ういち早く攻撃に転じたダガーのビームライフルの銃口に気付くと、ストライクダガーを貫いたまま自身を狙うダガーに投げつける。

味方同士でぶつかつた瞬間を狙い、オルジラフはビームライフルを撃つ。精確に射抜かれたコツクピット。爆散するダガーなどすでに眼中に無く、残る敵に牙を剥くオルジラフ。

「来いよ、俺を殺してみろよ!! 俺を殺せないなら、お前らが死ぬしか無いよなーっ!!」

再びオルジラフを襲うビーム。オルジラフは後方へと退きつつ、両腰に装備された“M M I — M 1 0 カストール レールガン”を発射する。

本来ならこの場所には“エクステンショナル・アレスターEEQ7 R”が装備されているのだが、オルジラフが必要無いと言つたことか

ら排除された。

その代わりに実装されたのが、フリーダムに装備されている“MM I-M15クスイファイアス レール砲”の同系統の武装が搭載された。

武装の型番からも分かる通り、エネルギーの関係もあり劣化版であることは否めない。だが、それでもP.S装甲を有していない機体には充分に有効であり、利便性も高い武装である。

カストールがダガーのコックピット部分に直撃。爆発こそしないものの機体は大破。

あつという間に仲間の4機を撃破され、残りの1機となってしまったダガーのパイロットは恐怖に襲われる。

そんな状態でまともに戦えるはずもなくあつさりとビームクロード撃墜されると、オルジラフは口元に笑みを浮かべたまま叫んだ。  
「俺を殺してみろ、ナチュラル!!」

いつなのか。『恐怖』という感情をオルジラフが失つてしまつたのは。オルジラフは考えてみたことがある。

だが、いつだつたのかは結局分からぬ。物心ついた時には、すでに無かつたようにオルジラフは記憶している。

いつからだろうか、オルジラフが『死』というものに忌避感を感じなくなつたのは。オルジラフが【Z-A-F-T】に志願してから、幾人の『死』というものを間近に見てきた。

だが、それに対してもオルジラフが感じたのはただ一つ。運が無かつた、それだけだった。

人間はこの世に生を受けた瞬間から、『死』という階段を登り続ける。病気で死ぬも、事故で死ぬも、誰かにあるいは自分で命を奪うのも、結果は同じ。『死』である。

それこそが、オルジラフの『強さ』。『恐怖』や『死』が理解出来ず、オルジラフはひたすら『強者』との戦いを求める。

戦闘開始から時間が経ち、オルジラフの撃墜数も確実にその数を増

やしていた。

狂氣の中にあつた感情も落ち着き、オルジラフはダガーを潰してい  
た時だつた。

アラートが鳴りレーダーに視線を落とすオルジラフ。そこには、  
J U S T I C Eの文字が。オルジラフの唇が自然と三日月型に歪む  
とオルジラフはダガーなど意にも介さず機体を反転させた。

J U S T I C Eも余りに多いダガーの数に手を焼いているのか、オル  
ジラフは何とか追いつくことが出来た。

挨拶代わりにオルジラフはビームライフルを1発撃つと、  
J U S T I C Eは難なく避けオルジラフと向き合う。

「カスタム機!? エース機か!!」

「久し振りだなあ、アスラン・ザラ!!」

「!? その声、オルジラフ・カルヴァン! 【銀狼】か!」

『あの時』の決着をつけようじやねえか、ザラ!』

アスランはオルジラフの士官学校アカデミーの1期下、後輩に当たる。

アスランとオルジラフは、かつて一度だけ戦つたことがある。戦つ  
たとはいえ、もちろん命を賭けた戦いでは無い。

部隊の練度向上を目的とした部隊対抗の模擬戦である。オルジラ  
フ所属のグラヴァー隊、アスランが所属するクルーゼ隊。その時、オ  
ルジラフとアスランはぶつかつた。  
両者共に譲らず、模擬戦とはいえ緊迫感ある戦いだつた。だが、勝  
負は母艦が大破判定を受けたことでオルジラフの所属するグラ  
ヴァー隊の敗北。

グラヴァー隊の人間も良い線までいったものの、イザーク・ディ  
アツカ・ニコルといった、最終的にはパイロットの実力差が現れた形  
となつてしまつた。

結果、オルジラフとアスランの勝負の決着は付かず終い。オルジラ  
フとしては、納得のいかない終わり方だつた。  
「今あなたに付き合つている暇は!!」

「敵と戦場で会えば、戦うのは当たり前だろう!…さあ!…今度は、命を賭  
けた戦いをしようか!!」

オルジラフはビームライフルの引き金を2度引き先制攻撃。次の瞬間にビームクロールを開き近接攻撃を仕掛ける。

「早くヤキンに向かわなければ!!」

アスランは“MA-M20ループス ビームライフル”で距離を詰めてくるオルジラフに牽制射撃を行う。

だが、牽制射撃程度でその進みを止めるオルジラフでは無かつた。左右に動いてループスを回避し、さらに距離を詰める。

アスランは小さく舌打ちをすると、“MA-4B フォルティスビーム砲”を発射。オルジラフは機体をバレルロールさせて回避。正面を向くと、カストールを放つ。

「（手を抜いて、易々と避けられる人ではないか！）」

アスランは改めてオルジラフの強さを痛感すると、本気で戦いオルジラフを避け急いでヤキン・ドゥーエに向かう。

これが最短だと考え、アスランはオルジラフと対峙することを決めた。

「やる気になつたか。さあ、殺り合おうじやねえか！」

そう吠え、オルジラフがアスランに向かっていこうとした時、横槍が入る。

直感的にオルジラフが操縦桿を引いた瞬間、先程までいた場所をビームが通過する。

「アスラン!!」

「カガリ!?」

「ちつ！邪魔をするんじやねえ!!」

オルジラフにとつて、アスランは自分が求める存在。同時に、アスランのような強者と戦う欲び。

オルジラフの『聖戦』を邪魔したのは、MBF-02 Strike Rouge。パイロットはカガリ・ユラ・アスハ。

オルジラフはカガリに鋭い牙を向ける。ビームライフルの銃口をカガリに向けると、3度ビームを発射。

カガリは2発は避けるが、最後の1発はシールドで防ぐ。カガリが反撃に出ようとシールドをズラした目の前には、モノアイを光らせる

## G<sub>ゲ</sub> U A I Zの姿。

驚愕で目を見開くカガリを、オルジラフは至近距離でカストールを撃つ。コツクピット部分に直撃したカストールによつて、カガリを激しい衝撃が襲う。

P S 装甲によつて実体弾は無効化したが、その衝撃までを無効果することは出来ない。衝撃で吹つ飛んでいくカガリを、さらに追撃するオルジラフ。

「カルヴァン！」

オルジラフはフットペダルを踏み込み、スラスター噴射でアスランが放つたビームを回避。

オルジラフがアスランへと視線を向けると、アスランは“M A — M 0 1 ラケルタ ビームサーベル”的柄同士を連結させ “アンビデクストラス・ハルバード”となつた。

アスランは“アンビデクストラス・ハルバード”を手に、J U S T I C Eの背部スラスターが火を噴き猛スピードでオルジラフに迫る。

「来いよ、ザラ!!」

オルジラフの意識からカガリのことなど一瞬で消えると、同じようにオルジラフもアスランへと突つ込んでいく。

交錯する瞬間、オルジラフは右のフットペダルのみ踏み込み、G<sub>ゲ</sub> U A I Zの両腕を斬り落とすべく振るわれた

“アンビデクストラス・ハルバード”を回避。

一瞬の交錯。アスランは決めたと思つた一撃だつた。だが、結果はギリギリであるが避けられてしまつた。

反対に、オルジラフは狂喜していた。今のアスランの攻撃、オルジラフは避けられるとは思つていなかつた。だが、寸でのところで避けることが出来た。

厳然たる事実として、オルジラフはエースとしての実力を兼ね備えている。そのオルジラフをしても、まさに紙一重の交錯だつた。

それほどの戦いを繰り広げられる相手、それが今自身の目の前にいる相手なのだとオルジラフは狂喜の笑みを見せた。

「最高じゃねえか、ザラ！だか、まだだ！まだまだこれからだろ、ザラ  
!!」

「何を言つてるんですか、あなたは！【プラント】が、核の脅威に晒さ  
れているというのに!!」

「俺はただ、戦場に立つだけだ！政治の世界に興味はねえ！俺たち軍  
人がするのは、敵を殺すことだろう!!」

オルジラフは交錯した後、すぐさま機体を反転。オルジラフとアス  
ランは同時に引き金を引いた。アスランはフォルティスを撃ち、オル  
ジラフはビームライフルを撃つた。

両者のビームは別方向へと逸れたが、続けてオルジラフはカストー  
ルを発射。間髪入れず、オルジラフはビームクロールを展開し距離を詰  
めていく。

アスランはカストールを難なく避け、『M M I — G A U 1 サジツ  
トウス 20 m m 近接防衛機関砲』の引き金を引くと、頭部の両側に  
装備されている砲門から小口径の弾が次々と吐き出されていく。

「俺は、この戦争を止めに来たんです！時間が無いんだ、俺には!!」

「それこそ俺の知つたことか！先に進みたいなら、俺を殺せ!!」

オルジラフは機体を停止させると、横へと進路転換しサジットウス  
から逃れる。

その時、オルジラフは視界の端にダガーを捉える。オルジラフはさ  
らなる邪魔者に舌打ちをすると、ビームライフルを素早く向けると連  
射。一発目で頭部をつぶし、二射目でコックピットを貫いた。

再びオルジラフはアスランへと意識を集中した瞬間、オルジラフは  
飛来してきた『ファトゥム—00』を回避。ビームクロールを再び展  
開し、ビームを撃つてくる J U S T I C E に挑む。

「どうしたよ、ザラ！お前の力は、この程度か！おれをがつかりさせん  
じやねえ!!」

「俺は!!ここで止まるわけにはいかない!!」

瞬間、アスランの内に眠る【S E E D】が覚醒。再度起こつた両者の  
の交錯。すれ違った時には、G u A I Z の右腕の間接から先を失つて  
いた。

「ハツハツハツハツハツハツ!!調子が出てきたじゃねえか、ザラ!!だが、もつとだ！もつとだよ、ザラ!!」

「いい加減に!!」

アスランは激怒すると、"RQM51バッセル ビームブーメラン"を手になると投擲。オルジラフは残った左腕に装備されたビームクロードバッセルを弾き飛ばす。

その時、突然背後から飛来したビームによつて両脚が吹き飛ぶ。それに引き続き、背後から飛んできた何かによつてオルジラフを激しい衝撃が襲う。

「ぐうっ！」

その正体は、先ほどアスランが射出したファトウム。アスランがマニュアルで遠隔操作を行い、フォルテイスでGuAIZ<sup>ゲイツ</sup>の両脚を吹き飛ばし突撃を喰らわせたのだつた。

アスランはファトウムを背部に連結すると、最後の止めとして左腕を切断し頭部を破壊。

カガリと共に再びヤキンへと猛スピードで向かつていつてしまつた。その背を見送りながら、オルジラフは笑みを浮かべる。  
「敵に止めを差さねえとは。甘えな、お前は。……チツ。また、負けちまつたか」

# Ex Operation — 2 取り戻せない

## 過去

某日、レオハルトは【WIA】の長官としての執務に励むと共に部下からの報告を受けていた。

「調査の結果、先日の【アルカナム襲撃事件】はほぼ連合軍と思われます」

「ほほ、か」

部下である【WIA】の人間の報告を受けつつ、レオハルトは報告として上がつてきている書類を片付けていく。

様々な情報がレオハルトの元に報告され、レオハルトは情報の重要度で分けていく。

部下の報告にレオハルトは反芻するように咳くと、その理由を問う。

「お気付きかとは思いますが、実行したのは非正規部隊。そのため、指揮系統が不透明であり、犯人と思われる部隊も見当たりません」

「なるほど。この案件は終了とする。調査に当たつた人間には休暇を与える。休ませてやれ」

「ご配慮、ありがとうございます」

「報告は以上だな？ 引き続き、情報収集に努めろ」

レオハルトの言葉に部下は敬礼をするとそのまま部屋を退室する。レオハルトは残つた書類を処理し終えると、椅子の背もたれに背中を預けると引き出しから一枚の写真を取り出す。

それは士官学校の卒業式の時に撮つた仲間たちとの写真。自身の隣には笑顔を浮かべるフィシアにクルーゼ。他にも多くの仲間が、同じく笑顔を見せている。

「残るは俺だけか・・・・・」

写真に写るメンバーは、レオハルトを残して亡くなつてしまつてい る。クルーゼに至つては、自身が討つたも同然。あの時の選択に後悔はしていないし、間違つていたとも思つていない。

それでも、レオハルトの心には大きなしこりが残っている。

レオハルトは目を閉じると、思つていた以上に身体は疲れていたのか深い眠りに入つてしまつた。

6年前

C.E. 65年。政治結社であつた既存の【Z A F T】を解体し再編。プラント内の警察保安組織と合併、モビルスーツを主戦力とする軍事組織【Z A F T】が新たに創立・建軍された。

この時、レオハルト・リベラント14歳。ラウ・ル・クルーゼ19歳。後に親友となり戦場で銃を向け合う二人は【Z A F T】で出会つた。

レオハルトとクルーゼは同じパイロット養成課程に入ると、二人は瞬く間に頭角を現していった。同時期に加入した同期より、頭が一つも二つも抜きん出た存在だつた。

昼食時、クルーゼは食事の載つたトレイを手に食堂を見渡す。すると、ある一角でクルーゼの目が留まる。視線の先には、真紅の髪色が目立つ少年の姿。

クルーゼはわずかに笑みを浮かべると、その少年の元へと向かう。  
「この席、いいかな？」  
「……」

顔を上げた少年の顔を見て、クルーゼは息を呑んだ。鋭い瞳に抜き身の刀のような雰囲気。クルーゼの背中に嫌な汗が一筋流れる。

同時に理解する。少年の座る同じテーブルの列には、誰一人して座つていらない理由に。近付くことが出来ないのだ。彼の雰囲気によつて。

少年はクルーゼを一瞥すると、再び食事へと集中する。拒否の言葉が無かつたため、クルーゼは少年の正面の席に腰を下ろした。

その瞬間、周囲がざわつき出す。クルーゼはそんなことなど意に介

さず、少年へと話しかける。

「初めまして、私はラウ・ル・クルーゼ。レオハルト・リベラント君でいいかな？」

「…………」

クルーゼの言葉を黙殺しレオハルトはトレイを手に立ち上がると、トレイの返却口へと歩いていく。レオハルトを恐れてか、食堂にいた人間は自然と道を開けていく。

「…………」

トレイを返却そのまま食堂を出て行く少年の背を見送っていると、一人の青年が近付いて来る。

「おい、クルーゼ」

「アルドか。どうした？」

クルーゼに話しかけてきたのは、同じパイロット養成課程で同じ班のアルド・ドーファス。パイロット養成課程も優秀な成績で、非常に生真面目な性格で班ではリーダー的な存在である。

「あいつに話しかけるのは止めておけ。あいつに話しかけて、病院送りにされた奴がいるんだぞ」

「道理で怖がられているわけだ」

「知らなかつたのか？何であいつに話しかけたんだよ」

「ふつ、ただ的好奇心だよ（やはり、彼は…………まさか【Z A F T】にいるとはな。何が目的なのか…………）」

クルーゼはアラドに笑みを浮かべてそう答えると、食事を始める。だが、その内心は先ほどの少年のこと。紅い髪という特徴的な髪に、鋭い瞳。

クルーゼは一瞬だけ合った少年の瞳に、底知れなく燃え滾る『何か』を感じ取つた。その感情はクルーゼの奥底にも存在する、底知れぬ【憎悪】。

「（彼の過去を考えれば、当然か。私と同類…………）」

それから数日後のある日。レオハルトとクルーゼは再び会うことになる。

その日2人が教官から聞かされたのは、班対抗のシミュレーション対決。レオハルトが所属第1班、クルーゼが所属する第2班。

班は5人で構成されており、レオハルトとクルーゼがぶつかるまで2勝2敗の緊張感ある戦い。

そして、ついに実力の高さが評価されているレオハルトとクルーゼがシミュレーションシートに腰を下ろす。

「さて、お手並み拝見といこうか。どれほどの腕なのか？」

クルーゼはレオハルトの腕前に期待しつつ、離れた場所からストップしたクルーゼはどこかにいるであろうレオハルトの強襲を警戒しつつ、操縦桿を倒し共通の使用機体であるYMF—01Bジンを進ませた。

瞬間、クルーゼの脳裏に何かが奔る。

「そこか！」

“MMI—M8A3 試製56mm重突撃銃”を自身の感覚に従つた方向に向けると、デブリの陰から飛び出してきた“MA—M1 試製重斬刀”を構える敵がいた。

クルーゼは操縦桿を引き戻しつつフットペダルを踏み込み、右手の人差し指に力をこめる。すると、向けられた重突撃銃から弾丸がフルオートで発射される。

クルーゼはレオハルトが退いた瞬間を狙い攻勢に転じ、主導権を掴んで決着を付けようと考えていた。だが、レオハルトの行動を見てクルーゼは驚愕に目を見開く。

「バカな！ 向かってくるだと！！！！ 面白い！！」

クルーゼが精確に狙つた銃撃を、レオハルトは機体を手足の如く動かし器用に銃撃を躱していく。クルーゼは左手に“MA—M1 試製重斬刀”を手にすると、斬りかかるレオハルトと刀をぶつける。

互いの重斬刀がぶつかり、同時に二人は距離を取る。いち早く射撃を行つたのはクルーゼ。だが、レオハルトはデブリなどを巧みに使いクルーゼの銃撃から逃れる。

デブリの陰に隠れた一瞬の間にレオハルトは左手に重突撃銃を構え、銃撃で応戦する。思つていたとおり、いや予想以上の実力にクルーゼは一人納得する。

「成功していたというわけか、ヒビキ博士。彼が、貴様らの成功の結果か」

「（何だ、この感覚は……。この感覚は、貴様のせいなのか。……不快だな、このざらついた感覚は）」

不可解な感覚に襲われ、眉をしかめるレオハルト。

レオハルトはクルーゼからの銃撃をバレルロールして回避すると、反撃とばかりに銃口を向け引き金を引く。先ほどまでと違う感じにクルーゼはわずかに眉を顰める。

素早く距離を詰めた後は右手の重斬刀で薙ぎ払うと、クルーゼはその刀をターンして回避。レオハルトの後ろに回り込み背後から重突撃銃を撃つ。

だが、その瞬間にはレオハルトは機体をバック宙させて銃撃を回避すると同時に、振った重斬刀でクルーゼの乗るジンの頭部を斬り落とした。

その驚きの動きと、その動きをさせるレオハルトの技術にこの二人の戦いをモニターしていた人間から感嘆の声が漏れる。

レオハルトのその攻撃でシミュレーターは大破判定を出し、クルーゼの敗北が決定。

クルーゼは溜め息を吐くとシミュレーターから出て来るが、声を掛けようと思つていたレオハルトの姿は無くなっていた。

「（やはり、実力は本物ということか。だが、その代償は大きい……）」

景色が切り替わると、今度は若き日のレオハルト・クルーゼ、そして亡くなつたフィシアの姿が。レオハルトの意識は、昔の自分たちを第三者として俯瞰で見ていくような状況だつた。

「私たちもついに卒業か」

「そうだな」

「ラウとハルは、曲者と呼ばれるハルング隊に。私はプラント防衛部  
防衛班MS隊シナード隊に」

「シナード隊長か。なかなか型破りな方とは噂では聞いたが」「とはいえ、卒業式までは休暇だ。シアは実家かね？」

「たまにはね」

「レオも一緒にかね?」

「何でそうなる」

「ラ、ラウ！な、何を!!」

「ふむ。まだ、か。もどかしいぞ、シア」

「余計なお世話！早く行こうよ!!」

再び景色が切り替わり見えたのは、ヤキン・ドゥーエでの戦場。

レオハルトの乗機だったFINNISが持つビームサーベルが、  
Providenceのコツクピットを貫く瞬間だった。

GENESISがProvidenceを少しずつ焼き払っていく  
最中の、クルーゼの様子が俯瞰で見ているレオハルトの目の前に現れる。

「止めてくれると思った。他の誰でもない、君が。ありがとう、親友よ。さらばだ、<sup>レオ</sup>親友……」

本当に言つていたかどうかは分からぬ。この夢も、レオハルトが創り出した想像の世界。

ゆっくりとレオハルトは覚醒し眠りから覚めると、左手を頬に当ててみる。頬はわずかに濡れ、涙が流れていたことが分かる。

レオハルトはすでに何の夢を見ていたかはもう忘れていた。だがそれでも、とても悲しく懐かしい内容だったことはおぼろげながら覚えていた。

「…………つ。ぐうつ…………！」

レオハルトを不意に襲つたのは、胸部の猛烈な痛み。胸を掴みうめき声を上げると、引き出しから透明のケースに入っている錠剤を取り出し1錠口に入れ水で流し込む。

「はあっ、はあ、はあ、はあ・・・・。ふうー・・・・」

レオハルトは自身の右手へと視線を落とすと、わずかに震える右手を見て苦い顔をするレオハルト。レオハルトは右手を強く握り締めると、仲間との写真を引き出しに片付ける。

「取り戻せないもの、それが過去。巻き戻せないもの、それが時間。

……俺は進むだけだ。振り返る暇など無いのだから」

レオハルトは左手で左目を覆いながら天井を仰ぐと、自らに言い聞かせるように呟く。

「俺には、時間が無い・・・・。貴様は俺を利用しているつもりだろうが、それは間違いだ。利用させてもらうぞ、ギル。お前の好きにはさせん」

# Operation — 3 保持者

C. E72年5月下旬

レオハルトはある日、隨行員を1人引き連れてある場所を訪れていた。

レオハルトらが目的の【プラント】に到着し港を出ると、送迎車と白服の男と黒服の男女2名が待っていた。

レオハルトに気付くと、彼らは同時にレオハルトに対し敬礼。レオハルトも立ち止まると、答礼をする。

「お待ちしておりました、リベラント特別議員。ようこそ、【アーモリーテン】へ。案内役を仰せつかつた、ガイゼン・ジーマです」

【アーモリーテン】。

アーモリーテ市を構成する【プラント】の一つで、アーモリーテはArm'sとFactoryの造語であり、『兵器工廠』を意味している。

だが、この【アーモリーテン】のみに関しては少し意味合いが違つており、【アーモリーテン】には未来の【Z A F T】を育成する士官学校アカデミーが存在している。

レオハルトがここを訪れたのは、新たに国防委員長に就任したタカラ・シユライバーの名代として【アーモリーテ市】の視察である。

そのためレオハルトは以前デュランダルから受け取った、赤地に右肩から左脇腹にかけて斜めに黒線が入ったコートを着ている。

レオハルトは今回、軍人としてではなく政治活動の一環として訪れている。だからこそ、いつもは左胸に光る徽章を外しているのだ。

とはいえ、やはり身体に染み付いた習慣によつてレオハルトは敬礼に対して、即座に答礼してしまつた。

特別議員として立場を明確にするため制服に身を包み徽章を外したというのに、到着早々に出鼻を挫かれた気分であつた。

レオハルトは内心で苦笑しながらガイゼンと握手を交わす。

レオハルトは2日ほどの時間を掛けて視察を行い、【アーモリーテン】が最後の視察場所である。

「部下の紹介もしたいところですが、時間も惜しい。車の中をさせて

頂きます。こちらへ」

案内によりレオハルトらは特別製のリムジンに、対面する形で座る。

「では、改めて名乗らせて頂きます。こちらは、マグウェル・ファウター。そして、オルキア・ミジエールです」

「よろしく頼む。こちらも紹介しよう、随行員のアイリツ・シユ・ハウンドだ」

今回、レオハルトの随行員として同行している赤服のアイリツ・シユ・ハウンド。

その名前は偽名であり、所属は【W.I.A】第四課護衛部所属のゼルデア・ミスト。護衛部でも指折りの実力者で、MSの操縦技術も高い、数少ない人物である。

互いの挨拶も済ませ、車は士官学校へと向かう。

士官学校<sup>アカデミー</sup>に到着したレオハルトはジーマの案内であらかた周り終えた後、レオハルトは窓から見える一角に格闘訓練を受けていた者たちを見つける。

「ジ興味がありますか？」

「問題無いか？」

「教官たちにはリベラント隊長が訓練を視察する可能性があることは伝えてあります。問題無いでしょう。こちらへ」

レオハルトらが窓から見えた場所に着くと、訓練を見守っていた教官が真っ先に気付き、遅れて周囲の生徒たちも誰かは分からぬが偉い人が来ていることに気付いた。

「気を付け！敬礼！」

教官の突然の号令にも、生徒たちは叩き込まれたことに従い姿勢を正すと、教官と同じ集団に敬礼をする。

「構わない。訓練を続けてくれ」

レオハルトは答礼をした後、教官に訓練を続けるように促す。それについてジーマも同じことを告げ、ようやく教官は訓練再開の声を上

げる。

レオハルトがその場に集まっている生徒たちを見渡した時、一人の少年と目が合う。

長い金髪を束ね、レオハルトに険しい視線を向ける一人の少年。レオハルトは少年と視線を一瞬だけ交わすと、視線を外し訓練へと視線を向けた。

「ねえ。あの一人だけ違う服を着た金髪の人、誰なのかなしら？」

「俺に聞くなよ。レイは知ってるか？……レイ？」

「……ああ。彼はレオハルト・リベラント。顔は知らずとも、名前は知っているだろう。彼は今、評議会の特別議員という役職も担つている。ここに来たのは、視察だろう」

何でもないことのように淡々と語る金髪の少年、レイ・ザ・バレル。対して、一番最初に疑問を投げかけた少女、ルナマリア・ホークは驚きの表情を浮かべる。

「あの人、レオハルト・リベラント……。最強を破った、真の最強」ルナマリアの質問に素っ気なく答え、だが今はレオハルトを憧れの眼差しで見るのはシン・アスカ。

この三人は同期の間でも特に仲の良い三人組で、一緒にいることが多い。

レオハルトへ尊敬の視線を向けていると、不意に目が合い焦つて視線を外すシン。

「（この感覚は……）

シンを見て覚えのある感覚に襲われ、わずかに眼を細めるレオハルト。

「そこまで！よし、十分の休憩を取る。水分補給を忘れるな！」

教官がそう言うと、生徒たちはそれぞれ水分補給のために動き出す。

目が合つて焦つていたシンも仲間に急かされ、水分補給へと走る。「すまない。少しトイレに行つてくる。一人で構わん」

レオハルトはジーマにトイレに行くことを伝えると、変わらず自分を見ていたレイと視線を合わす。

そして何も言わずに、隊舎の中にあるトイレへと向かっていく。

「トイレに行つてくる」

「ああ、わかつた」

その後をレイが静かに追い掛けた。

レオハルトが洗面台で手を洗つていると、その後ろにレイが静かに現れる。

「久し振りだな、レイ」

「……はい、レオ」

どう声を掛けようか迷っていたレイに、レオハルトが先に声をかけるとレイは逡巡したあと頷いて見せた。

「レオ、俺に何か用でしようか」

「お前にあると思ったよ。俺に聞きたいことでもあるのか？」

「……っ！」

「意地の悪い質問だつたな。ラウのことだらう？」

先の戦争の最終戦、レオハルトは親友のラウ・ル・クルーゼと死闘を繰り広げた。

最終的にラウは、レオハルトを庇い【ジエネシス】に焼かれて死亡した。

「レオ。何故、ラウと戦つたのですか」

「ラウと俺では、考え方が違かつた。それだけだ」

「それだけでは納得出来ません」

「だろうな。納得する必要もない。俺はラウを殺した。それだけを理解していろ」

「ラウは!!……レオが手を下したわけではありません」

レオハルトのクルーゼを殺したという発言に、レイは一瞬だけ感情的になり声を荒げる。

だが、一度深呼吸して気を静めるといつも通りの口調で言つた。

普段は冷静なレイが珍しく感情を露わにし声を荒げたことに、レオハルトは驚きの顔を見せる。

だが、すぐにいつもの表情に戻ると、自嘲氣味に唇の端を釣り上げる。

「【プラント】は英雄を求めている。英雄を騙つた裏切り者を、眞の英雄が倒す。政治の世界にも、物語は必要だ」

先の戦争が終結した後、「【プラント】はレオハルトのことをプロパガンダの意味合いも込めて大々的に報道した。

【プラント】を裏切った人間を討つた、彼こそが英雄だと。「【プラント】の守護者だと。

レオハルトは内心、そのことを苦々しく思いながらもそれを受け入れた。

「もつとも、指示を出しているのはギルだろうがな」

「ラウは自分の赴くままに生き、そして死にました。後悔はしています」と、俺は思います」

「そう願いたいものだ。……俺が言うのもおかしい話だがな」

「ラウは、あなたのことを親友と言っていました。ラウも……本望かと」

レオハルトは小さく微笑を浮かべると、レイを置いて歩き始める。だが、不意に歩みを止めると背中越しに話しかける。

「レイ、体調はどうだ？」

「……いつも通りです。レオは？」

「いつも通りだ。ではな、また会おう」

それ以上は何も言わず、立ち去るレオハルトを見送るレイ。レイはレオハルトとは別の道を通つて、訓練場所へと向かう。

「レオ。俺もあなたも……」

その時、近くを大型車が通りレイの咳きは騒音にかき消されてしまつた。

視察を終えた夜。

レオハルトは宿泊先のVIP専用の客室で、私物のPCを開き仕事のメールを確認していた。

PCに映し出される情報を一つずつ細かくチェックし、頭の中で精査していくレオハルト。

画面に映し出されているのは、MSの設計図及び開発コンセプト。

取捨選択されたものが、表示されているものである。

「C<sub>カ</sub>H<sub>オ</sub>A<sub>ス</sub>O<sub>ス</sub>S、G<sub>ガ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ア</sub>A、A<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>S<sub>ス</sub>S」

現在、「プラント」では最新鋭のMSの開発が進行している。開発を担当するのは勿論、「統合三局」。

そして、開発の総指揮にレオハルトが就任している。これは、デュランダル直々のご指名でもある。

「I<sub>イ</sub>M<sub>ン</sub>P<sub>バ</sub>U<sub>ル</sub>L<sub>ス</sub>S<sub>エ</sub>E、S<sub>セ</sub>A<sub>イ</sub>V<sub>イ</sub>I<sub>オ</sub>O<sub>バ</sub>U<sub>ア</sub>R<sub>ス</sub>。そして、O<sub>ウ</sub>U<sub>ラ</sub>R<sub>ノ</sub>A<sub>ノ</sub>N<sub>ス</sub>O<sub>ス</sub>S<sub>ス</sub>。総数は六機か」

送られてきたデータに、レオハルトは意見を一機ずつ添えて返信していく。

すべての機体に対しての返信を終え椅子から立ち上がると、窓から見える景色を眺める。

思い出すのは、昼間のレイとの邂逅。レイとは長らく会つておらず、最後に会つたのは先の大戦が始まる前だとレオハルトは記憶していた。

「戦火は燃る、か……。どう思う」

レオハルトは何者かへと静かに語りかける。

レオハルトの目の前の窓ガラスには、軍服をキツチリと着込んだアリツシユが立っていた。

「申し訳ありません。お返事がなかつたのですが、失礼させて頂きました」

「構わない。で、どう思う」

「パトリック・ザラを信奉する一派。水面下で動くクライイン派。「オーブ」に身を隠した【アークエンジエル】。火種を挙げれば、キリがあります」

「確かに。連合も、いつまでおとなしくしているか」

アイリツシユの言葉に同意すると、レオハルトはグラスに注いだ水を飲み込む。

たつた一度でも強い風が吹き荒べば、存在する多くの火種は瞬く間に燃え盛り【プラント】を戦火に包み込むことだろう。

その火の粉を払いのけるのがレオハルトの仕事であり、そのための力でありMSである。

「夜も遅い。アイリッシュ、そろそろ休め。俺も休む」

「了解しました。私は隣の部屋に居ります。何かあれば、すぐに」  
アイリッシュはそう言い残すと、敬礼をすると踵を返し部屋を退室した。

「ＳＥＥＤ保因者も現れた。戦火は、俺の思っている以上に近いのか  
もな」

# Operation — 4 極秘任務

C. E 72年某日。

レオハルトは【プラント最高評議会議長】であるギルバート・デュランダルからの特命を受け、【F A I T H】としての任務の出発のためアブリリウスの港にいた。

「リベラント隊長。MSの搬入作業は予定通り、1000で終了予定です」

「わかった。では、当初の予定通り出港時刻は1015とする。各員に再度通達。徹底させるように」

「はっ！」

作業の様子を見守っていたレオハルトの元に、整備服を着た男性が現れる。男性はレオハルトに敬礼、レオハルトが答礼し手を下ろしたのを確認すると、出発準備の作業経過の報告を行つた。

レオハルトは男性に出発時刻を予定通りということを伝えると、乗組員に再度徹底させるよう指示を出す。

目の前に寄港しているナスカ級エリテイスには、MSや物資が運び込まれていく。そして、レオハルトの視線の先では自身の専用機 J U P P I T E R F E R E T R I U S もアームでエリテイスの格納庫へと運び込まれていく。

順調に進む作業を見守りながら、レオハルトはこれまでの経緯を思い返していた。

軍事裁判が終わり、レオハルトがギルバートの執務室に行つた時のことだつた。

「そろそろ本題に入つたらどうだ、ギル」

「まあ、座りたまえ」

ギルバートは立ち上がりソファを手で示し、座るように促す。

レオハルトは話が長くなりそうなことを察しソファへと腰を下ろ

すと、正面に腰掛けたギルバートに目線で続きを促す。

「長い戦争が終わり、プラントは疲弊した。人的・物的資源共に、回復には相当な時間がかかるだろう」

「【ユニウス条約】も所詮は一時的な停戦のための条約。連合も資源の回復に躍起になり、回復すれば再び戦争を仕掛けてくる可能性は高い」

「その通りだ。【ブルーコスマス】。いや、【ロゴス】も健在だ。連合もMSを主力化した今、次世代の主力機の開発に力を注いでくるだろう」

プラントにとつての悲劇の地【ユニウスセブン】で締結された、プラントと地球連合との停戦条約。締結した【ユニウス条約】は停戦のための条約。

そう、停戦なのだ。終戦ではない。両者の戦争はまだ終わっておらず、今は戦力の充電期間なのだ。

【ブルーコスマス】盟主ムルタ・アズラエルを始めとしたタ力派が死亡したとはいえ、地球連合上層部では反コーディネーター主義を掲げる者たちが未だに大半を占める。

プラント内部では戦力が回復すれば再び戦争を仕掛けてくるという考え方がある。

レオハルト個人としてもその意見には賛成であり、連合はただ戦力回復に努めているだけだと考えている。

「だが、それはこちらも同じだろう? G<sub>ゲ</sub>U<sub>イ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>Zをベースにした後継機、さらに次世代主力機の開発を指示したと聞いたが」

「耳が早いな、レオ。そちらに関しては、【統合三局】がやってくれることだろう。心配はしていないさ。それより、私には別的心配事があつてね」

【プラント最高評議会議長】に就任したギルバートが最初に着手したのは、戦力の充実化。

先程も話に出た通り、次世代主力機の開発やそれまでのつなぎとしての G<sub>ゲ</sub>U<sub>イ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ツ</sub>Z 後継機の開発。レオハルトは知らないが、他にもトップエースヘロールアウト予定の専用機の開発も指示が出ている。

ギルバートはMSについてはさほど心配はしておらず、懸念事項は別にあると伝える。レオハルトは内心でようやく本題かと思いつつ、ギルバートが口を開くのを待つ。

ギルバートが不意に立ち上るとデスクの引き出しから封筒を取り出し、ソファに腰掛けるレオハルトへと渡す。

何も言わずに渡された封筒に訝しみつつも中から書類を取り出す。中に入っていたのは、ある人物に対する報告書だった。

レオハルトは印字されている文字を目で追い、数分の間はレオハルトが書類をめくる音だけが響く。やがて読み終えたのかレオハルトは書類を机の上に置くと、薄い笑みを浮かべるギルバートへと視線を移す。

「ようやくか」

「待たせてしまったね。諜報部の内偵と国防事務局の捜査、君の報告でほぼ決まつたよ」

「ほぼ？」

「ああ、ほぼだ。内偵しても証拠は得られなかつた。決定的な証拠はないが、状況証拠はクロだ」

レオハルトは書類を封筒の中に戻すと、机の上でギルバート側へと寄せる。

ギルバートは目標に對して行われた諜報部の内偵結果についても伝える。内偵対象も素人などではなくプロ。簡単にシッポを掴ませるはずもなく、決定的な証拠を発見することは出来なかつた。

「なるほど。ならば、どうする？」

「証拠は無い。だが、状況証拠はクロだ。よつて、秘密裏に処理することにした」

「だから、俺か」

知つての通り、レオハルトは国防委員会直属【F A I T H】に属している。通常の指揮系統の外側に位置している。秘密を伝える人間を最小限に抑えることが出来る。それはつまり、情報の漏洩の可能性を下げる事が出来る。

ギルバートの顔から笑みが消え、目標を秘密裏に処理。つまり、暗

殺することを伝える。

証拠が無いから、裁判も出来ない。だが、限りなくクロ。放置していれば、内部情報が外部に流出してしまう。そうなると残る手は、暗殺しかない。

ギルバートは国のトップである為政者として、非合法の手段に出る。

「しかし、君だけで遂行するのもさすがに難しい話だ。そこで、諜報部を使う」

「大丈夫なのか？」

「そこは任せてくれたまえ。前段階での仕込みもしなければならない。実行するのは、少々時間が必要でね」

「仕込み？ 詳しく教えてくれ」

「もちろんとも。君は、この任務の中心にいるのだからね」

そうしてレオハルトはギルバートから『仕込み』の内容を聞き、【プラント最高評議会議長】からの直々の特命を受ける。

すべての説明を受けレオハルトが席を立ち部屋を後にしようと歩き始めると、足を止め振り返る。

「質問の答えを聞いていなかつたな」

「何だつたかな？」

「俺を外した理由だ」

「そうだね。君の反応が見たかつたから、かな」

いつも通りのギルバートの笑みを浮かべながらの答えに、レオハルトは何も言わずに踵を返し部屋を退室する。レオハルトが退室した部屋で、ギルバートはソファから立ち上がり背もたれの椅子に腰掛け背中を預ける。

「さて。残念だが、退場してもらおうか」

ギルバートは頬杖を付くと、視界の端で片付け忘れていたチエスの駒を見つける。それはポーンの駒。ギルバートはポーンを手に取ると、駒を左手で弄びながら不敵に微笑むのだった。

この時からしばらく経つたある日、レオハルトに特命の【極秘任務】実行の指示が出るのだった。

あの日のギルバートとの話があり、レオハルトは今こうしてアプリウスの港で出港を待っているのだつた。

レオハルトが時計で時間を確認すると、1005。出港時刻まで10分となつていた。レオハルトは踵を返すと、エリティスへ足を向ける。

エリティスの入場口まで来ると、入り口に立っていたのは白服を着た男と黒服の男が立つていた。

レオハルトが目を引いたのは、白服の男だつた。不自然なことに左手だけ黒の手袋を着け、右目に眼帯をした偉丈夫だつた。

事前情報からレオハルトは男が何者なのかを理解すると、男たちが敬礼したのを見て答礼する。

「お待ちしておりました、リベラント隊長。諜報部所属アイザック・クーロンと申します」

「特務隊、レオハルト・リベラントだ。今回の任務はよろしく頼む」「いえ、こちらこそ。こちらはエリティス艦長のアサド・クレンスです」

「よろしくお願いします」  
「よろしく頼む」

挨拶を済ませると、レオハルトはアサドの先導でエリティスの艦内へと足を踏み入れた。

アサドを先頭にそのまま艦橋へと向かうと、エリティスは出港準備に入る。アイザックはアサドの後ろの席に腰を下ろすと、レオハルトはアサドの右後方の席に腰を下ろした。

「定刻になりました。エリティス、出港します」

そして予定していた出港時刻1015になるとレオハルトが受けた【極秘任務】のため、諜報部の人間を引き連れ、出港するのだつた。

出港してから数時間ほど立つと、レオハルトはアイザックを連れ艦橋を離れ艦内の一室へと向かう。この部屋は一時的にレオハルトの

部屋として割り当てられた部屋で、レオハルトの私物が置かれていた。

2人は対面式の簡易的なソファに腰掛けると、レオハルトはアタッシュケースに収められていた今回の任務の作戦命令書を取り出す。「大体の作戦概要は理解していると思うが、再度熟読してくれ」「わかりました」

アイザックが命令書を読んでいる間、レオハルトはコーヒーメーカーから2人分のコーヒーを注ぐと、アイザックの目の前に置き、レオハルトも再び腰掛け一口飲んだ。

「事前に聞いていた内容と変わりありません」

「今回の作戦は極秘任務だ。表はもちろん、裏にも記録されない完全に秘匿される任務となる」

「承知しております。その点も考慮し、人員を選抜しました。無論、仕込みに参加している人員もです」

アイザックは命令書をレオハルトへと返すと、レオハルトは今回の作戦がいかに秘匿されているかを再度説明する。

アイザックは小さく頷きつつ、信頼のおける人材を選抜したことを探える。その答えにレオハルトも満足気に頷くと、書類をアタッシュケースに戻し鍵を掛ける。

「現地に到着後は、速やかに作戦を実行したい。ネズミが勘付く前に」「同感です。向こうも素人ではありません。ふとしたキッカケで気付きかねません」

「作戦開始の合図は周知しているな?」

「分かり易い合図です。問題は無いかと」

その言葉を最後に作戦内容の共有が終わり、アイザックは部屋を出ていき艦橋へと戻っていく。

レオハルトはそのまま部屋に残り、作戦地域の到着まで身体を休めることにしたのだった。

それから数時間後。

レオハルトが仮眠から目覚め、目覚ましのシャワーを終え髪を拭いていると艦橋から通信が入る。

「リベラント隊長、30分ほどで作戦地域に到着します。艦橋へお願ひします」

「わかつた。すぐ向かう」

オペレータの言葉に応答すると、レオハルトは手早く軍服に着替えると艦橋に向かう。

艦橋に到着すると、ちょうどメインモニターに先行していた部隊の指揮官を務めている諜報部隊長バルドリッヒ・ゲヴェールが映し出されていた。

「久し振りだな、バル」

「おつと、これは予想外な援軍だ。まさか、ダンナが来るとはな」

今回のバルドリッヒの目的は、【Z A F T】脱走者の抹殺。その対象とは、現在の【プラント】の体制や地球連合との和平を不服とし、【Z A F T】脱走兵サトー・ジブラーンをリーダーとした、パトリック・ザラを信奉する集団である。

そんなザラ派のサトーをリーダーとした一派が、2人の現在地より3km先にある廃棄されたコロニーを根城にしているとの情報があり調査の結果、事実と判断された。

今回の任務の重要性を考慮し、諜報部を統括するバルドリッヒ自ら前線へと来たのである。

「俺は見届け人だ。手柄は諜報部のものだ」

「おつと、それは悪いな。ダンナも来てくれたことだし、先手を打つためにも早速始めさせてもらうぜ」

「ああ」

今回の情報は諜報部が苦心してやつとつかんだ情報のため、レオハルトは出張ることはせずサポートに徹することを伝えるとバルドリッヒは笑みを浮かべる。

バルドリッヒとの通信が終わりモニターから姿が消えると、レオハルトはアイザックへと視線を移し小さく頷く。

「作戦開始」

「了解。作戦開始」

同様にアイザックも領くと、オペレータに短く指示を出す。

「クーロン隊長、艦はコンディショングレッドに移行。別命あるまでパイロットはMSで待機」

「了解しました。エリティス、コンディショングレッドに移行。各パイロットはコックピットで発進待機」

アイザックは再びレオハルトへと視線を戻すと、レオハルトはアイザックと目を合わし次なる指示を出す。

レオハルトは指示を出すアイザックを尻目に、椅子から立ち上がりと艦橋を後にすると格納庫へと移動。自身もいつでも発進出来るよう待機するのだった。

その頃、バルドリッヒが旗艦としているナスカ級フォン・ゲーテから諜報部所属のシグーが出撃。最後に隊長機としてバルドリッヒの乗機ゲイツも出撃していく。

「コロニーより、アンノウン出撃。ジン2、シグー3の混成でゲイツが1機混じっています」

「フォン・ゲーテのMS部隊とは?」

「間もなく接敵します。……戦闘、開始しました」

「始まつたか。リベラント隊長、戦闘が開始しました」

アイザックが自身のMSのコックピットで待機中のレオハルトへと通信を繋げると、軍服姿のレオハルトがモニターに映し出される。パイロットスーツを着ていないレオハルトを見て、怪訝そうな表情を浮かべるアイザック。その疑問にレオハルトは、一笑に付す。この程度のこと、何の問題も無いのだと。

「我々も出撃しよう。友軍を失うわけにはいかないからな」

「同感です。では、お任せします」

「了解した」

エリティス格納庫内が慌しくなると、エリティス内のシグーが発進

位置へと移動していく。諜報部所属のMSはすべてダークグレーに統一してカラーリングされている。

ダークグレーのシグーが出撃していき、最後にレオハルトのJUPPITERが発進位置につく。

「レオハルト・リベルト、出撃する」

レオハルトのJUPPITERが宇宙へと飛び出すと周囲にシグーが集まり、レオハルトからの指示を待つ。

「IFFを修正。裏切り者を狩りつくせ」

「はっ！」

レオハルトがそう声を掛けると、諜報部のMSは散開。レオハルトもフットペダルを踏み込むと、トップスピードで自身の敵へと向かつていった。

レオハルトたちが出撃したことは、バルドリッヒの旗艦であるファン・ゲーテも当然ながら察知していた。あまりにも早いレオハルトの出撃に、ファン・ゲーテ艦長から通信に入る。

「クーロン隊長。まだ出撃するには早いと思いますが？」

「リベルント隊長はデュランダル議長の特命を受けており、我々モリベラント隊長の指揮下で動いています。申し訳ないが、口出しは無用に願いたい」

アイザックに不満の言葉をにべもなくシャットアウトされてか、不满そうな表情を浮かべ通信は終了した。アイザックは不愉快そうに顔を歪める、吐き捨てるように呟いた。

「ドライデンめ、腰巾着が」

「まあまあ、そう言わず。彼も彼で、必死なんですよ」「奴は保身で忙しいようだからな」

アサドが苦笑し窘めるように言うと、アイザックから返ってきた厳しい言葉にアサドは再び苦笑する。

ファン・ゲーテ艦長を務めるのはエメ・ドライデン。アイザックと

同じ白服で、性格はアイザックの様子から分かるように、お世辞にも良いとは言えない。

アイザックは不愉快な気持ちを振り払うかのように、モニターに映るリベラント機へと視線を向けるのだった。

出撃したレオハルトは真っ直ぐにバルドリッヒへの元へと向かっていた。

各所でバルドリッヒ隸下のシグーと、黒一色にカラーリングされたジン・シグーと交戦している。そして同様に、バルドリッヒも黒にカラーリングされたゲイツと交戦状態にあつた。

交戦中のバルドリッヒも猛スピードで接近中のレオハルトに気付くと、不審げな表情を浮かべる。

レオハルトがバルドリッヒの元へと向かっていると、1機のシグーが10時の方角からレオハルトの近くにやつてくる。

レオハルトはレーダーを一瞬だ確認した次の瞬間、レオハルトは右肩部アーマーから“インティ ビームサーベル”を抜剣しシグーを胴体部分で両断する。

「邪魔だ」

「!」

レオハルトが自分の部下を斬り捨てた瞬間を横目で目撃し、驚きで目を見開く。だが、すぐに交戦中であることを思い出し正面へと目を向けるが、先程まで自分が交戦していた黒のゲイツがおらず、別の場所に向かっていることに気付く。

「どういう、つ!?」

どうということだと疑問に思うも振り下ろされるビームサーベルに気付き、瞬間に回避は不可能と判断し“M A - M V 0 3 2連装ビームクローザー”で受け止める。

両者のビームがぶつかり合い、火花がスパークする。

「お前の相手は俺だろう、バルドリッヒ」

「何の真似だ、ダンナ！」

「言つただろう、見届けに来たと。裏切り者の死をな！」

ゲイツと現時点の最新鋭機とでは、出力には大きな差がある。徐々に押し込んでいき、レオハルトはゲイツを蹴り飛ばし『高エネルギー ビームライフル ジエガ』で追撃を加える。

バルドリッヒはビームを回避。だが、未だ混乱の極みにあるバルドリッヒは出来る限りの速度で距離を取る。

だが、レオハルトは手を緩めない。背部で三つ折りで収納している『ビーム速射砲 ミスラ』を展開し2度引き金を引く。

1射目でバルドリッヒの移動を阻害し、2射目で撃墜を図る。だが、何とか避けられる。しかし、そんなことはレオハルトも承知している。こんなアツサリと撃墜出来るなどとは思っていない。

引き金を引いた瞬間には、ミスラを収納し操縦桿を押し込みフットペダルを踏み込む。ユピテルの各部バーニアが一斉に火を噴き、あつという間にトップスピードまで到達すると再びインティで斬りかかる。

「ちいつ！」

再びビームサーベルとビームクローがぶつかり、火花がスパークする。

「ダンナ、俺が裏切り者だと!? どういうことだ！」

「諜報部の内偵、国防事務局の捜査で貴様が裏切り、連合やラウに機密情報を流していたことはわかっている。今回の作戦も貴様が追っていた作戦も、貴様を殺すための餌だ！」

ゲイツがパワー負けし、振り下ろされたインティがゲイツの左腕を斬り落とす。吹き飛びつつバーニアで後方へと距離を取るバルドリッヒ。

そう、バルドリッヒたちがここにやつて来たサトリー一派の排除というのも、デュランダルの指示で偽装したもの。すべては、裏切り者と目されるバルドリッヒ・ゲヴェールを抹殺するため。

バルドリッヒがサトリー一派と思つているのも、諜報部特殊作戦室に所属する隊員である。同じ諜報部とはいえバルドリッヒが騙され順調に事が運んだのも、諜報部内の高い地位にある人間が協力している

からである。

「（ちつ！俺の素性がバレた!?どうこの状況をどう切り抜ける!?……待てよ。俺の素性が分かつたのなら何故、こんな非合法な手段に出る？何故、裁判をやらない？……なるほど、そういうことか）」

バルドリッヒが周囲へと目をやると、すでに自分の部下はすでに全機撃破され、周囲を取り囲むようにして待機している。

バルドリッヒは自身の圧倒的不利を悟りビームライフルを投げ捨てると、国際救難チャヤンネルを使いレオハルトへと呼びかける。

「ダンナ、降伏するぜ」

「何？」

「降伏する。本国へ移送してくれ。そして、裁判を要求する」

バルドリッヒは自身の素性がバレたのではなく、疑いが濃厚なだけなのだ。明確な証拠があるわけではないのだ。ならば、本国へ移り裁判を行えば勝てることは十分に考えられる。

だが、こればかりはバルドリッヒの認識が甘いと言わざるを得なかつた。

レオハルトはバルドリッヒの言葉には何も答えず、ジエガを投げ捨て一気に距離を詰める。驚きビームライフルを向けるバルドリッヒだつたが、呆気なく腕ごと斬り落とされ右手に新たに抜剣したインティでコックピット部分を貫かれる。

「裁判など必要無い。貴様はここで死ぬ。それだけだ」

コックピット部分を貫かれた衝撃で激しくショートし、火花が散るコックピット内。メットのバイザーも割れ、吐血するバルドリッヒ。急速に失われていく血の影響で薄れていく意識の中で聞こえたレオハルトの声に、バルドリッヒは血に濡れた口を歪ませる。

「くそったれが……。初めから、俺を殺るつもりだつたってことか……」

レオハルトがインティを引き抜くと、ゆっくりとした動きで遠ざかっていく。徐々に小さくなつていくレオハルト機を睨み付けながらバルドリッヒは力の限り叫んだ。

「ギルバート・デュランダル——ツ!!」

爆散するバルドリッヒ機を見届けると、レオハルトは反転しバルドリッヒの旗艦であるフォン・ゲーテへと向かう。

到着すると、フォン・ゲーテの周りをアイザック隸下のシグーが取り囲んでいた。レオハルトを追ってきた残りの機体も、同様にフォン・ゲーテの周囲に展開する。

レオハルトが到着すると、すぐにドライデンが慌てた様子で通信をつなげてくる。

「リベラント隊長、どうすることなのでですか！何故、ゲヴェール隊長を！」

「奴が『プラント』を裏切つたからだ。だから、処分した」

「なっ!? そんな、バカな……！ リ、リベラント隊長！ 私は違います！ 私は、裏切つてなど！」

バルドリッヒが裏切っていたことを伝えると、ドライデンはさらに慌てふためき自身の潔白を訴える。

そんなドライデンの言葉を、冷めた表情で聞き流すレオハルト。

ドライデンの頭にあるのは、自分の絶対的な身の安全。自分がこれまで築いてきたこれまでのキャリアを奪われないために、この場の全権を持つていてあるうレオハルトに訴えかける。

「我々はデュランダル議長の特命で動いている。デュランダル議長からは、バルドリッヒ・ゲヴェールの処分という命令しか受けていない」「で、では、すぐに本国に帰還しましよう」

レオハルトのその言葉を聞いて大丈夫だと思つたのか、先程までの慌てた表情から一転して冷静な風を装いレオハルトに帰還を促す。

「しかし、バルドリッヒが優秀だったとはいえ、たつた一人で出来たかと言えば疑問が残る。奴には協力者がいたのではないか、と」「た、確かにそうですな」

レオハルトが不意に口にした、協力者の存在。そう言われ、確かにドライデンは考える、確かにバルドリッヒは優秀だった。だが、レオハルトの言う通り1人で出来たかと聞かれると疑問を覚えざるを得ない。

「そういうえば、貴官はバルドリッヒと近い関係にあつたな」

「！そ、そんなことは。ま、まさか……」

レオハルトの咳きにドライデンが否定しようとした時、ドライデンは勘付く。レオハルトは、自分を処分しようとしている。

実際、今回バルドリッヒの作戦に同行しているのも、内定の結果によって分かったバルドリッヒと近い関係にある人間を選抜される。無論、この件にもデュランダルが一枚噛んでいる。

「バルドリッヒ・ゲヴェールの抹殺に成功。だが、フォン・ゲーテの攻撃を受け止むを得ず撃沈、といったところか」

「お止めください、リベラント隊長！私は、裏切ってなどおりません！私は、私は!!」

「貴様が協力者で無からうと、組織の癌細胞は除かなければいけない。手の施しようがなくなる前に」

先程以上に慌てふためき、必死に懇願するドライデン。それはドライデンだけではなく、フォン・ゲーテの艦橋にいた人間も同様だった。だが、レオハルトは冷酷に淡々と命令を下す。

「沈めろ」

「はっ！」

レオハルトが短くそう告げると、フォン・ゲーテの周囲で待機していたMSが一斉にフォン・ゲーテに攻撃を加える。

至近距離で攻撃されたナスカ級に成す術などあるはずもなく、あつさりと大爆発を起こし轟沈する。

その時、黒のゲイツがレオハルトに近付いてくると、通信をつなげる。

「初めて。今回、仕込みを担当したアーネスト・ラザフォードと申します」

「任務ご苦労。施設を放棄し、本国に帰還する」「はっ！」

今回、偽装部隊を率いたのは諜報部特殊作戦室アーネスト・ラザフォード。

レオハルトの指示を受けアーネストは部隊をまとめると、廃棄コロニーへと向かい施設の放棄に移る。

そして、レオハルトはエリテイスへと帰投。施設の放棄を終えた  
アーネスト率いる部隊と合流し、本国に進路を取るのだつた。

# Ex Operation — 3 影に潜む者

C. E. 72年某月某日

L3 宙域のデブリの陰に、二隻の【Z A F T】船籍の艦が停まつていた。

ナスカ級ティセリウス、ハートウェルの二隻である。

所属は【W I A】第四課所属の艦。第四課の主たる任務は、不穏分子の排除。

そのようなことを任務とする彼らがいるということは、つまりはそういうことである。

今回の作戦の指揮を執るのは、第四課実働部所属バルフ・エドワード。

顔に刻まれた深い皺で年齢の高さをうかがわせるが、モニターを睨み付ける瞳は鋭くそこには経験の深さを漂わせていた。

バルフは左腕の時計を確認すると、間もなくしてタイマーが0となる。バルフは正面へと視線を移すと、短く命令を発する。

「作戦開始」

「作戦開始。繰り返す、作戦開始。アルファ、ブラボーフレーン、発進」「艦長。ヘルムホルツよりキューべック、ロメオ分隊発進完了」

「残った部隊も、発進準備はしておくよに」「はっ」

ハートウェルよりゲイツRがスリーマンセルで二組出撃し、バルフの視線の先にあるコロニーへと突入。

時を同じくして、コロニーの反対側にて同部隊同課所属のナスカ級キュヴィエ、ヘルムホルツの二隻が待機していた。

オペレータの言葉通り、ヘルムホルツより同じくゲイツRが同じ編成で六機出撃。

「艦長、アルファ分隊より入電。敵、未だに発見出来ず。逃走の可能性高し」

「……内部の捜索を完了次第、部隊は帰投。本国に帰還する」「了解」

バルフは端的に必要な命令を伝え終わると、肘掛部分を人差し指で静かに叩き始める。

「（一足遅かつたか。奴らも素人では無い。むしろ、ベテランと呼べる者達の集まり。思つた以上に、時間が掛かるもしかんな）」

【全分隊の帰投を確認】

「本国に進路を取れ。帰還する」

C. E. 72年9月下旬

【アブリリウス】議事堂9Fは、全てが【WIA】の部屋で埋め尽くされている。組織の特性上、秘匿性の高い情報を扱うための処置である。

【WIA】はそれぞれの課ごとの部屋と、執務室が二部屋。そして、会議室が一部屋設けられている。

執務室があるのは長官であるレオハルトと、実質的なN.O.2に位置付けされる筆頭補佐官の二名のみである。

レオハルトが視察で留守にしている間、指揮を任せているのは筆頭補佐官である。すると必然的に、報告を受ける立場にもなる。

筆頭補佐官を務めるのはアイザック・クーロン。白服の隊員で元々は優秀なMSパイロットだったが、【グリマルディ戦線】で負傷。

左腕と右脚を失つて義手・義足となり、さらに怪我が原因で右眼も失明してしまった。その後、【WIA】の前身となる諜報部に異動。

【WIA】に改編後は、レオハルトの指名により筆頭補佐官に任せられた。

「それでは、月例会議を始める。報告のある者は順に起立」

会議室には集まつたのは、【WIA】の主要メンバーである六人。一人は勿論、筆頭補佐官アイザック・クーロン。

二人目は、第一課課長ウイグナー・ラゼツティ。三人目、第二課課長グスタフ・ストークス。四人目、第三課課長エルнст・クヌート。五人目、第四課課長アルマン・カルノー。

そして最後の六人目が、次席補佐官アーネスト・ラザフォード。以

上の六人で、今回の月例会議は進められる。

「第四課課長アルマン・カルノーです。出撃しておりましたエドワルド隊が戻りましたので、報告します」

まず最初に席を立ち報告するのは、第四課。  
「目標の施設にて、対象は発見出来ず。すでに逃走した後だつたようです」

「空振りか」

「申し訳ありません」

「何も知らない素人を相手にしているのでは無い。惜しくはあるが、ある程度は仕方ないということも理解しているつもりだ」

そう言つてアイザックは集まつてゐる一同を見渡しつつ、任務未達成に対しての理解を表す。

理解を示しているとはいゝ、目標を逃し続けているのもまた事実。そのことに対し、「プラント」内の諜報活動の任を与えられている第三課課長のエルンストは頭を下げ謝罪の言葉を口にする。

「だが、いつまでも空振りというわけにはいかない。奴らがジンM2型を手に入れたという情報もある」

「旧式とはいゝ、優秀な機体です。パイロットによつては、充分な脅威となります」

「いつまでも放置しているわけにはいかんのだよ。第三課については、これまで以上に情報収集に尽力するようにな」

「了解しました」

自身へと向けられた 咲にエルンストは立ち上がり頭を下げ了解の意を示すと、静かに着席する。

全員が着席したのを確認してか、第二課課長のウイグナーが立ち上がる。

「第二課より報告します。主要国家の情勢について、まずは大西洋連邦。停戦後、稳健派として知られるジョゼフ・コーブラントが大統領に就任したことによつて、ブルーコスマスの弱体化、反プラント運動の沈静化が見受けられます」

「なるほど。国内では弱腰と見られてはいるが、我々にとつては有利

か

「はい。次にユーラシア連邦。ユーラシア連邦については先の大戦の際、【JOSH-A】自爆により戦力に大打撃を受けたことで発言力は依然として低く、反大西洋連邦気運が西部地域を中心に今も拡大を続けています」

エルンストは事前に準備した資料に視線を落としつつ、時には集まつた人間を見渡しつつ話を進めていく。

「最後に【オーブ】です。先の大戦後、【ユニウス条約】により主権は回復。ウズミ・ナラ・アスハの遺児、カガリ・ユラ・アスハが代表首長に就任。国土の復興に全力を注いでいるのです」

【オーブ】は先の大戦中、連合の侵攻を受け国土は焦土と化した。その後も連合からの占領統治を受けていたが、【ユニウス条約】には地上の国境線および国家を戦前の状態に復旧すると記されている。

この規定により【オーブ】は国家主権を取り戻し、再び独立国家として名乗ることになった。

「それと、【蛇】からの報告なのですが。【オーブ】が、新型の可変式MSの開発に着手したという情報もあります」

「可変式か。あの国は海に囲まれている。自国の国土で戦わないことを考えれば、必然か」

「今まで陸戦用のMSしかなく、海上で連合を叩くことが出来なかつたのが、国が荒廃した原因だ。遅すぎるのだよ、あの国は」

【WIA】インテリジエンスオフィサーは長官を務めるレオハルトが情報を重要視していることから、各国に機関員。要はスペイ、潜入工作員を方々に送り込んでいる。

【WIA】では、彼らを総称して【蛇】と呼称している。

【オーブ】に潜入している【蛇】は、【WIA】に改編される以前から潜入しており長い時間をかけて深くまで潜っている。

「空戦用のMSを開発したところで、それだけのこと。獅子を失ったあの国に、脅威性を感じることは無い。他に報告。……無ければ、これまで月例会議を終了とする。解散」

アイザックの解散の言葉を合図に、一同は席を立ち会議室を出て行

く。部屋に残つたのは、アイザックと次席補佐官のアーネストの二人。

「ラザフォード、報告を聞こう」

「報告と言われましてもね。先月と変わらずとしか」

「それでもだ」

完全に一人だけになつたところで、依然として席から動かさずにいたアイザックとアーネスト。アイザックはアーネストに視線を向けると、報告を求める。

アーネストはやや肩をすくめて見せると、アイザックに対し報告する。

「【大天使】は依然として翼を休めています。【虎】は世界を見ており、【歌姫】は子供たちの世話をしているようです。【正義】は【獅子の娘】に付いています」

「動きは無しか」

「ええ、無しです。……ここまで監視するなら、一思いに【蛇】の毒を与えたらよろしいのでは?」

「長官の命令が無い。引き続き、監視を継続しろ」

アイザックのその言葉を聞いて、アーネストは席から立ち上がると肩をすくめつつ部屋の出入り口へと歩いて行く。

相変わらずの飄々とした態度を崩さないアーネストに、アイザックは眉を顰めつつ去っていくその背にさらに一言付け加える。

「監視のみとはいえ、気を緩めることの無いように部下の手綱を握つておけ。いいな、第零課課長アーネスト・ラザフォード」

「了解です、筆頭補佐官殿」

アーネストは背中越しに左手をヒラヒラと振りつつ、そのまま会議室を後にする。

アーネストと入れ替わるようにして、長身の切れ長の瞳をした女性が入つてくると静かにアイザックの後ろに立つ。

彼女は筆頭補佐官専属書記官ルチア・フェリシアーノ。アイザックの補佐を務める女性で、元々は第四課の人間だったがアイザックの希望で書記官となつた。

「よろしいのですか?」

「何がだ」

「ラザフォード次席補佐官です。任務に對しての真剣さが感じられません。長官のご意思に反抗する可能性も」

「奴はあれで構わん。……味方をも欺こうとするか、喰えん奴だ」

「何か?」

「いや、何でもない。それで、どうした?」

「長官がお戻りになりました。留守中の報告を聞きたいと」

「お戻りか。わかった」

アイザックは立ち上がり、ルチアを伴いレオハルトが待つ執務室へと向かうのだつた。

会議室を後にしたアーネストは一人で長い廊下を歩いていると、いつの間にか背後にいる自分の書記官に話しかける。

「ジオ、【蜘蛛】から何か報告はあるか?」

ジオニア・ユース・ヴィンセント。アーネストの専属書記官として補佐を勤める、黒髪・短髪の体格の良い男性である。

一見すると脳筋のように見られがちだが、専属書記官を勤めるだけあり切れ者である。

二人はエレベーターに乗り込み、ジオニアは目的の階数を押すとゆっくりと動き始める。

「毎日の定時報告だけだ。変化無し、つてな。だが、命令があれば、すぐに行に移せる」

「【掃除】の方はどうだ?」

「あいつらに先んじて【掃除】も出来たし、MSも回収した。アフター フォローも完璧だ。だが、派手に追い回したせいか残りの尻尾が掴めねえ。奴らから『教えてもらつた』場所も、もぬけの殻だ」

「そのまま続けろ。長官の手を煩わせるな。【掃除】は早めに終わらせないとな」

「了解」

そこにいたのは先程までのアーネストではなく、レオハルトが極秘裏に組織した冷徹無比な第零課をまとめる、アーネスト・ラザフロー  
ドだつた。

そんなアーネストを見て、ジオニアは静かに嗤うのだつた。

# Operation — 5 監視者

レオハルトが【極秘任務】を完遂させてから数ヶ月。

レオハルトが現在居るのは、プラント首都アブリリウス議事堂9Fの一室。

レオハルトが【極秘任務】の報告を行つた際、デュランダルから諜報部の改編、そして改編後の組織のトップへの就任を同時に命じられた。

改編後の組織名は世Worl d 界I n t e l l i g e n c e 情報A g e n c y 局、通称【WIA】。

レオハルトは【WIA】を4つの部署に分けると、【極秘任務】に協力・同行してくれたアイザック・クーロンを自身の補佐的立場にあたる、組織のNo. 2にあたる筆頭補佐官に任じた。

そして、偽装部隊の隊長を務めたアーネスト・ラザフォードを極秘裏に設立した課の隊長に任じると共に、【WIA】のNo. 3の次席補佐官にも任命していた。

【WIA】への当面の命令はすでに出し、後は上がつてくる報告に隨時指示を出す程度だった。

そして今日、レオハルトが評議会の月例会議に出席していた不在間に行われた、【WIA】の定例会議の報告を受けていた。

大きな木製のデスクを挟んで立つのは、【WIA】長官付書記長ウルライイン・ターフエン。

アイザックやアーネストたちにも配置されている補佐官である。さらに、書記長ということで他の書記官のまとめ役という立場にある。

しかし、あくまでまとめ役ということで上下関係があるということではなく、あくまで書記官に指示を出すのはアイザックやアーネストである。

レオハルトは決済する書類を止めることなく、会議で行われた話し合いの内容や、それぞれの課から上がってきた報告を聞いていく。「次に【オープ】です。【蛇】からの情報によりますと、マスドライバーの修繕に取り掛かる予定があるとか」

「カグヤの修繕か、放つておけ。【蛇】には以後も慎重にと伝えろ」「はっ」

レオハルトは、決して【オーブ】を軽んじているわけではない。むしろ、逆である。

先の大戦において【Z A F T】は連合が開発した【G兵器】の強奪任務を決行した。その計5機の【G兵器】の開発に尽力したのは、【オーブ】が有する国営企業モルゲンレー社である。

【G兵器】の開発データが存在していたとはいへリオ・ボリス崩壊後には【オーブ】主力MS、M1アストレイの量産化を行っている。

高い機動性により敵の攻撃を回避するというコンセプトで開発されたこの機体は、性能は【Z A F T】のジンや地球連合のストライクダガーと同等。

機体構造が簡略化された分、信頼性や整備性に優れるというメリットもある。

これらの点を踏まえ、レオハルトは【オーブ】を危険視すべき国家だということを認識していることは間違いない。

だが、【オーブの獅子】ウズミ・ナラ・アスハ亡き今、娘のカガリ・ユラ・アスハが代表首長の座に就いた【オーブ】を危険視しているかと聞かれると、疑問符が付く。

レオハルトとしては、今の彼女に一国家の舵取りを任せるには荷が重く、それほどの覚悟があるとも思えない。もつとも、他国であるレオハルトにしたら好都合と言えるのかもしれないが。

レオハルトは自身の中でそう考え、頭を切り替える。

『鳩』<sup>(ミニスク)</sup>は『飛び立つたか』?』

「はい。無事に『巣箱』に降り立つたと連絡がありました」

「そうか。『巣穴』との連絡は密に。サポートも怠るな」

「はい。最後に、【大天使】は未だ羽根を休ませているとラザフオード次席補佐官より報告がありました」

「そうか、監視はそのまま続けるように伝えてくれ」

「了解しました。では、失礼致します」

現時点で出す指示を出し、ウルラインはそれを受け部屋を退室す

る。ウルラインを見送り、高級そうな革椅子にもたれかかり溜息を吐くレオハルト。

現在、【オーブ】には先の大戦で活躍したアーヴエンジエルの面々が亡命している。その中でもレオハルトが注目しているのは、自身の半異父兄弟であるキラ・ヤマトの存在である。

レオハルトにとつて、キラは異質な存在である。ヒビキ夫妻を両親とするキラと、アル・ダ・フラガとユーレン・ヒビキの遺伝子を配合し、ヴィア・ヒビキによつて誕生したレオハルトとは半異父兄弟。遺伝子的には兄弟である。だが、一般的な兄弟間の情を持つているかと問われば、レオハルトは否と答えるだろう。

しかし、レオハルトがキラに何の感情も持つていなかと問われると、それもまた否である。自分と同じ創られた存在であるということで親近感のような感情を持ちつつも、同族嫌悪している部分もある。

引き出しを開けると、中に入つてゐる写真を取り出す。これは、アーネストが持つてきた報告書類の一部である。

「力ある者より、意志ある者が戦うべきだ。お前はそこに居るんだ、キラ」

写真を見てレオハルトは小声で呟く。その写真には、キラが子供たちと遊ぶ様子が映つていた。レオハルトの瞳に感情は無く、機械の様だった。

この島に、彼らはいた。  
オーブ連合首長国の近海に、スサノオ島という小さな島がある。オーブ本島とつなぐのは、午前午後にある定期便のみ。島の住人は100にも満たない、本当に小さな島である。

前大戦で多大な活躍を残した【アーケンジエル】や【エターナル】を始めとした、【三隻同盟】の面々である。  
FREE DOM<sup>フリードム</sup>のパイロット、キラ・ヤマト。そして、未だに【プラ

ント】内部で多くの支持者を持つラクス・クライン。

【アークエンジエル】艦長、マリュー・ラミアス。元【Z A F T】北アフリカ駐留軍司令官にして【砂漠の虎】の異名を持つ、アンドリュー・バルトフェルド。

他にも【アークエンジエル】のクルーなどが同様に【オーブ】に亡命し、人によつては名を変え【オーブ】の一市民として暮らしていた。そんな彼らは、このスサノオ島に【オーブ】代表首長にして姉弟（兄弟）であるカガリ・ユラ・アスハから海岸沿いの住居を貸し与えられ居住していた。

徐々に陽が沈み始めた夕暮れ時、テラスではキラが椅子に座り夕日を眺めていた。さざ波が聞こえる静かな時間とは裏腹に、家の中からは子供たちの元気な声が聞こえてくる。

キラは元気な子供たちを見て笑みを浮かべると、海へと視線を戻す。

この家に住む子供たちは、孤児である。前大戦の際に【オーブ】が地球連合軍に侵攻を受けた際に家族を失い、行き場を失つた子供である。

そんな子供たちの一部をラクスが率先して引き取り、共に暮らしている。

【キラ】

声を掛けられ視線を向けると、立っていたのは親友のアスラン・ザラだつた。

元【Z A F T】特務隊所属にして、【プラント】最高評議会議長も務めたパトリック・ザラを父に持つ。だが、そんな父も同じく大戦にて失い、「オーブ」へ亡命。

だが、実際にはアスランの持つザラの名に人が集まり、旗頭となることを恐れ厄介払いをしたかつた当時の評議会議長アイリーン・ナンバと利害が一致したことによるものだつた。

そして今、アスランはをアレックス・デイノと名を変え、代表首長カガリ・ユラ・アスハのS Pを務めると共に、【オーブ】の市民権を獲得している。

「アスラン、お疲れ。今日は早いんだね」

「カガリが最近働き詰めでな、たまには早く休めと言われていたよ。そうなると、必然的に俺の仕事も終わりだ」

「そつか。カガリ、大変そうだね」

アスランはキラの隣に置かれていた椅子に腰掛けると、同じように海を眺める。

「そうだな。国土の復興に、各国との外交。やることはまだまだ山積みだ」

「アスラン。君も、身体には気を付けてね」

「ああ、ありがとう。お前もな、キラ」

そう言つて2人は顔を見合せると、笑みを浮かべた。

「……」  
ほぼ同時刻。

本島からの定期便が来た今日、ラミアスはスサノオ島にある唯一の雑貨店にて2日分の食料を買いに外出していた。

1人では大変のためバルトフェルドが同行し、買い込んだ食料や生活用品を車に積み込んでいく。荷物を車に載せつつバルトフェルドは、ふと視線をずらす。

「……」

わずかに険しくなるバルトフェルドの目つき。だが、すぐに元に戻ると最後の荷物を積み終わると、カートを返してきたラミアスと合流すると車に乗り込み、バルトフェルドは車を発進させた。

車道を走らせつつバルトフェルドはバックミラーで後方を確認。1台の車が来ているのを確認する。

「やれやれ。毎日毎日、ご苦労だねえ」

「尾行ですね」

「こんな善良な市民を監視とは。やれやれだね」

ここ数ヶ月の間、自分たちを監視している者たちがいる。監視しているので隠れてはいるが、バレても良いぐらいの考え方で監視されている。

今、後ろから追つてくる車に乗っている人間も、自宅を監視している一団も、同じ目的を持つて監視している者たち。同じ組織、同じ命令権者からの命令で動いている。

「問題は、監視している理由」

「目的はやつぱり、ラクスさんかしら」

「彼女だけが目的なら、僕たちを監視する必要は無いんじゃない？奴らのこれまでを考えると、彼らの監視対象は大戦で“あの”三隻、特に君と僕の艦の人間。中心となつた人間と考えると妥当かな」

バルトフェルドは再びバツクミラー越しに後ろを走る車を一瞥し、そう結論付ける。

その言葉にラミアスの表情が険しくなると、同じようにミラー越しに車を見る。依然として後方の車は一定速度で走つており、付かず離れずの距離を保つている。

「でも、『彼ら』のこれまでの行動からして、自分たちの存在を隠そくとはしていませんよね」

「その通り。むしろ、バレても問題無いという考え方で行動しているだろうね」

バルトフェルドの言う通り、『彼ら』は自分たちの素性はバレないようとしても、監視していることは隠そくともしていない。

そしてバルトフェルドは、『彼ら』が只者では無いことも理解している。足の運びや尾行、さり気ない視線の動き。明らかに素人ではない。バレても問題無いと考えていたからこそ、早く気付くことが出来た理由だろう。

素人どころか、正規の軍人の動きであることは明白だつた。それどころか、正規の訓練に加えて特殊訓練を受けた者であるということでも、バルトフェルドは元【Z A F T】軍人として直感していた。

「特に実害があるわけではないけど、気分は良くないよねえ」

「とは言つても、排除するわけにはいきませんよね」

「ああ。『彼ら』は恐らく」

「【Z A F T】、ですよね」

バルトフェルドの言葉に被せるようにして、ラミアスが確認するよ

うに呴く。バルトフェルドは小さく頷くと、ようやく見えてきた自宅の前に車を停める。

“彼ら”の車は家を通り過ぎ、カーブを曲がっていき見えなくなつた。

「何とかしたいところですけど、今は静観するしかないんですね」「そうだね。まあ、幸いなことに何かするわけではないからね。今は、放つておこう」

そう言つて2人はとりあえずの結論を出すと、家にいたキラやアスランを呼び買つてきたものを家の中に運んでいく。

バルトフェルドは家に入る直前にわずかに山の上の森林地帯に目を向けるが、すぐに視線を外し中に入るドアを閉めるのだった。

### 「虎」が戻つた

双眼鏡を覗きつつ呴くと、隣にいる仲間が小さく頷く。

謎の人物たちの姿は一般人とは程遠く、パツと見ただけでは人間が居るとは分からぬほどに森と同化している。だが、そこには絶対バレないようによく考へがあるようには見えない。

つまり、隠れることが出来ればそれに越したことは無いが、バレても問題無い。という考へで行動している。

「先程【正義】も戻り、全員帰つて来たか」

「今日も変化無し」

その時、2人の耳に付けたイヤフォンから声が。

「こちらデルタ。P— $\alpha$ に到着。シグマ、交代だ」「こちらシグマ。了解、移動する。目標に変化無し」「了解。アウト」

2人は声に短く応答して最低限の荷物を手に、静かにその場を立ち去る。

同時に、また別の場所に2名の人物が姿を現し、眼下の家を監視を始めるのだった。

24万3724名。

コーディネイターにとつて、忘れられない数字である。

C・E・70年2月14日。たつた一発、一発の核ミサイルがすべてを変えた。そのミサイルがユニウス市を構成する10基あるプラント群の1つ、【ユニウスセブン】に命中。

俗に言う、【血のバレンタイン事件】である。

コーディネイターにとつては忌むべき日。多くの人々が大切な人を失い、怒りと憎しみが限界まで高まつた瞬間である。

そして、それは彼も例外では無かつた。

3年前、【血のバレンタイン事件】で亡くなつた人々を弔うため【プラント】は国葬を行つた。あの国葬で、【プラント】の意思は1つになり、まとまつたと言えるだろう。

そこには、コーディネイターの意思を1つにするためという政治的なパフォーマンス的な要素もあつただろう。とはいえ、それに関するレオハルトはどうでもいいと感じていた。

あの時のレオハルトにとつて重要だつたのは、自身の同期であり愛していたはずのフィシア・クリアーナを亡くしたということだけだった。

国葬後にクルーゼと訪れた時と同様、この場所に足を運んでいる。違うのは、今回は1人ということだけ。

レオハルトは途中の花屋で花束を購入し、共同墓地へとエレカを走らせる。信号待ちをしていると、街頭TVからは今日のために組まれた特集を行つていた。

「……」

レオハルトはその特集を横目で確認しつつ、道路を行き交う人々へと視線を移す。

今日はC・E・73年2月14日、【血のバレンタイン事件】からも

う3年が経つた。今日という日のせいか、普段はもつと活気ある街も、どこか活気が無いように見受けられた。

クラクションを鳴らされ、レオハルトはハツと現実に引き戻された。正面へと視線を戻すと、すでに信号は青へと変わっていた。

アクセルを踏み込み再びエレカを走らせ、彼女の元へと向かう。エレカをパーキングに止めると、助手席に置いていたアヤメの花束を手に取り墓地の敷地内へと歩いていく。

晴天の空の下、レオハルトは敷地内を真っ直ぐに彼女の元まで向かう。彼女の名が刻まれた墓石の前に来ると、花束を手向ける。

「……」

レオハルトはサングラスを外し内ポケットに入れると、彼女の名が刻まれた墓石を見つめる。何をするでもない、言葉を掛けるわけでもなく、ただじっと見つめていた。

その姿を、同じように墓参りに訪れた人々が怪訝そうに見ながら立ち去っていく。

どれほど時間が経ったのか、ふとレオハルトが空を見上げると晴天だつた空がいつの間にか、曇天の空へと変わっていた。すると、ポツポツと雨が降り出してきた。

徐々に降り出してきた雨を見ながら、レオハルトは思い出した。今日は夕方から雨だったと。

レオハルトが家を出たのは昼過ぎ。そこまで長居するつもりは無かつたので、傘も持ってきていない。最初は小雨だった雨も、あつという間に地面を叩きつけるような大雨へと変わつていった。

大粒の雨がレオハルトの身体を叩き続いている間も、レオハルトの足がその場から動くことはなかった。

レオハルトの心を埋め尽くすのは、哀しみとどうしようもないほど の空虚感だった。彼女を亡くしてから今日まで、これほどの空虚感を感じたことなどない。

それなのに、今日久し振りに訪れたレオハルトの心は伽藍洞。レオハルトは静かに顔を上げて造り物の空を見上げると、静かに願つた。

「(この雨が、すべてを流してくれ)」

降りしきる雨がレオハルトの髪を濡らし、髪の先から零が落ちる。一筋の水が頬を伝う。それは雨か、涙か。

空を見上げるレオハルトの顔を大粒の雨が叩くなか、目を閉じたレオハルトの脳裏に浮かぶのは彼女の姿。

思い出されるのは、笑った顔、嬉しそうな顔、怒った顔、拗ねた顔、悲しそうな顔、寂しそうな顔。

自分の感情をストレートに表現する彼女が好きだつた。ころころと表情が変わり無邪気な君が好きだつた。彼女が死んでから気付き、今になつて彼女を想つている。

今まで彼女のことここまで想い、思い出したことなど無かつた。それなのに、何故こんなにも想つているのか。

開戦当初はともかく、以降は彼女のことが頭に浮かぶことなど無かつた。敵を討つためにMSに乗り、引き金に指をかける。勝利を手にするために、その指を引く。それだけだつた。

だが、一時的にはいえ戦争は終わり平和な時間が流れ、今こうして墓参りに訪れたレオハルトは、あの日々に郷愁を感じていた。

レオハルトは自嘲気味に笑みを浮かべると、墓石に向かつて敬礼をする。数秒そのままの態勢で停止すると、ゆっくりと右手を下ろし、小さく言葉をかける。

「また来る、シア」

踵を返し歩き出した時、レオハルトは背中を軽くトンツと押された気がした。振り返つてみると一陣の風が吹き、レオハルトが手向けたアヤメの花びらをさらつていく。

『またね、ハル』

風に吹かれ飛んでいく花びらを自然と目で追つていると、ふと懐かしい声が聞こえる。

「……」

それは幻聴か、幻想か。はたまた、レオハルトを想う彼女の愛なの

か。

「好きだつたよ、シア」

レオハルトは彼女に向けて語り掛けるように呟くと、踵を返し歩き始めた。レオハルトの口元には、自然と笑みが浮かんでいた。

先程まで感じていた伽藍洞が、嘘のように満たされた気がした。いつの間にか、雨は止んでいた。

# Operation — 6 燐ぶる火種

C. E. 73年7月

【プラント】で開発中のMSのロールアウトが目前に迫つたある日、  
【WIA】長官室で仕事をしているとデュランダルから呼び出しを受け  
レオハルトは議長室を訪れていた。

入室すると、デュランダルしか居ないと思つていた部屋に先客がいた。

「お久しう振りです、レオ」

「久し振りだな、レイ」

先客は、レイ・ザ・バ렐。士官学校卒業を間近に控えたレイだつた。

以前、レオハルトが視察の際に会つて話して以来だつた。お互に笑みを浮かべ、久々の再会を喜ぶ2人。

「いきなり呼び出してくれますね、レオ。レイが来月、ついに士官学校を卒業するからね。少し早いが、卒業祝いで食事でもどうかと思つたね」

「おめでとう、レイ。そういうことなら、付き合わせてもらおうか」

レオハルトが了承すると、デュランダルはまだ話があると言つてレイを部屋から出すと、改めてレオハルトへと視線を移す。

「君も知つてゐる通り来月、SSSの6機がロールアウトする。その内の1機のパイロットを、彼にしようと思つている」

「シン・アスカか」

デュランダルが机の上を滑らせるようにして差し出してきたのは、今年の士官学校卒業生の顔写真付きのプロフィールのリストだつた。付箋が付けられたページをめくると、まだ幼さの残る顔立ちをした少年が写つていた。

「どうかな、レオ」

「俺に決定権も、否定する権限も無い。それに、もう決めているのだろう?」

レオハルトはリストを机の上に投げると、デュランダルの質問にそ

う返した。肯定も否定もしなかったデュランダルだが、レオハルトは確実に前者だろうと考える。

「もう一つ。君には先に話しておこう」

「まだあるのか」

「プロパガンダのための人間を、【プラント】に招き入れようと思つてね。彼女、ラクス・クラインを」

「……替え玉か。確かに、彼女の影響力は今の【プラント】にとつて大きい。彼女が亡命した今でも、な」

現在、ラクス・クラインは【オーブ】へ亡命の状態にある。

無論、【プラント】の市民がその事実は知らされていない。病気のため療養、養生という形をとつている。

前大戦の際、ラクス・クラインは前大戦の際、キラに当時の最新鋭機であり【NJC】を搭載した極秘機体のF<sub>フ</sub>R<sub>リ</sub>E<sub>ダ</sub>E<sub>ム</sub>D<sub>オ</sub>O<sub>ム</sub>Mを譲渡している。

さらに、極秘裏で進められていた【オペレーション・スピットブレイク】の真の標的地であるアラスカ基地こと【JOSH-A】への情報流出させたとして、クライン親子は国家反逆罪により指名手配される予定だった。

だが、市民に多大な悪影響を与えることやアスランとの婚約破棄によるパトリックが自身の支持率低下を恐れ、口頭のみで公式の発表などはしなかつた。重病により療養中という形を取り、後に病死ということで処理しようと考えていた。

その後の戦争の状況の変化により次第にラクス・クラインの存在は後回しにされていき、現在に至っている。

戦争終了後にラクス・クラインの行方を捜索すると、【オーブ】への亡命が発覚。新議長になつたデュランダルによつて、この件は放置されている。

「【オーブ】の彼女を呼び戻す気は無いか」

「また新型を横流しされるのは困るからね。それに厄介だろう、色々とね」

さらに、【プラント】にとつてラクス・クラインはデメリットしかな

いとデュランダルは考えている。

故シーゲル・クライン元議長が最高評議会の議長を務めていた時から、彼女の影響力は父と同等と考えられていた。

さらに、現在の彼女は重病により歌手業務を休業しているという建前がある。そんな彼女が長期の休業期間を経て重病を乗り越え再び表舞台に姿を現せば、劇的な復活劇を遂げたという美談が生まれ、その影響力が増すことは想像が容易い。

そんな彼女を支持する【クライン派】と呼ばれる組織の様なものも存在している。信じたくは無いが、彼女が一声掛ければ現政権の長たるデュランダルに敵対する可能性も十分に考えられるのではないか。そうなれば【プラント】内部に余計な不和が生まれ連合に付け込まれることも考えられ、最悪【プラント】という国家が二分化してしまう。

つまり、デュランダルはラクス・クラインとは相容れない存在。そう考えているのだ。

「【オーブ】の『彼女』はどう思うだろうな」

「【プラント】に居るのが『ラクス・クライン』だよ。【プラントの歌姫】と呼ばれた彼女が、【オーブ】に居るはずが無いだろう？」

デュランダルはラクス・クラインのことを、個人として捉えていない。【プラント】国民の意思をまとめるための象徴でしかないのだ。そこに個人の意思は邪魔でしかない。彼女の意思など異物なのだ。彼女の意思に感化された者たちが、再び起たれると困るし、厄介事でしかないのだ。

「替え玉を用意することは【プラント】に利がある。それに、『彼女』を呼び戻すことに関しては、俺も危険だと考えていた」

「君が私と同じ考え方で嬉しいよ」

レオハルトが【オーブ】へと亡命したラクス・クラインを呼び戻すことに対する反対だと知り、デュランダルは自分の考えを察し賛同していくことに内心では感心する。同時に、強力な賛同者がいることに安堵する。

2人の話し合いはそれで終わると、レオハルトは現地で合流するこ

にして一度【WIA】の執務室へと戻る。

レオハルトが部屋に戻るとすぐに、隣に併設されている部屋からウルラインが訪れる。入室を許可すると、レオハルトはウルラインから一つの茶封筒を受け取り、中身を確認する。

「調査の結果、不審な人間は見受けられません。ただ、艦長に着任予定の人物なのですが」

「何かあるのか？」

少々言い淀んだウルラインに、珍しいこともあると考えつつレオハルトは続きを促す。ウルラインは資料の最終ページを確認するようにお願いする。

レオハルトは途中のページを飛ばし最後の資料に目を落とし、調査結果を読み進めていく。それと並行して、ウルラインからも報告を続ける。

「白服に昇任して間もないですが、能力を評価され艦長へと内定しました」

「ウルラ。お前の所見は」

「艦長就任については妥当かと。しかし、昇任したばかりということで、経験不足な面もあるかと思います。なので、当面はベテランの副官の元、艦長としての経験を積むのが定石だとは思います」

「確かに」ということは、これが原因かとも思ってしまうな

レオハルトは机に置いた書類に書かれている一文を人差し指で軽く叩きながら、独り言のように呟く。

レオハルトが指で叩いたその場所には、【プラント】の最重要人物との間に非常に“親密”な関係が確認されたことが記されている。

その“親密”な関係が、現在も続いていることも。

「あるいは、その方が自分に都合が良いと考えたか」

「どういたしますか？」

「この件は終了だ。書類はすべて処分しろ。データもな。通常業務に戻つてくれ」

「かしこまりました」

ウルラインは返された書類を受け取ると、静かに口を開く。

「最後に、お耳に入れておきたいことが」

「どうした」

「[O<sup>オ</sup>M<sup>ン</sup>B<sup>ラ</sup>R<sup>ア</sup>]」がここ1、2カ月ほど騒がしいようです」

ウルラインのその言葉に、レオハルトの眉が微かに動く。

[O<sup>オ</sup>M<sup>ン</sup>B<sup>ラ</sup>R<sup>ア</sup>]はイタリア語で『影』を表す単語であり、[O<sup>オ</sup>M<sup>ン</sup>B<sup>ラ</sup>R<sup>ア</sup>]はレオハルトたちが独自に名付けた名称。本来は、【直轄特殊部隊】という名称。

【直轄特殊部隊】とは、文字通り国防に関する事務処理を行う部局である【国防事務局】が独自に抱える、【プラント】-[Z A F T]の組織図のどこにも記載されていない、非公然部隊である。

【プラント】の広報関係を一手に取り仕切る【広報局】が、連合側の混乱を招くために意図的に流したという噂がある。

だが、実際に【直轄特殊部隊】は存在する。レオハルトがこの存在を知ったのも[W I A]の長官に就任し、【プラント】のことを表裏問わず調べた結果であり、知つたのも偶然という側面が強い。

それほどに巧妙に存在は隠匿され、その存在を知る者は極一握りに限られる。

「何をしているか探ろうとしましたが、察知されるが恐れがあつたため一時手を引きました」

[O<sup>オ</sup>M<sup>ン</sup>B<sup>ラ</sup>R<sup>ア</sup>]のことは放つておけ。人員も最低限の監視を残して撤退せよろ」

「かしこまりました」

「報告はもう無いな？下がつていい」

レオハルトの命令にウルラインは何も言わずに了解の意を示すと、レオハルトの命令を伝えるため部屋を退出していく。

レオハルトは頬杖を付きながら、先程の書類に書かれていた報告内容を頭の中で反芻する。

「彼女がお前の新たな手駒か。あるいは、あの艦自体か」

レオハルトの脳裏に浮かぶのは、書類の最後に載っていた S S S と同時に就航予定の新造艦の艦長に着任予定の女性。

ウルラインが調べてくれた調査結果を考えると、大抜擢とまではい

セカンドステージシリーズ

かなくとも周囲を驚かせる人事にはなるだろう。邪推する人間も出てくるという想像も容易い。

「ボーンで終わるか、プロモーション出来るか」

続いて頭の中に浮かぶのは、【直轄特殊部隊】のこと。

非公然ながらも【国防事務局】に組み込まれた組織。国防に関連した組織なので、一応は【国防委員会】の下部組織のような位置付けにはなる。

だが、実際はデュランダルの直轄部局のようになつてている。デュランダルの人望なのは不明だが、現在の国防委員長がパツとしない人間だというのも原因の一因なのかも知れない。

「動き始めたということか」

レオハルトは誰も居なくなつた部屋で呟くと、火種に火がつきジリジリと燃える音が鳴つた気がした。

C. E. 73年9月某日

【プラント】は先日、【Z A F T】次世代主力量産型MSという名目で開発されたN<sub>ニユーミレニアムシリーズ</sub>M<sub>アム</sub>Sと呼ばれるZGMF—1000ZA<sub>ザク</sub>K<sub>ク</sub>U<sub>ウオーリア</sub>WARRIORを正式にロールアウト。

当初は【NJC】搭載型のZGMF—X999A ザク量産試験型を開発していたが、【ユニウス条約】の締結により【NJC】が禁止されると同時に、MS保有数にも制限が掛けられてしまった。

そのため改良を加えたZGMF—1000 ZAKU<sub>ザク</sub>WA<sub>ウォーリア</sub>RRIORへと方針を転換し、無事にロールアウトを迎えた。

原型機であるZGMF—X999A ザク量産試験型が採用していた黄色に変化するPS装甲が不採用となつてはいるが、機体の装甲は大気圏の突入に耐用する堅牢性は受け継いでいる。

ZAKU<sub>ザク</sub>はまさにニユーミレニアム（新千年王国）の名の通り、榮光あるコーディネイターの未来を担う機体であるとされ、1000の形式番号もかけて『サウザンドシリーズ』とも呼ばれている。

MS保養数に制限が掛けられたことにより、局地戦向け専用機の役割を単機で担える多用途性を兼ね備えさせるため、かつてコートニー・ヒエロニムスが提唱した武装換装システムを元にした、武装換装方式【ウイザードシステム】を開発。

装備する兵装が定まっておらず出撃の度に変更することが可能であり、1機で多種多様な状況に応じた兵装を変更することが可能な、国力の面から考えても非常に有効なシステムである。

ちなみに、機体名のZAKU《ザク》とはZaft Armored Keeper of Unityの頭文字を取つて命名され、ザフトの輝かしい新時代を担うもの、という願いが込められている。さらに、【プラント】は新型MS5機を正式パイロット任命前ではあるがロールアウトを決定。【プラント】で工廠の役目を持つアーモリー市でも、一番の規模を誇る【アーモリーワン】にて格納状態にあつた。

最後の1機は最も早く完成した機体なのだが、重大なトラブルによりロールアウトが大幅に遅延。そのため、同時期のロールアウトは見送られる形となつた。

そしてレオハルトも現在、【アーモリーワン】に駐留しており1号棟ブリーフィングルームに姿があつた。

会議室は等間隔で椅子が並べられており、その名通りブリーフィングに使うための部屋だつた。部屋には4人の姿があり、その内の1人がレオハルトだつた。

「ここでシンが焦つたのが敗因だな。シンを戦闘不能にした後は、動搖したルナマリアを撃墜して最後はレイだけだ」

会議室のスクリーンには、4機のMSが映つてゐる。1機はレオハルト専用機のJUPITER。

JUPITERには更なる追加改修を行う考えがあつた。具体的には新型動力である【デュートリオン送電システム】の搭載、部分的にはあるが【VPS装甲】も予定していた。

セカンドステージシリーズ  
S S Sにも搭載されている大容量バッテリー・パックの【パワー

エクステンダー」が追加されたことにより、ビーム兵装のより効率的な運用と長時間の稼働を可能とさせている。

そして残りの3機のうち2機は、*ZAKU*である。

1機の*ZAKU*は機体を赤に塗装し、装備兵装は【ガナーウィザード】。大型ビーム砲と専用エネルギータンクで構成される砲戦型の兵装を装備。

もう1機は白に塗装し、「ブレイズウイザード」を装備。多数のスラスターを備えた機動戦型の兵装である。

宇宙での防衛能力を重視して設計され、大気圏内外を問わず運用可能な無重力下での機動戦で高い能力を発揮し、飛行能力を得られない事から地上では機動力強化装備として機能する。

そして最後の1機は、白と青を基調としたカラーリングにV字アンテナ。*S S S*に位置付けされる機体であり、現時点における最新鋭のMS。

ZGMF-X56S IMPULSE。

型式番号の5は換装型、6は開発ナンバー、Sは*S S S*を示す。

インパルスはコアユニットであるコアスピレンダー、上半身のチエストフライヤー、下半身のレッグフライヤーの合体でMS形態となる機構を導入し、生存性と戦闘継続能力に秀である。

また、合体機構によって上下半身も変更可能なため、それらの交換装備が用意されれば戦闘中に異なる機体に乗り換える様な運用も可能となる。

さらに *IMPLUSE*は、ミーティア改などのMS用オプションの思想、さらに連合のストライカーパックの運用思想を参考に、*ZAKU*の【ウイザードシステム】を発展させた専用の武装換装システムの【シルエットシステム】がある。

シルエットは高機動戦・通常戦闘用仕様であるフォース、接近戦・対艦戦仕様であるソード、砲撃戦仕様であるブラストの3種類が用意されているが、これらのシルエットは必要とされるエネルギーがそれぞれ異なるため、装着したシルエットにより機体が消費するエネルギーも異なる。

そのため、装着したシルエット毎にV ヴァリアブル P エイズシフト S 装甲に掛ける電圧を調整し、エネルギー消費の更なる効率化を図っている。その副次効果により装甲の色は装備するシルエットごとの固有に変化する。

また、インパルスは全形態において大気圏内におけるホバリング機能を持ち、シールドとビームライフルを標準で携行する事から、戦闘における汎用性はより向上する事となつた。

そして現在、映像に映し出されているのは高機動戦に優れる【フォースシルエット】を装備していた。

映像に映し出されているのは、昨日行われていた模擬演習の模様である。レオハルトVS残りの3機である。一見、不利に思える状況ではあるが、レオハルトのは持ち前の技術とMSを巧みに操り、3人を翻弄し最終的には撃墜判定を出している。

「前も同じだつたじやない。頭に血が昇つたシンがやられたのをきっかけに、負ける。パターンが出来ちゃつた感じね」

そう言つて肩をすくめるのは、ショートの赤い髪に快活そうな印象の少女。彼女の名前は、ルナマリア・ホーク。

2ヶ月前に士官学校アカデミーを卒業したばかりであり、赤服を着用していることから分かるように優秀な成績を残して卒業している。

「うるさいな、ルナ。ルナだつて、あつさりやられてるだろ」

口をとがらせ不機嫌そうにムツとした表情で口を開いたのは、シン・アスカ。

同じく赤服のエリートでルナマリアとは士官学校アカデミーの同期であり、次席で卒業したことから非常に優秀である。

だが、ルナマリアに指摘されたことから分かるように、直情的な性格ですぐに周りが見えなくなり易い傾向にある。

実力は確かであり、それは士官学校アカデミーを次席で卒業という結果で表れている。その直情的な性格さえ直せば、というところである。

「レイ、どう思う」

「はい。ルナマリアの言う通り、シンが敗北のキツカケとなつたのは事実だと思います。ですが、我々3人の連携が稚拙であつたことも問題のように思います」

「同感だ。確かに、シンがキツカケではあった。だが、それはキツカケに過ぎず、連携がまだまだお粗末だ。故に、お前たち3人の撃墜は必然だ」

レオハルトが話を振ったのは、今まで静かに話を聞いていたレイ・ザ・バレル。アカデミー士官学校を首席で卒業し、その冷静さと観察眼でMS戦においても敵の弱点を突くなどの巧みな戦闘を得意としている。

レイの主觀の立ち位置に居ながらも俯瞰で観た私見に、レオハルトは小さく頷く。続いてレオハルトも所見を述べる。曰く、3人の撃墜は偶然ではなく必然であると。

レオハルトは手にしていたリモコンで映像を止めると、3人に厳しくも戦争の真理の言葉を投げかける。その言葉に感情は無かつたが、それが妙にリアルでシンとルナマリアはたじろぐ。

レオハルトは実際に戦場に立ち、命のやり取りをしていたのだ。間近で命が散っていくのも見ており、命を散らせる瞬間も見ているのだ。そんな人間の言葉に、リアルが感じられるのは必然である。

その時、建物全体に正午を告げるサイレンが鳴り響く。

「今回の摸擬戦でのそれぞれの気付いた点、反省点・改善点などをレポートで提出するよう。期限は明日の正午まで。以上だ、解散」

レオハルトが部屋を退室した後、部屋に残された3人は正していた姿勢を崩す。

そのままその部屋で話していた3人だったが、昼食の時間ということを思い出し部屋を出ると食堂へと向かつた。

3人はそれぞれのメニューを注文し受け取ると、広い食堂の一角に腰を下ろす。シンはカツ丼に漬物、汁物のセット。レイはパスタを注文し、ルナマリアはヒレカツ定食を注文していた。

3人の話題は自然に、先程まで行われていた摸擬戦の反省会の内容へと移していく。

「それにしても、あの摸擬戦。シンが突っ込んでやられちやつたとはいえ、3対1でもあつさり負けちゃつてちょっとショックよね」

「当たり前だろう。俺たちは士官学校アカデミーを卒業したばかり。リベラント隊長は開戦当初から最前線で結果を残してきた、トップエースだ。俺

たちと比べるのも烏滸がましいぞ」

ルナマリアがぼやくようにそう呟くと、また自分の失敗を口にされシンは顔を覗めるとカツ丼を雑にかき込む。すると、口一杯に詰め込みすぎたのか咳き込むシン。

そんなシンに、レイは冷静に水を渡す。コップに入った水を一気飲みするシンを尻目に、フォークに巻き付けたパスタを口に運ぶ。

「確かにそうなんだけど、あたしたちだけて一応赤なのよ？ もうちょっと出来ると思つてたの」

「過信するのは、摸擬戦だけにした方がいい。リベラント隊長が仰っていた通り、実戦だつたら俺たちは今こうして食事はしていない」

奢めるわけでもなく、ただ淡々と事実だけを述べるレイ。そんな身も蓋もないレイの言葉に、ルナマリアだけでなくつきまで不機嫌だったシンまで肩を落としていた。

「赤など、所詮は士官学校卒業時の成績の結果でしかない。同期の46人の中での赤だ。同期の人間が違えば、赤ではなかつた可能性もある。赤とか緑などにこだわるのは、ナンセンスだと思うがな」

フォークをくるくると回しパスタを巻き付けながら、レイは気落ちする2人に向けて追撃の言葉を投げかける。

辛辣ではあるが正論にルナマリアは何も言い返すことは出来ず、同じく氣落ちするシンと顔を見合わせる。2人は同時に小さく溜息を吐くと、これ以上傷付けられないようになにか集中するのだった。

3人とは反対側の場所には、やや遅れてやつて来たレオハルトが食事を受け取り空いている席に1人腰を下ろす。

レオハルト自身に自覚は無いが、その独特な雰囲気やこれまでの功績。さらには以前のレオハルトを見たことのある人間は、髪色の変化に戸惑うなど様々な理由から距離を取られていた。

とはいって、レオハルトはそんなことを気にする様子もなく淡々と今日の昼食に選んだ、チキン南蛮定食を食べ進めていく。

「こちらの席、よろしいですか？」

半分ほど食べ進めたとき、不意に声を掛けられ顔を上げる。そこに居たのは、「プラント」防衛部第7防衛班オリンベル隊隊長ラミリア。

オリンベル。

「ゾ自由に」

レオハルトは珍しい人物に声を掛けられたと内心考えながら、食事を再開する。

彼女は【第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦】の最中、パトリック・ザラによつて軟禁状態にあつたアイリーン・カナーバを中心とした稳健派議員を解放し、クーデターを敢行。

強硬派の議員たちを拘束すると同時に議会を占拠。パトリック・ザラの死を契機に暫定評議会を起ち上げ、連合との停戦交渉を行つている。

彼女は、そのクーデターを行つた部隊の急先鋒。ではなく、秘匿されていたカナーバらの軟禁場所を調べ開放するなど、後方任務を行つていた。地味ではあるが、重要な役割を担つていた。

そのため、彼女が稳健派議員を解放しクーデターに協力したこと。そして、クライン派であることは大多数の人間が知らないことだ。

レオハルトの正面の席に腰を下ろすと、おろしハンバーグ定食を食べ始める。箸を綺麗に使い食べ始めると、不意にレオハルトへと話しかける。

「光栄です、彼の有名なトップエースとお食事出来るのは  
「自分の任務をこなしただけです」

「あら、殊勝ですね」

ラミリアのチクリと刺すような皮肉に、レオハルトはさして気にも留めずにただの結果だと告げる。

自分のことなど眼中にも無いような態度に、ラミリアの眉間に皺が寄る。ラミリアはハンバーグを箸で切り口へと運ぶと、続けて米を口に運び咀嚼する。

ハンバーグの美味しさにラミリアの表情が綻ぶが、正面に居るレオハルトの存在を思い出し表情を引き締める。だが、レオハルトは相変わらず自分のことなど眼中にない様子に再び眉間に皺が寄る。

「最近、お忙しいようですね？」

【WIA】の長官という大事な仕事があります。疎かには出来ませ

ん

「パトリック・ザラの次は、デュランダル議長ですか？フットワークが軽いんですね」

【WIA】へと改編後に長官にレオハルトが就任したことは、周知の事実。就任以降のレオハルトは、今までより忙しくなったのは当然である。

そんなレオハルトに向けて、ラミリアから再び皮肉が飛んでくる。以前はパトリック・ザラに重用されてきたレオハルト。そして、【WIA】長官とは内外の諜報関係を一手に担う組織である。

そんな重要なポストに就いたレオハルトは、新たに最高評議会議長に就任したギルバート・デュランダルからも前議長と同様に重用されていると推測することは容易だろう。

そんなレオハルトを見て、ラミリアは巧く立ち回ったと言いたいのだろう。要は、上手に権力者に取り入りましたね、と。

レオハルトは内心深く溜息を吐く。何故、自分はここまで敵視されているのかと。

レオハルトは、ラミリアと今まで個人的な交流は無い。お互いが高い地位にいるため、無論ながら顔は知っているくらいである。

何故自分がここまで敵視されているのかと疑問を抱くが、まあ仕方ないかともレオハルトは思う。レオハルトの功績を考え納得する人間もいれば、理解はしつつも嫉妬する人間もいる。

感情と理屈は別なのだ。理解は出来ても、納得はしたくない。そんなところだろうと、レオハルトは当たりをつけた。

そう考えながらも、レオハルトは意外だった。交流は無いが、情報としては知っている。その情報では、こういう人間とは思っていたなかつた。あるいは、何か目的があつてそう装つているのか。

レオハルトは【WIA】長官として、【WIA】がクライイン派としてマークしている彼女の情報に1つプラスすることにした。クライイン派と目される人間は、程度の差はあれど【WIA】の監視の目があるのだ。

「オリンベル隊長はお変わりないようで。デュランダル議長も、手伝

つていた人間は扱いにくいようだ。それとも、クライイン派だからですかね？」

「?」

「失礼」

ラミリアが来る前に大体食事が終わっていたレオハルトは、立ち上がりつつラミリアに皮肉を口にする。トレイを持つて歩き去りつつ一瞬だけラミリアを一瞥する。

あえて、こちらからも皮肉を口にすることで相手の反応を見る。それによつて、情報ではなく実際の体験した情報として、彼女個人の情報に新たな文言を足すことが出来る。

「(感情が顔に出やすい。いや、顔だけではなく外に出やすい性質のようだ)」

トレイの返却口へと歩きつつ、最後の一瞬に見えたのは力が込められた両手。ここが食堂でなければ、怒鳴られていたかもしれない。

「(予想外の状況に弱い? やや直情的な面もあるのか?)」

レオハルトは出口で最後にもう一度だけラミリアの座つていた場所へと視線をやると、ラミリアと目が合つた。彼女は、嫣然とした笑みを浮かべていた。

レオハルトは食堂を出て廊下を歩きながら、先程の彼女への評価を改めると同時に警戒度を引き上げる。

「(何を考えている。何故、自ら怪しまれるようなことをした。自ら注意を引き、【WIA】の監視の目を分散させたい?)」

レオハルトは考える。ラミリアは何を企んでいるのか。何故、自分に接触してきたのか。意味があるとしたら、それはクライイン派としての行動なのか。それとも、ただの気まぐれ故の行動なのか。

「(いずれにしろ、情報通りではないということか。勉強になつたよ)」建物の入り口には、レオハルトを見つけたのか敬礼をしているウルラインの姿があつた。レオハルトは行くぞ、と短く声を掛ける。ウルラインの運転する車でレオハルトは走り去っていく。

ラミリアも食事を終えると、トレイを返すとレオハルトとは別の出口から食堂を後にする。

「如何でしたか、 我らのトップエースは」

「優秀なのは確かね。 軍人としては、 だけど」

「お眼鏡には適いませんか？」

「まだまだ若い、 ということよ」

ラミリアはいつの間に自分の後ろにいた副官と、 驚くこともなく会話する。 不意に現れるることは慣れているのだろう。

ラミリアはわずかに言葉を交わしたレオハルトを、 軍人としては優秀であるが、 まだまだ若い。 という評価を下す。

この判断が、 彼女にとつて吉となるか凶となるか。

## 原作開始

# Operation — 7 怒りの炎

C. E. 73年10月2日 L4プラント群 アーモリーワン  
この日、レオハルトは再び【プラント】でもトップレベルの軍事工廠アーモリーワンを訪れていた。

先月は士官学校を卒業したばかりのシンとレイ、そしてルナマリアの3人にMS教練を行っていた。しかし、それも2週間程で終わりアーモリーワンに戻ると、今までの通常業務に戻つていた。

そして今回、再びレオハルトがアーモリーワンを訪れた理由は、S S Sの運用艦として建造された新造艦の、明日開催される進水式に出席するギルバート・デュランダルの護衛のためである。

そのためレオハルトは先んじてアーモリーワンにやつて来て、【WIA】第四課も一部投入し任務に当たらせている。

そして、デュランダルは進水式の出席以外にもやらなければいけないこと。というより、会わなければいけない人物がいるのだ。

その相手とは、「オーブ」連合首長国国家元首カガリ・ユラ・アスハ。先方から内々かつ緊急にという要請を受け本来ならアーモリーワスで行うべき会談を、進水式を控えたアーモリーワンで極秘という形で行うことになったのだ。

そしてレオハルトは今回、新調された軍服を着用していた。

レオハルトは現在【ZAFT】として【WIA】長官、特務隊【FAITH】という、いずれも高い立場にあるということは間違いない。

これほど高位の立場にいる人間が、いつまでもただの赤服というのは如何なものかという声が上がつたのだ。そのため、デュランダルがオーダーメイドの軍服を作らることにしたのだ。

そして出来あがつたのが隊長職等を示す白服を基調に、右肩から斜めに入った赤の一本線。その端を金色で縁取られた軍服。レオハルトのためのオーダーメイドの軍服である。

「リベラント隊長、間もなくです」

「ええ、行きましょうか」

レオハルトは時計へと視線を落としデュランダルの到着時間であることを確認する。その時、紫服を着用した国防委員会の人間に声を掛けられると、2人は現在居る本棟の外へと向かう。

間もなく、この場にデュランダルを乗せた中型輸送ヘリが到着する。そのための出迎えとして、手が空いている国防委員会の人間でデュランダルを出迎える。

国防委員会の人間は左右に整列し、その中央でレオハルトは待つ。その時、ヘリのローター音が聞こえてくる。空へと視線を向け近付いてくるヘリを確認すると、レオハルトは左右に並ぶ人間たちと視線を合わせ互いに頷く。

ヘリが着陸しタラップが降ろされ扉が開くと、中から最高評議会議長ギルバート・デュランダルが降り立つ。同時に、全員が一斉に敬礼をする。

「お待ちしておりました、デュランダル議長」

「ああ、リベラント隊長。出迎え、ありがとうございます。皆も」

「ご案内致します。こちらへ」

レオハルトが先導し歩き始めていると、レオハルトの左耳に付けた小型通信端末に連絡が入る。

「こちらB、『姫』<sup>ラボ</sup>が到着。移動する」

聞こえてきたのは、明日の進水式前の仕事相手が到着したことを知らせる連絡。突然左耳に指を当てるレオハルトを不思議そうに見ていたデュランダルに、レオハルトは静かに近付き小声で話しかける。「『姫』が到着したそうです」

「フツ。まつたく、忙しいことだな」

その言葉にデュランダルは笑みを浮かべると、再びレオハルトの先導で本棟の上階に設置された非公式の会談場所に向かうのだった。

デュランダルを会談場所に送り届けた後、会談場所の階下に設けら

れた【WIA】の人員の待機室を訪れた後、また別の部屋を訪ねていた。

明日行われる進水式にはすでに訪れているデュランダルは勿論、国防委員長のタカオ・シュライバーなどを始めとした重要人物が多数出席する。

戦時下ではないとはいっても、【Z A F T】を脱走した旧ザラ派などのテロリストも存在している。それらの警戒もあるため、護衛にあたる人間たちは緊張感が漂っていた。

【WIA】が独自に考えた護衛計画と、兵器工廠アーモリーワン側の護衛責任者との打ち合わせなどを行い、認識の共有を行っていた。

「では、この計画で行きましょう」

「ええ、何も起きないことを願うばかりです」

「同感です。では、私はこれで失礼致します」

話し合いが終わり部屋を出たレオハルトが時計へと視線を落とすと、1時間近く経過していた。もつと長くなると予想していたのだが、お互いの計画にあまり差が無かつたことが影響しているようだった。

再び【WIA】の待機室に戻り、部下へと決まった護衛計画を説明しなければと歩き出した時、それは起こった。

突如として基地全体に鳴り響く警報。途切れることなく鳴り続けるこの警報は、緊急事態用のもの。つまり、それだけのことが起こったことを表す。

レオハルトはすぐに走り出し本棟の窓から基地を見下ろした瞬間、爆発が起こる。レオハルトは反射的に窓から離れ物陰へと転がる。

爆風で硝子が激しく振動する中、レオハルトは物陰が出ると再び基地へと視線を落とす。

レオハルトの視線の先には正式に部隊配属前の【プラント】の最新銃 M S、<sup>セカンドステージシリーズ</sup>S Sの3機、C H A O S、G A I A、A B Y S Sの姿だった。

格納状態であるはずの3機が起動し、M Sが格納されているハンガーを次々と破壊していく。それは正に、敵が迎撃に出てくるのを妨

害するため。

「ちいっ！」

レオハルトは踵を返して走り出す。階段は降りるのではなく、跳躍していく。段を踏むことなく階段を降り、1階に向かう。

レオハルトは左耳の小型通信機越しに【WIA】の部下へと指示を出す。

レオハルトは、事前にS<sub>セカンドステージシリーズ</sub>S<sub>セカンドステージシリーズ</sub>Sが強奪されるという線も考えていた。S<sub>セカンドステージシリーズ</sub>S<sub>セカンドステージシリーズ</sub>Sは、現在の【プラント】の軍事機密の塊であると言つていい。

1機でも強奪して解析すれば、【プラント】が持つあらゆる技術が外部に流出する。そんな技術の塊が、同時に3機も強奪されている。目の前で。

強奪犯が何者なのかは現時点では不明だが、明確な敵であることは疑いようもない事実。

レオハルトは本棟を出ると、一目散に自身の専用機が格納されているハンガーへ走る。JUPITERの置かれているハンガーが見えた瞬間、レオハルトの目の前にABYSSが現れる。

「!」

レオハルトは急停止するとすぐ傍のハンガーの中に隠れた瞬間、ABYSSが“M68 連装砲”を目的地としていたハンガーに向けて発射。

“M68 連装砲”は両肩シールドに装備される武装で、砲門数は計4基。実弾兵器として炸裂式の砲弾を装填しており、威力は高い。水中でも使用可能となっている。

当然ながらハンガーは爆発。中のMSも無事では無いだろう。迎撃のためにやつて来たレオハルトだが、専用機は使用不能。

レオハルトは仕方ないので量産機で迎撃に出ようと考へた時、あることを思い出す。レオハルトは頭の中で基地の地図を出し、目標の46番ハンガーの場所を思い出す。

外へと目を向けると迎撃に出てきたMSにABYSSは対処していたため、レオハルトはハンガーを飛び出し再び走り出す。

レオハルトは4つ離れたハンガーに突入。中にいた兵士たちが驚くのも無視して、格納されているMSに近付く。

「こいつで出る！」

「リベラント隊長!?ですが、パイロットは！」

「緊急事態だ！そんなことを言っている場合か！」

レオハルトは制止を振り切り横たわっているMSへと身体を滑り込ませると、機体の起動スイッチを押す。

機体のOSが起動し、画面にはGeneration Unrestricted Network Drive Assault Moduの文字が表示される。頭文字を取ると、G. U. N. D. A. M.

「量子触媒、反応スタート。パワーフロー、良好。全兵装アクティブ、オールウェポンズフリー。システム、戦闘ステータスで起動」

機体が完全に起動すると、機体の両眼が光る。機体がゆっくりと立ち上がりしていく中、レオハルトの両手はキーボードを叩き、OSを自分の操縦し易いように書き換えていく。

機体が立ち上がるときレオハルトはさらに、あるスイッチを押す。すると、機体カラーパレットが白をベースとし所々に青と黒のラインが入った外観へと変化する。

この機体は、ZGMF-X12S オーラノス。

型式番号が示す通り、セカンドステージシリーズの内の1機。開発コンセプトは

原点。新たな技術などを取り入れるなどはしていない、シンプルな機体。

だが、その分パイロットの実力が強く反映される機体。パイロットにより強弱が色濃く反映するMSとなつた。  
セカンドステージシリーズ

S S Sの各パイロットは、明日の進水式と同時に正式にパイロット任命の発令が出されるという手筈になつていた。

最新鋭のMSのパイロットに選ばれるというのは名誉なことであり、自分はエースなんだという意識を持たせることによる士気高揚の狙いもあつた。

つまり、OURANOSにもパイロットが内定していた。だからこ

そ、先程のは本来のパイロットを乗せるべきではないかという制止だつたのだ。

だが、レオハルトが言つたように今は緊急事態。こんな時にわざわざ本来のパイロットを呼んでいる暇などあるはずもない。

レオハルトはハンガー内を歩行し外へと出るが、見える範囲内に姿は無かつた。レオハルトはレーダーが表示されたモニターを確認。現在位置から2時の方向にGAI A、そして友軍の1機のZAKUが向かい合つてることを理解する。

レオハルトは左右のフットペダルを踏み込む左の操縦桿を奥へと倒すと、OURANOSの各部のスラスターが一斉に火を噴き宙へと飛び上がる。

レオハルトの視線の先には、1機のZAKUが敵機となつたGAI Aと交戦。その後方に、ヴァジュラを手にしたCHAOSが現れたところだつた。

距離はまだある。だが、このままでは撃墜の可能性が高い。レオハルトはシートの後ろからスナイパーカメラを引っ張り右目で照準器を覗く。

敵に狙いが付くと、レオハルトはすぐに左手の人差し指にかけられた引き金を引く。だが、発射されたビームはCHAOSの進行方向に着弾した。

ビームが着弾する瞬間、CHAOSのコックピット内に鳴り響くアラート。仲間のGAI Aと交戦中だつたZAKUに意識が向いていたが、すぐに反応しCHAOSはスラスターを噴射し後方へと距離を取りつた。

一斉にその場にいた3機の意識が新たに現れたMS、つまりレオハルトの乗るOURANOSへと向けられる。

「調整が甘い！」

CHAOSを牽制するという主目的ではあつたが、狙いは確かにCHAOSに付いていたビームは結果的にはズレた位置に着弾。

レオハルトはスナイパー・カメラを右手で強引にどけると、調整不足を口にしつつ再びキーボードを引っ張り出す。右手だけでキーボー

ドを叩き、今の照準のズレを考慮しOSの射撃関連の部分を修正。

その間も左手は引き金を引き、CHAOSを牽制。OSの修正が終わりレオハルトはキーボードを片付けると、レオハルトは操縦桿をさらに奥へと押し込む。

レオハルトはビームライフルをサイドスカートにマウント。両腰部に装備されている“MA-M941/S”ヴァジュラビームサーべル”を右手で抜剣し、距離を詰めたCHAOSに斬りかかる。

「おらあつ!!」

CHAOSのパイロットが氣勢の声を上げ、上段から振り下ろされたOURANOSのヴァジュラとぶつかり合い火花がスパークする中、レオ

ハルトは右の操縦桿をわずかに押し込む。

瞬間、くの字の逆に曲げられたOURANOSの右膝がCHAOSのコツクピット部分に直撃する。

「ぐあつ!!」

「ステイング！お前！」

OURANOSの強烈な膝蹴りで吹っ飛ぶCHAOS。突然の乱入者に混乱していたが、仲間が攻撃を受けたことで混乱から立ち直ったGAIAsのパイロット。

転倒したCHAOSを助けようと、目の前のZAKUを無視して動いた瞬間、実体弾の攻撃を受ける。

VPS装甲によりダメージは無効化されたが、衝撃により機体はよろめきGAIAsのパイロットはどこからの攻撃かと思い周囲を見渡す。

「!？」

YFX-M56CORE SPLENDORである。ZGMF-X56S IMPULSEの中核を成す独立型コツクピット。

戦闘力こそ高くないものの、パイロットの生存率の向上に寄与している。前大戦において有能なパイロットを損失したことから導入された機構で、射出座席の延長線上にある装備となっている。

コアスプレンダーに装備されている兵装は2種類。“MMI-G

A U 1 9 2 0 m m 機関砲”、”Q F 9 0 8 航空ミサイルラン

チャード”である。

G A I A を攻撃したのは、”Q F 9 0 8 航空ミサイルランチャード”に装填されている”A G M 3 3 レディバード誘導ミサイル”である。

コアスプレンダーに追従するようにして飛来してきたのは、上半身を構成するチエストフライヤー、下半身を構成するレッグフライヤー。

I M P U L S E は異なる3つのブロックを合体することでMS形態を成す。パイロットであるシン・アスカは、発せられる誘導ビーコンを目印にこれまで何十回、何百回と繰り返してきた訓練を思い出し、手慣れた様子で合体させる。

そして最後に飛来してきたのは、ソードシエルエット。ソードシエルエットを装備した、Z G M F — X 5 6 S /  $\beta$  S W O R D I M P U L S E へと姿を変える。

対艦・対MSの格闘戦を想定した格闘戦用装備で真価を發揮する。V P S 装甲は白と赤が基調の色調へと変化。

シンはS W O R D I M P U L S E の主武装である”M M I — 7 1 0 エクスカリバー レーザー対艦刀”を両手に持ち地上に降り立つ。

「シン、そちらは任せる。機体は撃墜しても構わない。無理に鹵獲しようと考える必要は無い」

「はい！」

レオハルトは通信をつなげシンにそう伝える。

正体は不明だが敵に奪われた以上、【Z A F T】の最新鋭機であるとはいえすでに敵機である。鹵獲を目的とした場合、必然的に攻撃の手が多少なりとも緩むことは否めない。

その結果、敵を逃がしてしまい軍事機密が漏洩してしまっては意味がない。ならば、確實に撃墜して機密を守るべきだろう。

最も、そう思わない人間もいるであろうこととは、レオハルト自身も承知していることではある。この件で万が一、シンが何か言われ

た場合はレオハルトは自身の持てる権限と権力を使つて護るつもりでいる。

しかし、レオハルトとしてはその方が一は無いだろうとは考えている。その時は、ギルが止めるだろう、と。

GAI Aはシンに任せ、レオハルトはCHAO斯へと意識を集中する。

レオハルトに任された通り、シンはレオハルトと対峙する CHAO斯を一瞥し GAI Aを睨み付ける。

「何なんだよ、お前らは！ 何で、何でこんなことを！」

平和な世界を再び乱すような敵に、シンは怒りで表情を歪ませ操縦桿を握る手に思わず力が入る。

「また戦争がしたいって言うのかよ、あんたたちは!!」  
シンの瞳に、平和を乱す敵への怒りの炎がゆらゆらと燃えていた。

# Operation — 8 戦火を呼ぶ者

レオハルトはやや長めのヴァジユラを構え、CHAOSへとスラスターを噴射に向かっていく。再び互いのヴァジユラがぶつかり合い、火花が炸裂する。

だが、OURANOSはS S Sの中でも屈指のパワーを持つている。

最初の斬り結びでOURANOSとの出力差に気付いたCHAOSのパイロットは、ぶつかり合いを嫌い後方へと退く。

「ちいっ！」

だが、そんなことは開発に多少なりとも関わったレオハルトなら百も承知。単純なパワー差で敵を押し切り、撃墜。鹵獲できれば尚良いのだが、欲張り過ぎても良くない。

内心そう考えながら、レオハルトは退がるCHAOSを追う。

「ちいっ！くそっ、アウルッ！」

CHAOSのパイロットは、出力差を理解した上でクレバーな戦い方をしてくるレオハルトに歯噛みしつつ、ハンガーの破壊をしているABYSSのパイロットの名前を呼ぶ。

その間もレオハルトが振ったヴァジユラをシールドで防ぎ、わずかに後退しサーベルを受け流す。お返しとばかりに右手のヴァジユラを振る。

だが、レオハルトは機体を時計回りで回転。振り下ろされたサーベルを回避すると同時に、右脚でCHAOSの頭部に回し蹴りを喰らわせる。

衝撃で機体が吹っ飛び、コックピット内も激しく揺さぶられパイロットも苦悶の表情を浮かべる。レオハルトは回し蹴りを喰らわせる。右脚が地面に着くと同時にスラスターを噴射。

転倒したCHAOSを仕留めようとした瞬間、OURANOSのコックピット内にアラートが鳴り響く。

レオハルトはCHAOSへの攻撃を中断し、即座にその場を跳躍。

瞬間、先程までOURANOS『ウラノス』に、ABYSSの胸部に内蔵された大出力ビーム砲『MGX-2235 カリドウス複相ビーム砲』が発射される。

レオハルトはサイドステップで回避。だが、ABYSSが猛スピードで突っ込んでくると、『MX-RQB516 ビームランス』を勢い良く振り下ろす。

レオハルトは後方に下がりつつヴァジュラを収納して空いた右手に、サイドスカートにマウントしていたビームライフルでABYSSに向けて3度引き金を引き牽制射撃。ABYSSの接近を許さない。「くそつ、どうなつてんだ！こいつも、あいつも！新型は3機だろう！何の情報も……！」

CHAO斯のパイロットは、ABYSSと交戦を始めたOURANO斯。そして、GAIアと交戦中のIMPULSEを睨む。

新型は3機。彼ら強奪犯が新型機がここにあること、3機は存在すること。一体どこから情報を得たのか定かではないが、何故かOURANOSとIMPUSEの存在は知らない。

謎が多いが、想定外の事態にCHAO斯のパイロットは舌打ちし再びOURANOSを睨み付けると、ABYSSとOURANOSの戦闘に加わるのだった。

時間は少々戻り、OURANOSとCHAO斯が交戦を開始した時刻。

同じように、IMPULSEパイロットのシン・アスカも、GAIアと交戦を開始。

シンは両手の『MMI-710 エクスカリバー レーザー対艦

「何やつてんだよ、ステイング！」  
「うるせえ！」

刀”を柄の部分で連結したアンビデクストラスフォームと呼ばれる形態を取り、GAI Aに迫りエクスカリバーを勢いよく振り下ろす。初撃はサイドステップで回避されるが、シンはエクスカリバーを振り回すと振り下ろしたのは逆のエクスカリバーでGAI Aを斬りつける。

だが、GAI Aのパイロットも素早い反応を見せる。シールドで防ぎつつ後方へと跳ぶことで勢いを軽減させる。

GAI Aは宙へと跳躍しビームライフルで攻撃するが、シンは左腕に装着されたシールドで防御。エクスカリバーを左手だけで保持し、右手で腰にマウントしていた “MA-BAR72 高エネルギービームライフル”で攻撃。

宙で1発、着地したところでもう1発撃つが、GAI Aは機動性を発揮し再び跳躍して回避。GAI Aは宙で四脚のMA形態へと変形。

MA形態においては砂漠や密林での高い運動性、悪路走破性を駆使した一撃離脱戦法や対艦戦闘、近距離戦闘を得意とする。

四脚歩行形態の元となつたTMF/A-802 BuCUEよりも、当然ながら攻撃力・防御力ともに強化されている。

GAI AがMA形態で着地したのを見て、シンはアンビデクストラスフォームを解き両手にエクスカリバーを手にするとスラスターを噴射しGAI Aと距離を詰める。

「何!?

まさか向かってくるとは思つてなかつたのか、GAI Aのパイロットは驚きの声を上げる。両者が交錯する瞬間、GAI Aは機体をひねりエクスカリバーの斬撃を回避。

背部に2門装備された “MA-81R ビーム突撃砲”を発射。再びシンは左腕のシールドで防ぐと、右手のエクスカリバーを投擲。投擲されたエクスカリバーはGAI Aへの直撃コース。だが、MA形態ではシールドは使えない。GAI A素早くMS形態へと戻りシールドで防ぐ。

「こいつ!」

強力な攻撃を防いだ衝撃で機体が吹き飛ぶ中、GAI Aのパイロットはシンへの悪態を吐く。

GAI Aはバーニアを噴かし着地すると、GAI Aの横にシールドで防がれたエクスカリバーが地面に刺さる。

「シン！ 命令は捕獲だぞ！ 分かっているのか、あれは我が軍の！」

「分かつてます！ でも、逃げられるくらいなら撃墜しますよ！ 機密漏洩と比べるまでも無いでしょ！」

その時、交戦するシンに通信がつながる。サブモニターに黒服の男が映し出されると、シンの撃墜を前提とした行動に注意が入る。

だが、シンの返事は焦りからか早口ではあるものの、非常に現実的な答えだった。

以前、シンたち3人はレオハルトによるMS教練を受けていた。当然ながらそれだけではなく、レオハルトは自分がこれまでに培つてきた知識や技術などを可能な限り3人に教えた。

無論、レオハルト自身もそれが必ずしも正しいことだとは思っていない。人間の数だけ違う考え方があるのだから、理解し納得したものだけを自分の中に落とし込むように、ということは伝えていた。

レオハルトの言葉を、シン自身が理解し納得したものを自分の中に落とし込んでいった結果、今のシンに落ち着いたということなのだろう。

シンの言葉にたじろぐ黒服の男。シンは話は終わつたとばかりに通信を切ると、再びGAI Aとの距離を詰めるのだった。

そして同時刻。

依然として、CHAOSSとABYSSの2機を相手取るレオハルト。

レオハルトは敵のことを内心ながら称賛する。少数で敵地に潜入し、初見のMSを使う。これは極めて難しいことだろう。

だが、敵のパイロットたちは【プラント】の最新鋭のMSを使っている。恐らく、並のコーディネイターより能力は上。ヘタすると、パイロットに内定していた人間より巧く使っているのではないか

とさえ思つてしまふ程だつた。

個人の能力は高いが、連携の腕はまだまだ未熟と感じていた。現に、 $A_B Y S S$ の攻撃が雑になり、少しづつスタントプレーが目立つようになつてきたのだ。

「しつこいつてんだよ！」

「アウル！」

急速に接近してきた $A_B Y S S$ のビームランスの振り下ろしを後方へと跳躍しつつ、レオハルトは引き金を引く。発射されたビームは、間に割つて入つた $C_H A O S$ がシールドで防御。

$C_H A O S$ はビームを防ぐとすぐに上空へと跳躍。瞬間、後ろにいた $A_B Y S S$ がカリドウスを発射。 $C_H A O S$ をブラインド代わりにした攻撃だつた。

レオハルトはブラインド攻撃に少々驚きつつも難なく回避。苛立ちが募つてきてゐるとはいゝ、未だに連携は忘れていないようだつた。レオハルトは狙いがやや外れていることを残念に思いつつ操縦桿を倒す。

レオハルトはシールドを投げ捨て左手でヴァジユラを抜剣すると、左の操縦桿を倒し $O_U R A N O S$ の各部のスラスターが火を噴かせた瞬間、突如としてアラートが鳴り響く。

レオハルトが上に視線を向けると、ヴァジユラを手にした $C_H A O S$ が上空から斬りかかってきたのだ。

「つ！」

レオハルトも同じようにヴァジユラをぶつけ防ぐと、いつの間にか $A_B Y S S$ がレオハルトの後方へと回つていた。

「アウル！」

「もらつたあーっ!!」

再びコックピット内に鳴り響くアラート。だが、レオハルトはこの状況でも冷静だつた。すでに $A_B Y S S$ は距離を詰めており、ビームライフルを構える余裕は無い。

レオハルトはビームライフル手放し、右手にもヴァジユラを抜くと $A_B Y S S$ が振り下ろしたビームランスを受け止める。

「なつ!?

「こいつ!?

通常のMSに比べて大きい出力を持つCHAOSとABYSSの攻撃を受けつつも、押し切られない。むしろ、徐々にではあるが押し返しつつある。

その時、CHAOSとABYSSのコツクピットにアラート音。視線を向けると、迎撃に出てきたAMF-101 DINNが攻撃を加えてきた。

CHAOSとABYSSは同時にOURANOSと距離を取るが、CHAO斯は再びOURANOSに攻撃を。

ABYSSは両肩のシールド裏面に内蔵された“MA-X223E 3連装ビーム砲”を発射。攻撃範囲が広いため拠点攻撃を目的として搭載された装備。

攻撃範囲が広いという目的通り、3機編成でやつてきたDINNを同時に撃墜したのだ。

だが、さらにその後ろからはまた別の編隊をABYSSのレーダーが捉える。ABYSSのパイロットは苛立ちと不快感を露わにするかのように舌打ちをする。

「ステイング、次から次へと限りが無い。パワーの問題もある」「……くそつ！」

その時、アーモリーワン全体が激しく揺れ振動する。

一同は驚きつつも、揺れの正体にレオハルトはいち早く気付いた。  
「（外からの攻撃？港か。まさか、こいつらの友軍？）

レオハルトはこの揺れが外からの攻撃であると同時に、もしかして強奪犯の仲間なのではないかと推理する。

実際にレオハルトの推理は当たっており、港が攻撃され大爆発。港に駐留していたナスカ級やローラシア級は大損害を被り、港が復旧するまではかなりの時間を要するほどの被害を受けていた。

そんな中、「プラント」側の人間とは違い強奪犯はこの揺れに別の意味を見出していた。

「ステイング、今の」

「ああ、お迎えの！時間だろ！」

「遅刻。置いてかれるぜ？」

「お前も手を貸せ！こいつが!!」

今**の爆発**は強奪犯たちにとつて、迎えの時間を知らせるアラーム音の様なもの。かなり荒っぽい方法ではあるが。

**A B Y S S**のパイロットの言葉に、**C H A O S**のパイロットは**O U R A N O S**の振り下ろされたヴァジュラをいなし、反撃しつつ答える。

**A B Y S S**のパイロットの言葉に**C H A O S**のパイロットは苛立たし気に答えていると、突如として**O U R A N O S**の戦闘姿勢が攻撃的なものに変わる。

今までレオハルトは時間を稼いで友軍の到着を待ち、数で包囲し撃墜または鹵獲しようとと考えていた。だが、今の揺れでレオハルトはその考えを改める。

今まで隠れていたであろう強奪犯の友軍が恐らくは港を攻撃し、我々の追撃を潰した。つまり、もうこれ以上はこの海域に長居するつもりは無い。レオハルトは敵の撤退の意を感じたのだ。

ならば、友軍の到着を待つている時間も無い、とレオハルトは考え撃墜の確たる意思を持つて攻勢に移る。

「アウル、離脱するぞ！援護しろ！ステラ、そいつを振り切れるか！」

「すぐに墜とす！」

**C H A O S**のパイロットが離脱を宣言し、**I M P U L S E**と交戦する**G A I A**のパイロットは撃墜すると強い口調で宣言。

今まで以上の激しい攻撃で**I M P U L S E**を撃墜しようと試みるが、シンは**C H A O S**と**A B Y S S**が離脱の動きをしている気配を感じて焦りを覚え始めていた。

だが、ここで焦つて攻撃を急いては離脱されるだけではなく、自身の撃墜の可能性もある。シンは多少の焦りを覚えつつも、**G A I A**の攻撃を受け流し合間合間に反撃しつつ絶好の機会をうかがう。

そして**C H A O S**と**A B Y S S**は相互援護し宙へと浮かび、**プラ**

ント」の側面へと飛んでいく。レオハルトは放棄したシールドとビームライフルを回収するとすぐに後を追い、後ろから攻撃を仕掛ける。

C<sub>カ</sub>H<sub>オ</sub>A<sub>ス</sub>O<sub>ス</sub>SとA<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sへ発射された精確な4連射を、左右移動や機体のバレルホールなどで難なく回避。

すると、A<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sが突然機体を反転。3連装ビーム砲を発射。だが、レオハルトはビームの間をすり抜けA<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sとの距離を詰め、ヴァジユラを横に振るつた。

だが、A<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sは機体を後ろに傾けることで回避。そしてその先には、ビームライフルを構えたC<sub>カ</sub>H<sub>オ</sub>A<sub>ス</sub>Sの姿。

「！」

レオハルトが目を見開いて驚いた瞬間、ビームが発射される。驚いたとはい、レオハルトは冷静さを失つたわけではない。

レオハルトは首を傾けて回避すると、A<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sの追撃を避けるため距離を取る。

「（C<sub>カ</sub>H<sub>オ</sub>A<sub>ス</sub>Sが巧くA<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sをカバーしている。手強い）」「（ちいっ！この新型、厄介だな。攻撃が巧く躱される。こいつを墜とすのは骨だな）」

やや直情的な傾向が見られるA<sub>ア</sub>B<sub>ビ</sub>Y<sub>ス</sub>Sを、冷静なC<sub>カ</sub>H<sub>オ</sub>A<sub>ス</sub>Sが巧く立ち回りカバー。共に決定機を作り出すも、片方は経験と技術で乗り切り、片やコンビネーションでレオハルトの攻撃を躱す。

両者が考えていることは同じ。手強い、ということだつた。

その頃、G<sub>ガ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ア</sub>Aは、というと依然として地上でI<sub>イ</sub>M<sub>ン</sub>P<sub>ル</sub>U<sub>ル</sub>L<sub>ス</sub>Sに苛烈な攻撃を加えていた。

「墜ちろーっ！」

G<sub>ガ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ア</sub>Aは空中でM<sub>ア</sub>Aへと変形すると、"MR—Q17X グリフオ<sub>ス</sub>N2ビームブレイド"でI<sub>イ</sub>M<sub>ン</sub>P<sub>ル</sub>U<sub>ル</sub>L<sub>ス</sub>Sとのすれ違い様に斬りつける。

シンはI<sub>イ</sub>M<sub>ン</sub>P<sub>ル</sub>U<sub>ル</sub>L<sub>ス</sub>Sを屈ませて避けると、走り去つていくG<sub>ガ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ア</sub>Aにビームを撃つ。だが、G<sub>ガ</sub>A<sub>イ</sub>I<sub>ア</sub>Aは倒壊しかけている建物の陰に入りビームを回避。

再び建物の陰から出て来た時にはMS形態へと戻り、振り下ろされ

たヴァージュラとIMPLSEのエクスカリバーとぶつかる。

「くつそーつ!!」

シンは左手にしていたエクスカリバーを突き刺そうとするが、GAI Aは素早く距離を取る。今度は正面からではなく、シンから見て左側に回り込み再びヴァージュラを振り下ろす。

CHAOSとABYSSが地上から離れ離脱の動きを見せているのに、依然としてIMPULSEと積極的な戦闘を続けるGAI A。

そんなGAI Aを見て、CHAOSのパイロットは苛立たし気に声を荒げる。

「ステラ、もういい！離脱だ!! 合流しろ!!」

「墜ちろ！墜ちろ！墜ちろーっ!!」

CHAOSはレオハルトを相手に時間稼ぎを行い、ABYSSは追撃部隊を攻撃してIMPULSEの増援に行けないように援護している。

CHAOSが戦闘を切り上げて早く合流するように促すが、その声は届いていないのかGAI AはIMPULSEとの戦闘を続行する。「じゃあ、お前はここで『死ね』よ！」

「つ!？」

「アウル！この馬鹿野郎!!」

「しようがないじyan。止まんないんだから」

その様子にイライラが爆発したのか、ABYSSのパイロットが酷く突き放す言葉を投げかける。その瞬間、今まで激しく動いていたGAI Aが停止し棒立ちになる。

CHAOSのパイロットが狼狽した様子でABYSSのパイロットの言葉を咎めるが、どこ吹く風といった感じで反省している様子では無かつた。

「くそつ!!」

理由は分からぬが突然動きを停止したGAI A。その好機を見逃すわけもなくエクスカリバーで斬りかかろうとする。

だが、CHAOSのパイロットはどうしようもない苛立チを口にしつつレオハルトを蹴り飛ばすと、ビームでIMPULSEの攻撃を許

さない。

「ステラ!!」

「死ぬ、いや……。死ぬのはダメ……。いやあああああ!!」

表情は蒼白になり両手で身体を抱きしめうわ言の様に呟いている  
と、突然悲鳴を上げ GAI<sup>ガ</sup>IA<sup>イ</sup>A<sup>ア</sup>は地上から飛び立ち、レオハルトや  
CHAO<sup>カ</sup>S<sup>オ</sup>、ABYSS<sup>ア</sup>S<sup>ビ</sup>S<sup>ス</sup>を無視してプラント内部の側面部へと飛んで  
いく。

「結果オーライだろ?」

ABYSS<sup>ア</sup>S<sup>ビ</sup>S<sup>ス</sup>のパイロットの皮肉めいた言葉に、顔は見えないが不敵な  
笑みをしていることが容易に想像でき、CHAO<sup>カ</sup>S<sup>オ</sup>のパイロットは眉  
を顰める。

結果が良かろうと、過程が最悪ではないかと。

だが、今はそんなことを考えている余裕は無い。眼前には厄介な新型  
型がおり、視線をずらすと GAI<sup>ガ</sup>IA<sup>イ</sup>A<sup>ア</sup>を追つてきたもう1機の新型が  
やって来たのだ。

すでに作戦予定期刻は大幅に過ぎ、恐らくは友軍も守備隊と交戦を  
しているはず。可能な限りこの場を速やかに脱出するため、  
CHAO<sup>カ</sup>S<sup>オ</sup>のパイロットは気合を入れ直す。

レオハルトはやや焦りを覚えつつ、自身と対峙する CHAO<sup>カ</sup>S<sup>オ</sup>を見  
据えるのだった。